

青木遺跡 II

(弥生～平安時代編)

国道431号道路改築事業（東林木バイパス）

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

第1分冊（弥生時代）



2006年3月

島根県教育委員会

青木遺跡 II

(弥生～平安時代編)

国道431号道路改築事業（東林木バイパス）

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

第1分冊（弥生時代）



2006年3月

島根県教育委員会



卷頭圖版二 墨書土器



卷頭図版三
木簡



卷頭図版四
絵馬・土馬



卷頭図版五 石敷き井泉遺構（I区・SE01）



卷頭図版六

方形貼石区画と掘立柱建物



卷頭図版七 四隅突出型墳丘墓



上段：1号墓
下段：4号墓

卷頭図版八

銅鐸片・人骨



1号人骨



6号人骨



7号人骨

序

島根県教育委員会では、島根県土木部から委託を受けて国道431号道路東林木バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査をおこなっています。本書は、平成13年度から平成15年度にかけて実施した青木遺跡の発掘調査を記録したものです。すでに平成16年3月には『青木遺跡（中近世編）』を刊行し、平安時代末から中世にかけての成果をまとめていますが、本書はその続編として弥生時代から平安時代にかけての成果を中心に掲載しました。

この調査では広く注目を集める新発見が重なりました。弥生時代では全国初となる埋葬人骨に添えられた銅鐸破片が出土したほか、出現期にあたる四隅突出型墳丘墓がみつかりそのルーツに関する議論に一石を投じました。また、奈良・平安時代では神像・絵馬などの祭祀遺物や神社施設とみられる遺構群とともに、1105点の墨書き土器と86点の木簡という大量の文字資料が出土しています。こうした成果は当地に暮らした人々の営みをなまなましく伝えるものであり、これまで描かれていた地域社会像に見直しをせまる大きなきっかけとなりました。本書が地域の歴史文化に対する関心を高めるための一助となることを願っています。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にあたりご協力をいただきました地元の皆様、出雲市、島根県土木部をはじめとする関係の方々に対しまして心から御礼申し上げます。

平成18年3月

島根県教育委員会

教育長 広 沢 卓 翠

例　　言

1. 本書は島根県土木部道路建設課の委託を受けて、島根県教育委員会が平成14～15年度に実施した国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 本書が対象とする発掘調査地は下記のとおりである。

島根県出雲市東林木町400 1他　青木遺跡　I区・ⅡB区・Ⅳ区

3. 調査組織は次のとおりである。

◇調査主体　島根県教育委員会

◇平成14年度　（現地調査）

〔事務局〕穴道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、ト部吉博（副所長）

内田　融（総務課長）、坂本淑子（総務係長）

〔調査員〕今岡一三（調査第1係長）、伊藤智（文化財保護主事）

松山智弘（臨時職員）、石橋弥生（同）、永井宏子（同）、岩橋康子（同）

守山博義（同）、梶谷泰子（同）、柴崎晶子（同）

◇平成15年度　（現地調査）

〔事務局〕穴道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、ト部吉博（副所長）

水島静司（総務課長）、西尾克己（調査第1課長）

〔調査員〕今岡一三（主幹）、松尾充晶（主事）

松山智宏（臨時職員）、永井宏子（同）、村尾俊樹（同）、保科邦彦（同）

◇平成17年度　（報告書作成）

〔事務局〕ト部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、永島静司（総務グループ課長）

川原和人（調査第1グループ課長）

〔調査員〕今岡一三（主幹）、松尾充晶（文化財保護主事）

石橋弥生（臨時職員）、永井宏子（同）、池田恵理（同）

4. 墓石器・木簡の検討は調査指導者の助言を得て平石光（島根県古代文化センター主任研究員）がおこなった。

5. 発掘調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々から御指導・御助言・御協力をいただいた。芳名を記して深甚の謝意を表す次第である。（五十音順、敬称略）

浅川滋男、淺沼毅、伊藤実、井上貴央、井上寛司、榎村寛之、岡田莊司、加藤友康、北島大輔、

金田章裕、黒田龍二、小林謙一、佐古和枝、佐藤信、篠原祐一、梶山林繼、閔和彥、辰巳和弘、

田中義昭、長坂一郎、中村唯史、中村倫子、難波洋三、蓮岡法暉、早川万年、林一馬、

春成秀爾、東村純子、平川南、藤沢彰、藤田憲司、町田章、的野克之、南木勝彦、牟禮仁、

山田昌久、山田康弘、山中章、山中敏史、山根洋右、渡辺晃宏、渡邊貞幸

大寺奉賛会、出雲市文化財課

6. 本文の執筆分担は次に示した。

7. 本書掲載の出土遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

凡　　例

1. 押図で使用した方位は測量法による第3座標系X軸方向を指し、平面直角座標系XY座標は日本測地系による。レベル高は海拔高を示す。
2. 表記に用いた遺構略号は以下のとおり。
SB:建物、SD:溝、SE:井戸、SK:土坑、DT:土器洞まり、IJ:石敷き、SX:その他の遺構
3. 遺物実測図中の網掛けのうち、特に注記の無いものは赤色塗彩が施されている範囲を示す。
4. 遺物実測図で断面を黒塗りしているものは須恵器であることを示す。
5. 遺物觀察表に記載した土器の色調は、基本的に下記の分類基準による。



本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	
第1節 遺跡の地理的環境(松尾) 1
第2節 遺跡の歴史的環境(松尾) 4
第2章 調査の経過	
第1節 調査経過の概要(今岡) 21
第2節 発掘作業の経過(今岡) 23
第3節 整理作業の経過(今岡) 25
第3章 弥生時代の成果の概要	
第1節 基本順序と遺構面の状況(松尾) 27
第2節 遺構の概要(今岡・松尾) 28
第3節 遺物の概要(松尾) 31
第4章 弥生時代・遺構の詳細	
第1節 四隅突出型墳丘墓・貼石墓	
1. 1号墓(今岡) 37
2. 2号墓(今岡) 61
3. 3号墓(松尾) 71
4. 4号墓(今岡) 88
5. 5号墓(今岡) 106
6. 6号墓(今岡) 109
7. 7号墓・8号墓・9号墓(松尾) 115
8. 10号墓(松尾) 124
9. 11号墓・12号墓(松尾) 132
第2節 土塙墓の人骨	
1. 1号人骨(今岡・松尾) 142
2. 2号人骨～8号人骨(今岡) 143
9. 9号獸骨(今岡) 144
10. 10号人骨～12号人骨(松尾) 145
13. SK03・SK04(松尾) 145
第5章 弥生時代・遺物の詳細	
第1節 包含層出土弥生土器(今岡) 165
第2節 土製品	
1. 分銅形土製品(池田) 244
2. 管状土錘・土玉・紡錘車・有孔円盤(松尾) 251
第3節 石器・石製品(松尾) 259
第4節 鹿角製品(松尾) 280
第6章 古墳時代・遺構と遺物	
第1節 遺構の詳細(今岡) 285
第2節 包含層出土の遺物(松尾) 297

挿図目次

第1図	青木遺跡の位置	1
第2図	出雲地方の地形図	2
第3図	青木遺跡と周辺の地形	3
第4図	出雲平野周辺の主要遺跡	5
第5図	青木遺跡と周辺の遺跡	7
第6図	島根半島西部の横穴式石室の型式分布	9
第7図	遺跡周辺の郷の位置関係	10
第8図	出雲郡・神門郡の遺跡分布と交通路	11
第9図	青木遺跡と大寺周辺の遺跡	13
第10図	大寺谷出土・軒丸瓦	15
第11図	大寺三藏遺跡出土遺物	15
第12図	調査区およびトレーニング配置図	22
第13図	青木遺跡・調査区配置図	24
第14図	基本層序模式図	27
第15図	弥生時代の遺構全体図	32
第16図	I 区 弥生時代の遺構配置図	33
第17図	IV 区 弥生時代の遺構配置図	34
第18図	I 区 北壁土層断面図	35
第19図	1号墓実測図	41・42
第20図	1号墓北東突出部実測図	43
第21図	1号墓南東突出部実測図	44
第22図	1号墓南北突出部実測図	45
第23図	1号墓東辺・1号集石実測図	46
第24図	2号集石実測図	47
第25図	1号墓闕連遺物実測図①	53
第26図	1号墓闕連遺物実測図②	54
第27図	1号墓闕連遺物実測図③	55
第28図	2号集石出土遺物実測図	59
第29図	2号墓実測図	63
第30図	2号墓東辺・南辺実測図	64
第31図	2号墓土器出土状況図	65
第32図	2号墓出土遺物実測図	69
第33図	3号墓実測図①	74
第34図	3号墓実測図②	75
第35図	3号墓東辺列石実測図	76
第36図	3号墓北東突出部実測図	77
第37図	3号墓闕連遺物実測図①	84
第38図	3号墓闕連遺物実測図②	85
第39図	4号墓実測図	91・92
第40図	4号墓南西・北西突出部実測図	93
第41図	4号墓闕連遺物実測図①	100
第42図	4号墓闕連遺物実測図②	101
第43図	4号墓闕連遺物実測図③	102
第44図	5号墓平面図及び出土遺物実測図	107
第45図	6号墓実測図	110

第46図	6号墓関連遺物実測図	113
第47図	7・8・9号墓実測図①	117
第48図	7・8・9号墓実測図②	118
第49図	7・8・9号墓関連遺物実測図	122
第50図	10号墓実測図	127
第51図	10号墓関連遺物実測図①（被覆土中出土）	129
第52図	10号墓関連遺物実測図②（基盤層中出土）	130
第53図	11号墓・12号墓実測図	134
第54図	12号墓実測図	135
第55図	12号墓関連遺物実測図	140
第56図	1号人骨実測図①	147
第57図	1号人骨実測図②	148
第58図	2号・3号・5号人骨実測図	150
第59図	6号・7号・8号人骨、9号獣骨実測図	151
第60図	10号・11号・12号人骨実測図	152
第61図	SK03（上）・SK04（下）実測図	161
第62図	SK04出土遺物実測図	164
第63図	包含層出土弥生土器①（I区12層）	184
第64図	包含層出土弥生土器②（I区12層）	185
第65図	包含層出土弥生土器③（I区12層）	186
第66図	包含層出土弥生土器④（I区12層）	187
第67図	包含層出土弥生土器⑤（I区12層）	188
第68図	包含層出土弥生土器⑥（I区11層）	189
第69図	包含層出土弥生土器⑦（I区11層）	190
第70図	包含層出土弥生土器⑧（I区11層）	191
第71図	包含層出土弥生土器⑨（I区11層）	192
第72図	包含層出土弥生土器⑩（I区11層・層位不明）	193
第73図	包含層出土弥生土器⑪（I区10層）	194
第74図	包含層出土弥生土器⑫（I区サブトレ内）	195
第75図	包含層出土弥生土器⑬（I区サブトレ内）	196
第76図	包含層出土弥生土器⑭（I区サブトレ内）	197
第77図	包含層出土弥生土器⑮（IV区7層、Y20グリッド）	198
第78図	包含層出土弥生土器⑯（IV区7層、Y20グリッド）	199
第79図	包含層出土弥生土器⑰（IV区7層、Y21グリッド）	200
第80図	包含層出土弥生土器⑱（IV区7層、Z19、Z21）	201
第81図	包含層出土弥生土器⑲（IV区6層、X21グリッド）	202
第82図	包含層出土弥生土器⑳（IV区6層、X21グリッド）	203
第83図	包含層出土弥生土器㉑（IV区6層、X21グリッド）	204
第84図	包含層出土弥生土器㉒（IV区6層、X21グリッド）	205
第85図	包含層出土弥生土器㉓（IV区6層、Y21グリッド）	206
第86図	包含層出土弥生土器㉔（IV区6層、Y21グリッド）	207
第87図	包含層出土弥生土器㉕（IV区6層、Y20、Z19グリッド）	208
第88図	包含層出土弥生土器㉖（IV区6層、Z20グリッド）	209
第89図	包含層出土弥生土器㉗（IV区6層、Z20グリッド）	210
第90図	包含層出土弥生土器㉘（IV区6層、B21グリッド）	211
第91図	包含層出土弥生土器㉙（IV区6層）	212
第92図	分銅形土製品実測図①	247
第93図	分銅形土製品実測図②	248
第94図	管状土錘実測図①	255

第95図	管状土錘実測図②・土玉・紡錘車・有孔円盤実測図	256
第96図	石器・石製品実測図①	265
第97図	石器・石製品実測図②	266
第98図	石器・石製品実測図③	267
第99図	石器・石製品実測図④	268
第100図	石器・石製品実測図⑤	269
第101図	石器・石製品実測図⑥	270
第102図	石器・石製品実測図⑦	271
第103図	石器・石製品実測図⑧	272
第104図	石器・石製品実測図⑨	273
第105図	鹿骨製品実測図	281
第106図	I区占墳時代遺構配置図、3号集石実測図	286
第107図	4号集石実測図	287
第108図	4号集石出土遺物実測図①	291
第109図	4号集石出土遺物実測図②	292
第110図	4号集石出土遺物実測図③	293
第111図	占墳時代包含層出土遺物実測図①	301
第112図	古墳時代包含層出土遺物実測図②	302

写真図版目次

卷頭図版一	神像	
卷頭図版二	墨書き土器	
卷頭図版三	木簡	
卷頭図版四	絵馬・土馬	
卷頭図版五	石敷き井泉造構（I区・S E 01）	
卷頭図版六	方形貼石区画と掘立柱建物	
卷頭図版七	四隅突出型墳丘墓	
卷頭図版八	銅鐸片・人骨	
写真図版一	大寺薬師の仏像	14
写真図版二	航空写真／南から	17
写真図版二	航空写真／北から	18
写真図版四	航空写真／西から	19
写真図版五	航空写真／東から	20
写真図版六	弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／一号墓	48
写真図版七	弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／一号墓	49
写真図版八	弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／一号墓	50
写真図版九	一号墓関連遺物	56
写真図版一〇	一号墓関連遺物	57
写真図版一一	一号墓関連遺物	58
写真図版一二	二号集石出土遺物	60
写真図版一三	弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／二号墓	66
写真図版一四	弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／二号墓	67
写真図版一五	弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／二号墓	68
写真図版一六	二号墓出土遺物	70
写真図版一七	弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／三号墓	78
写真図版一八	弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／三号墓	79
写真図版一九	弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／三号墓	80

写真図版二〇	弥生時代の遺構／四隅突出型埴丘墓／三号墓	81
写真図版二一	弥生時代の遺構／四隅突出型埴丘墓／三号墓	82
写真図版二二	二号墓出土遺物	86
写真図版二三	二号墓出土遺物	87
写真図版二四	弥生時代の遺構／四隅突出型埴丘墓／四号墓	94
写真図版二五	弥生時代の遺構／四隅突出型埴丘墓／四号墓	95
写真図版二六	弥生時代の遺構／四隅突出型埴丘墓／四号墓	96
写真図版二七	弥生時代の遺構／四隅突出型埴丘墓／四号墓／土層断面	97
写真図版二八	四号墓闕連遺物	103
写真図版二九	四号墓闕連遺物	104
写真図版二〇	四号墓闕連遺物	105
写真図版二一	弥生時代の遺構／貼石墓／五号墓	108
写真図版二二	弥生時代の遺構／貼石墓／六号墓	111
写真図版二三	六号墓闕連遺物	114
写真図版二四	弥生時代の遺構／貼石墓／七・八・九号墓	119
写真図版二五	弥生時代の遺構／貼石墓／七号墓	120
写真図版二六	弥生時代の遺構／貼石墓／七・八・九号墓	121
写真図版二七	七・八・九号墓闕連遺物	123
写真図版二八	弥生時代の遺構／貼石墓／十号墓	126
写真図版二九	十号墓闕連遺物	130
写真図版二〇	十号墓闕連遺物	131
写真図版二一	弥生時代の遺構／貼石墓／十一号墓	136
写真図版二二	弥生時代の遺構／貼石墓／十二号墓	137
写真図版二三	弥生時代の遺構／貼石墓／十二号墓	138
写真図版二四	十二号墓闕連遺物	141
写真図版二五	一号人骨に伴う銅鋸飾耳	149
写真図版二六	弥生時代の遺構／一号人骨	153
写真図版二七	弥生時代の遺構／一号人骨	154
写真図版二八	弥生時代の遺構／一号・三号人骨	155
写真図版二九	弥生時代の遺構／五号・六号人骨	156
写真図版二〇	弥生時代の遺構／七号人骨・九号蹴骨	157
写真図版二一	弥生時代の遺構／十号人骨	158
写真図版二二	弥生時代の遺構／十一号人骨	159
写真図版二三	弥生時代の遺構／十二号人骨	160
写真図版二四	弥生時代の遺構／土壤墓／SK03	162
写真図版二五	弥生時代の遺構／土壤墓／SK04	163
写真図版二六	SK04出土遺物	164
写真図版二七	包含層出土弥生土器	213
写真図版二八	包含層出土弥生土器	214
写真図版二九	包含層出土弥生土器	215
写真図版二〇	包含層出土弥生土器	216
写真図版二一	包含層出土弥生土器	217
写真図版二二	包含層出土弥生土器	218
写真図版二三	包含層出土弥生土器	219
写真図版二四	包含層出土弥生土器	220
写真図版二五	包含層出土弥生土器	221
写真図版二六	包含層出土弥生土器	222
写真図版二七	包含層出土弥生土器	223
写真図版二八	包含層出土弥生土器	224

写真図版六九	包含層出土弥生土器	225
写真図版七〇	包含層出土弥生土器	226
写真図版七一	包含層出土弥生土器	227
写真図版七二	包含層出土弥生土器	228
写真図版七三	包含層出土弥生土器	229
写真図版七四	包含層出土弥生土器	230
写真図版七五	包含層出土弥生土器	231
写真図版七六	包含層出土弥生土器	232
写真図版七七	包含層出土弥生土器	233
写真図版七八	包含層出土弥生土器	234
写真図版七九	包含層出土弥生土器	235
写真図版八〇	包含層出土弥生土器	236
写真図版八一	包含層出土弥生土器	237
写真図版八二	包含層出土弥生土器	238
写真図版八三	包含層出土弥生土器	239
写真図版八四	包含層出土弥生土器	240
写真図版八五	包含層出土弥生土器	241
写真図版八六	包含層出土弥生土器	242
写真図版八七	包含層出土弥生土器	243
写真図版八八	土製品／分銅形土製品	249
写真図版八九	土製品／分銅形土製品	250
写真図版九〇	土製品／管状土錘	257
写真図版九一	土製品／管状土錘・紡錘車・土玉	258
写真図版九二	石器／石鐵・打製石斧・敲石・石皿	274
写真図版九三	石器／磨製石器／扁平片刃石斧・石包丁・石劍	275
写真図版九四	石器／紡錘車	276
写真図版九五	石器／磨製石器／石斧	277
写真図版九六	石製品／砥石	278
写真図版九七	石製品／玉類成晶・未成品・素材	279
写真図版九八	鹿骨製品	282
写真図版九九	鹿角製品	283
写真図版一〇〇	四号集石	288
写真図版一〇一	四号集石出土遺物	294
写真図版一〇二	四号集石出土遺物	295
写真図版一〇三	四号集石出土遺物	296
写真図版一〇四	古墳時代包含層出土遺物	303
写真図版一〇五	古墳時代包含層出土遺物	304
写真図版一〇六	古墳時代包含層出土遺物	305

表 目 次

第1表	四隅突出型埴丘墓・貼石墓一覧表	28
第2表	人骨・土被草一覧表	30
第3表	1号墓関連遺物 観察表①	51
第4表	1号墓関連遺物 観察表②	52
第5表	2号墓関連遺物 観察表	62

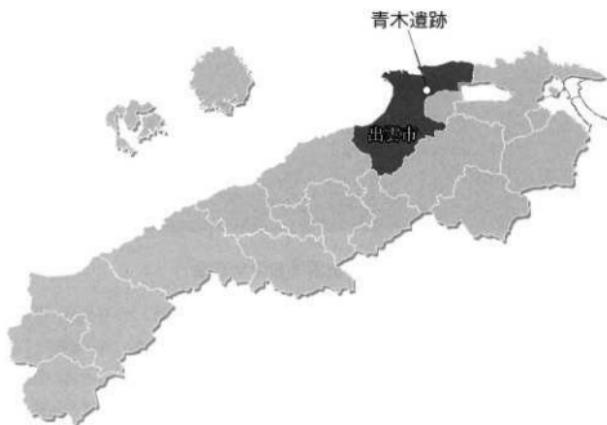
第6表	3号墓関連遺物 観察表	83
第7表	4号墓関連遺物 観察表①	98
第8表	4号墓関連遺物 観察表②	99
第9表	5号墓関連遺物 観察表	106
第10表	6号墓関連遺物 観察表	112
第11表	7・8・9号墓関連遺物 観察表	122
第12表	10号墓関連遺物 観察表	128
第13表	12号墓関連遺物 観察表	139
第14表	SK04出土遺物 観察表	146
第15表	包含層出土弥生土器 観察表①	170
第16表	包含層出土弥生土器 観察表②	171
第17表	包含層出土弥生土器 観察表③	172
第18表	包含層出土弥生土器 観察表④	173
第19表	包含層出土弥生土器 観察表⑤	174
第20表	包含層出土弥生土器 観察表⑥	175
第21表	包含層出土弥生土器 観察表⑦	176
第22表	包含層出土弥生土器 観察表⑧	177
第23表	包含層出土弥生土器 観察表⑨	178
第24表	包含層出土弥生土器 観察表⑩	179
第25表	包含層出土弥生土器 観察表⑪	180
第26表	包含層出土弥生土器 観察表⑫	181
第27表	包含層出土弥生土器 観察表⑬	182
第28表	包含層出土弥生土器 観察表⑭	183
第29表	分銅形土製品 観察表	246
第30表	管状土錐・紡錘車・有孔円盤 観察表	254
第31表	石器・石製品 観察表	264
第32表	4号集石出土遺物 観察表①	289
第33表	4号集石出土遺物 観察表②	290
第34表	古墳時代包含層出土遺物 観察表	300

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の地理的環境

遺跡の所在地

青木遺跡は島根県出雲市東林木町に所在する。出雲市は島根県東部に位置する県内第2の中核市で（第1図）、平成17年3月22日に出雲市と平田市、簸川郡大社町、同湖陵町、同多伎町、同佐田町が合併することによって人口14万8千人となった。遺跡が所在する出雲市東林木町は旧出雲市のなかでも北東端に位置しており、その東方わずか500mで旧平田市美談町となる。



第1図 青木遺跡の位置

出雲平野と河川

出雲市の地形は宍道湖西部に広がる出雲平野と、その北側に横たわる島根半島、南側の中国山地に連なる山林地形からなっている（第2図）。このうち出雲平野は東西約20km、南北約5kmの県内最大の平野である。有数の穀倉地帯であるとともに、築地松に囲まれた屋敷地が点在する風景が良く知られる。現在の出雲平野のほとんどは縄文時代の海進期には海域であったが、縄文後・晩期以降の海退と、三瓶火山の噴火活動、さらには注ぎ込む2大河川である斐伊川・神戸川の沖積作用などによって平野が形成されていく。特に縄文時代後期の三瓶火山の噴火活動は地形の変化に多人な影響を与え、その火碎物が山麓流や洪水流によって神戸川下流域に運ばれ、3m以上の厚さをもつ堆積となった。そうして流路が固定された神戸川の流域では安定した微高地が形成されるが、一方の斐伊川は八岐人蛇に擬せられるように、幾度となく洪水や流路の転換を起こした不安定な大河であった。

青木遺跡は北流する斐伊川が島根半島北山山系にぶつかり、東へと流れを変えるあたりに位置している（第4図）。斐伊川はその後山塊にそって東流し、宍道湖へ注ぐ。遺跡のある出雲市東林木町周辺は、斐伊川がもっとも北山山系に接近する地域であり、山裾と川上手に挟まれたわずか幅600mという極めて狭い低地が東西に延びている。このような現在みる斐伊川の流れは、江戸時代初めに起こった大洪水の結果固定されたもので、それ以前の斐伊川本流は逆に西へ流れをとり、平野の西半に大きく広がる潟湖「神門水海」へと注いでいた（第8図）。



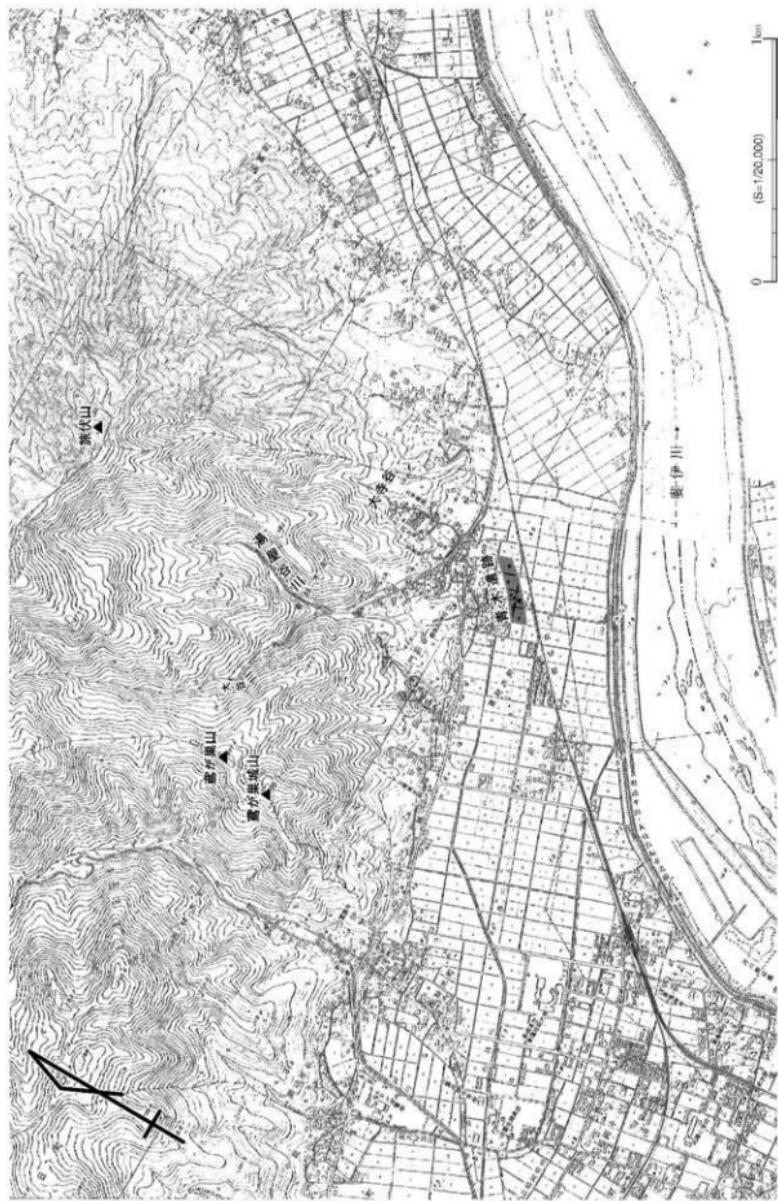
第2図 出雲地方の地形図

こうした出雲平野の古地形に関する研究は地質的データの蓄積により進展しつつあるが、平野東部の小水系については不明な点がなお多い。そのために古地形を復元した推定図には平野東部に河川が描かれず、安定した平地が広がっているように図示されるものが多い。しかしながら、現在のように本流の流路が東へと変わる以前にも、同様に東流して大道湖に流れ込む斐伊川支流があったであろうことが、近年の発掘調査や地質調査によって想定されるようになった。したがって、具体的な流路は特定できないながら、青木遺跡の立地は山系と川に囲まれた狭小な低地であったと考えられる。すなわち現在とそれほど立地環境が変わらない、と言えよう。なお、遺跡から大道湖の汀線までは現在約9kmあるが、これは斐伊川による冲積作用が大きく進んだ結果であり、古代以前においては東へ3km弱のあたりに汀線があったと想定される。

北山山系と小扇状地形

遺跡の北側にそびえる北山山系は、平地から急激に急傾斜の山肌がそびえたつ山塊である。遺跡のすぐ北には旅岱山（標高412m）が、北西には鷹が巣城山（同281m）が整った山容を誇り、出雲平野のどこからでも仰ぐことのできるランドマークとなっている（第3図）。東西に延びる北山山系の主稜線からは、複雑に入り組んだ尾根筋が平野に向いていくつも派生しており、その谷に沿って小河川が急傾斜で流れ下る。それぞれの小河川が平地に達するところには小規模な扇状地が形成され、微高地となって人々の生活空間となり集落が形成された。そうした作用をもたらす小河川のひとつが湯屋谷川である。今回発掘調査をおこなった地点は、主として湯屋谷川によって運ばれた土砂堆積物を基盤とする小扇状地上にあたる。その微高地の範囲は非常に小規模で、東西400m、南北300mほどである。調査地点は北山山系の山裾から300mほど離れており、こうした扇状地の南端部にあたる。現在の標高5.4~6.0mと低湿な環境であった。遺跡の北側には標高8.0m以上の高燥な微高地本体があり、ここから谷筋にかけて、現在でも集落が形成している。

遺跡の南方400mには斐伊川の堤防が横たわり、斐伊川の水位面は標高8m前後と調査地点より2mほど高い。当バイパス建設事業以前の土地利用状況は、調査地を含む低地のほとんどが水田であった。



第3図 青木遺跡と周辺の地形

第2節 遺跡の歴史的環境

出雲平野周辺の遺跡密度

出雲平野の遺跡分布には明確な疎密が認められる（第4図）。その大きな要因のひとつは、前節で述べたように出雲平野が大きな地形変化を経て形成されたことによる。遺跡の分布上、平野西部に空白がみられるのは神門水海が広がっていたためであり、平野東部、現斐伊川右岸に遺跡がみられないのは低湿な環境であったことと、斐伊川の作用による厚い堆積物に被覆されていること、古大過瀬の河岸が西へ入り込んでいたことなどによる。

こうした山地形を念頭に、以下、時代を追って出雲平野周辺遺跡の消長についてふれ、青木遺跡の置かれた歴史的環境を概観する。

遺跡の萌芽期 繩文～弥生前期

出雲平野では縄文時代の遺跡は少ない。最も古い段階の遺跡としては、平野北西端の北山山系山裾に立地する菱根遺跡や、平野西部の砂丘上に苔まれた上長浜貝塚が縄文時代早期末の遺跡として知られている。前期末～中期にはわずかに斐伊川町上ヶ谷遺跡、三田谷Ⅲ遺跡が知られるほかは遺跡数が非常に少ない。これは単純に地形上の制約などにより活動が低調であったためと考えられてきたが、近年これを見直す見解もある。出雲平野の形成に大きな影響を与えた三瓶火山の第Ⅱ活動期（4000年前頃）に伴う堆積物は非常に厚く、従前の調査ではデサイト礫を含むこの堆積物を確認すると、下層に遺跡は無いものと判断し調査を終了していた。ところが近年、この堆積物の下に被覆された状態で、後期前葉の三田谷Ⅰ遺跡や築山遺跡が調査されるようになった。このことから、三瓶火山の堆積物が薄い平野盆地では縄文後期以前の遺跡が今後確認される可能性が指摘されている。

三瓶火山の活動が落ち着き、海退とともに地形の安定化が進む縄文後期中葉から晩期にかけては遺跡数が増加する。平野の越辺部、すなわち山系の縁辺にあたる地形では、前述の三田谷遺跡に加え、平野南西部の御厨川遺跡、二部八幡下遺跡、保知石遺跡、平野北西部では出雲大社境内遺跡がこの時期の遺跡として新たに現れる。さらに、それまで遺跡の空白地帯であった平野中央部でも、矢野遺跡や藏小路西遺跡、善行寺遺跡など遺跡の展開がみられる。このように後晩期に起こる遺跡の出現は出雲平野に広範囲にみられるが、青木遺跡の位置する平野北東部の北山山腹には、現在のところ縄文時代の遺跡は確認されていない。

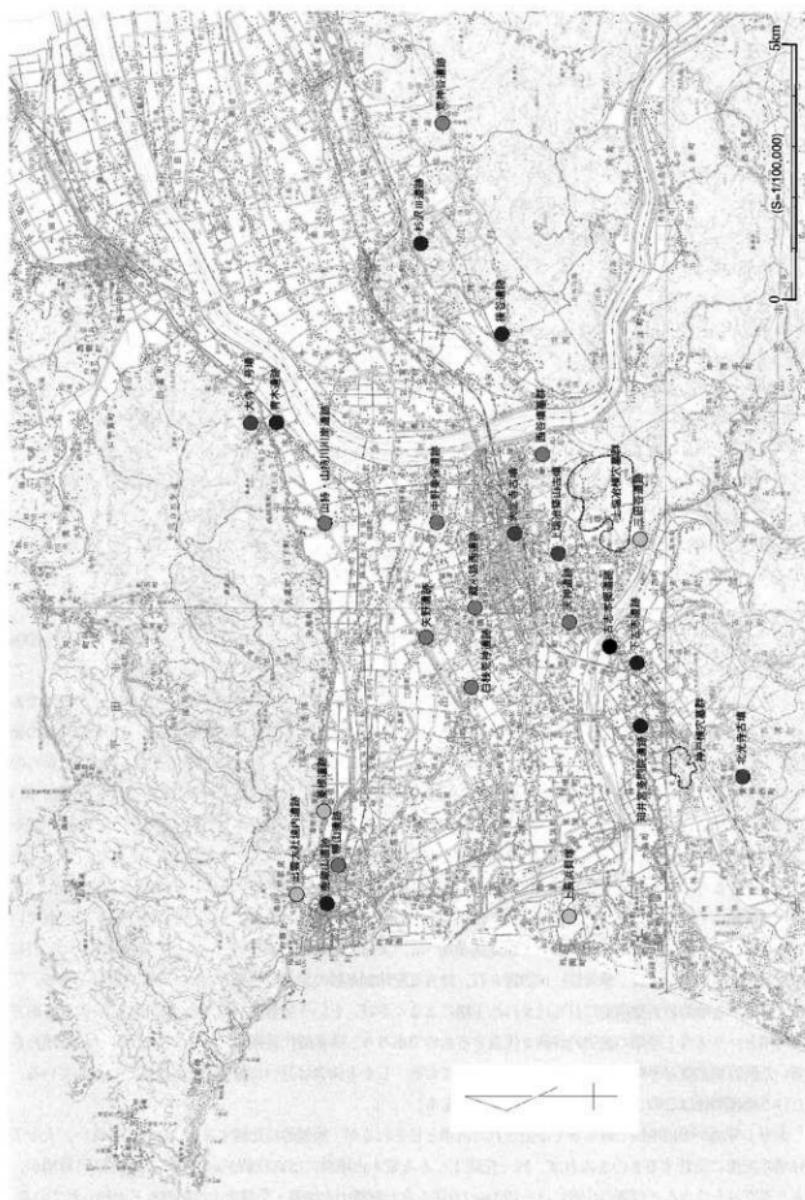
弥生時代前期には、縄文後晩期から継続する浅柄遺跡、三田谷遺跡があるほか、あらたに平野北西部の原山遺跡のような特徴的な遺跡も出現する。原山遺跡では北部九州からの直接的な影響を受けた土器が出土したほか、半島系の無文土器や配石基が確認されている。日本海を介した交流の受け口であったこの一帯は、出雲平野に弥生文化が展開する端緒となった地域であった。そのような性格は、中期後葉頃とみられる真名井（命主社境内）遺跡でも見て取れる。同遺跡では、巨石の背後に埋納された銅戈、ヒスイ製幻玉、武器形青銅器数点が江戸時代に出土しており、北部九州や北陸などとの交流がみてとれる。

平野中央部でも、矢野遺跡や藏小路遺跡、吉志本郷遺跡などで少量ながら弥生前期末の遺物が出土している。これらの遺跡は中期以降に中心集落として拡大するものであり、その契機が前期内にさかのぼることがみてとれる。一方、平野北東部、すなわち青木遺跡を含めた一帯では、このバイパス建設事業に伴い発掘調査された里方本郷遺跡・山持遺跡・青木遺跡で弥生前期の土器が少量ながら出土している。

弥生中期中葉以降は、出雲平野中央部の微高地に集落の分布が広く展開し、遺跡数も飛躍的に増加する時期である。環濠に類似するような大溝が集落を区画する天神遺跡や下古志遺跡、田畠遺跡などの広範囲にまとまりをもつ大規模な集落がみられる。分布域も広がりをみせ、知井宮多門院遺跡、山持川川岸遺跡、白枝荒神遺跡など、平野全体に大規模な遺跡が広く営まれる。

首長墓の登場 弥生中期～古墳時代初頭

こうした弥生中期中葉にみられる人口圧の高まりや生産力の増加を背景に、首長墓と目される墳墓が出現する。平野中央部に位置する中野美保遺跡では、中期中葉の小規模な方形貼石墓を契機に、後期後葉になると辺14～



第4図 出雲平野周辺の主要遺跡
(本文中に言及したものに限る)

15mの四隅突出型墳丘墓が築かれる。こうした大集落を単位とした首長レベルの墳墓は、居住域や生産域と隔離した丘陵上に占地すると考えられてきたが、中野美保遺跡の調査によって平野部にも存在することが知られるようになった。このような動向は青木遺跡においても同調するものと考えられる。青木遺跡では弥生中期後葉から小規模な貼石墓とともに四隅突出型墳丘墓が築かれ、後期後葉には中規模の同墓へと継続される。このような事例は現在のところ上記2遺跡にとどまるが、弥生中期中葉以降に進んだ大集落の形成と首長権の伸長、集落首長層の墓として採用された四隅突出型墳丘墓の共有という現象は、出雲平野に広範に起こったものであろう。

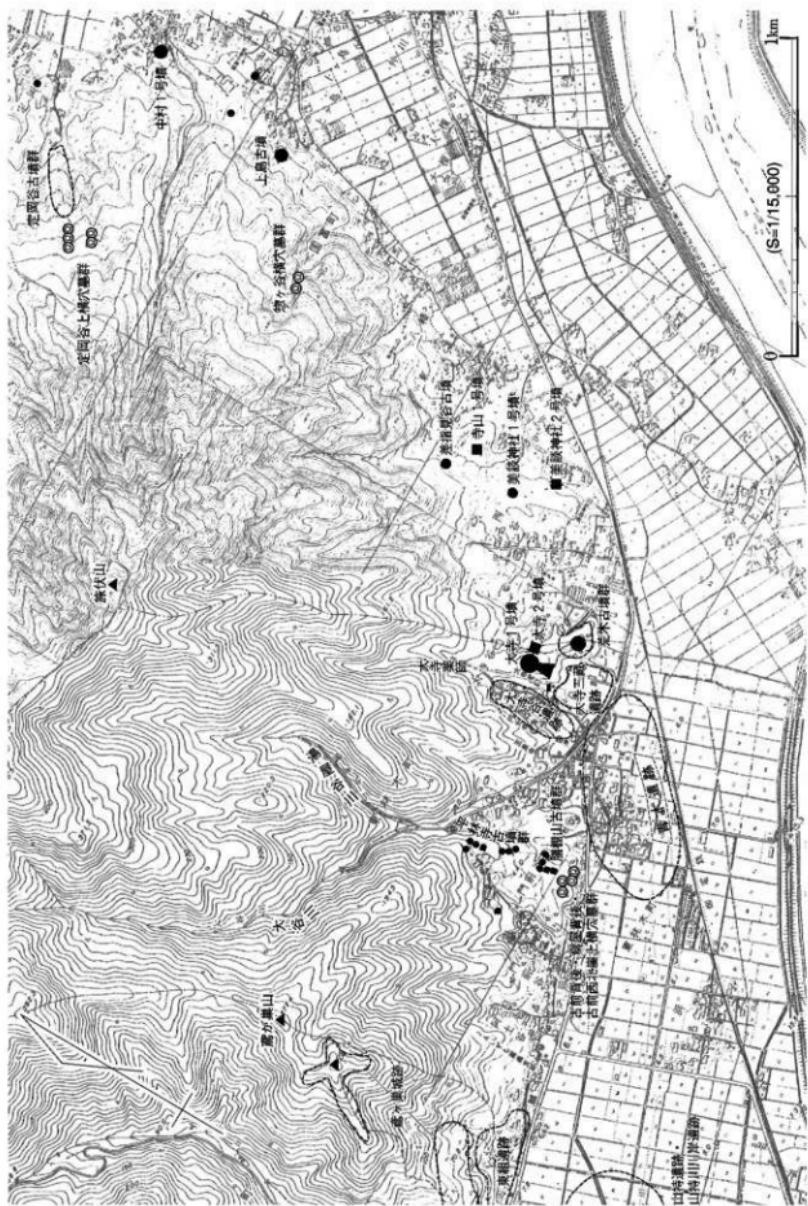
出雲平野の各地に点在する集落単位の小首長を包括するレベルでの大首長とみられるのが、平野南端の丘陵上に築かれた西谷墳墓群の被葬者である。後期後葉には傑出した墳丘規模、外表施設、埋葬施設をもち、古墳や北陸、内都牽引内に対して広域交通と首長間関係を構築していた。一辺30~40m級の大型四隅突出型墳丘墓が継続的に造営されており、その首長権の確固たる様相を示している。

葬送に垣間見られるように、弥生時代後期~終末にかけての出雲平野の諸集団は、西谷墳墓群の被葬者を頂点とした紐帶で結ばれた一体性をもっていた。労働力を集約された墳墓に見る限り、安来市荒島丘陵を中心に四隅突出型墳丘墓を多数築いた出雲東部の首長と比肩するものであったらしい。ところが、山嶋時代に入ると西谷墳墓群に継続する首長塚が築かれることはなく、首長権の解体をもたらしたなんらかの社会的変動があったものと推定される。出雲平野周辺に、山嶋時代前期前半の卓越した首長塚はまったくみられない。集落に目を転じれば、弥生中期以降に発達した大集落の多くが、山嶋時代前期初頭を前後する時期に廢絶あるいは衰退する現象がうかがえる。古志本郷遺跡や下占志遺跡、田畠遺跡では集落を区画する大溝に一斉に多量の上器を廃棄する行為があり、それ以降集落が断絶する。白枝荒神遺跡や佐原西遺跡、天神遺跡などでもほぼ傾向を一にする。これ以後、調査例を見る限り古墳時代中期を通じて出雲平野の生活遺跡は極めて少なくなる。

大寺1号墳と古墳時代前・中期の様相

出雲平野周辺で、定型化した前方後円墳の初現にあたるのが大寺1号墳である。青木遺跡の北東わずか400mの丘陵先端部に位置している(第5図)。墳長52mの前方後円墳で、築造時期は前期後葉と推定されている¹⁰⁾。これは出雲東部(松江市矢出町)の廻田1号墳(墳長58m)とならび、出雲全体でみても最も古い前方後円墳である。この大寺1号墳は、先行する首長塚の無い地域に突如として出現する首長塚、と認識されていた。今回の発掘調査で近接する青木遺跡から中規模の四隅突出型墳丘墓が確認されたため、大寺1号墳の被葬者が前代からの首長系譜をひくものかもしれないが、その間には時間的断絶が大きい。こうした大寺1号墳の歴史的評価については、内田津雄氏が言及している¹¹⁾。後述するように、大寺1号墳の近傍である美談郷には出雲郡の正倉が置かれていたことが「出雲國風土記」に記載されている。内田氏は「風土記」段階の正倉を大化以前に設置された屯倉を継承するものととらえ、さらに出雲地方で屯倉(正倉)の所在地と前方後円墳の分布が重なることを示した。大寺1号墳はその代表例としてあげられ、その付近に縣社・阿我多社がある点から県制との関連が想定されている。すなわち、大寺1号墳が築かれる5世紀前半期¹²⁾に、大和王権の政治的進出として後の美談郷周辺に県(に相当する性格をもつ施設:筆者註)が設置され、地方支配体制進展の足がかりとされた、という推論である。このように、在地的首長権構造に打ち込まれた王権によるくさび、という見解は、出雲西部で最初に築かれる前方後円墳という大寺1号墳の歴史的評価を代表するものであろう。弥生時代後葉から末にかけて巨大な墳丘を築いた西谷墳墓群が平野をはさんだ対側に位置しており、しかも両者は互いに遠望できる位置に対峙している、という地理関係はこのことを象徴するかのようである。

大寺1号墳が周辺地域で最も早く築造された古墳と目されるが、規模的に比肩するものは後続しない。大寺1号墳の近傍に位置するものをみれば、同一丘陵上にある荒木古墳群には直径約26mの円墳である荒木1号墳が、また湯屋谷をはさんだ西側の丘陵には一辺20mの方墳を含む勝幡山古墳群・平林寺山古墳群などが知られている。後者は開墾などで消滅したものを含めると20基以上からなっていたと考えられ、勾玉などの出土品が云々わるなどかなり密集度の高い古墳群であったらしい。出雲平野では平野南辺の刈山古墳群に匹敵する群集墳と評価されて



第5図 青木遺跡と周辺の遺跡 (S=1/15,000)

いる¹⁶。こうした中小規模の群集墳が大寺1号墳に後続するものである可能性が高いが、隔絶した影響力を持つ首長権が安定して継承されたとは言い難い。出雲東部の各地で新たな首長墳が登場する古墳時代中期には、この周辺の首長系譜は縮小しているとみるべきだろう。出雲平野を中心とする出雲西部では、古墳時代中期の首長墳の築造が低調であり、傑出した前方後円墳ではわずかに北光寺古墳が平野南辺にあるにすぎない。

前述の内田氏が示したように、律令期にまで継承されるような中央との直接的な関係性が古墳時代前期にまでさかのぼるるには、古墳時代中期にみられる首長墳の空白の問題が解決されなければならない。王權との関係性を持ち得た地域首長の有無については、古墳というモニュメントを介してしかこれを認識できない考古学の方法をとれば、大寺1号墳のように、前代に首長墓が無かった地域に前期後葉、傑出した首長墳が1基だけ築かれ、その後は衛星的に小規模な古墳がこれを取り巻く、という状況は、松江市廻出古墳群や同上野古墳群などでも共通する現象である。これらの事例ではいずれも畿内地域のダイレクトな影響下に成立したと考えられるが、いずれも首長墳が継続しない点が共通する。大寺1号墳もこれらのように古墳時代中期には縮小する首長系譜のひとつと捉えられる。

古墳時代後期の首長墳の動向

青木遺跡の山麓地帯と王權との直接的な関係性があると言えるのは、古墳時代後期になってからである。この時期、旅伏山東麓に古墳・横穴墓がまとまって作られ、出雲平野北辺としては最も濃密に分布する地域となる。これらは大寺1号墳から北東へ2kmほどの隔たりがあり墓域としては異なるものと捉えられるが、巨視的には同一の生産基盤を母体とする一連の共同体（地域集團）によるものと評価されよう。

この地域で、前期後葉の大寺1号墳以降の優位な古墳として注目されるのが、6世紀中葉の上島古墳である。円墳と考えられてきたが、前方後円墳の可能性も指摘され、規模は円墳の場合の径21m、前方後円墳の場合墳長35mと示されている¹⁷。直葬された家形石棺と竪穴式石室が昭和24(1949)年に発見され、銘鏡、銘鏡、装身具、護拳帶装飾付人刀、鉄鎌、馬具など優れた副葬品が出土した。石棺は横口がなく直葬である点など、横穴式石室の導入に先行する畿内型の石棺として注目され、副葬品の多くは王權中枢から配与された性格が強い。特に金銅製の馬具一式（「丁形鏡板付替・劍菱形杏葉・雲珠・鞍金具）は規格性が高く、その配与行為の背景に中央豪族の主導が想定されているものである。墳丘規模は目立たないが、中央との関係のもとで優位性をもった地域の首長像を物語る。この古墳から北に谷を隔てた丘陵上では、6世紀後半の首長墳とみられる中村1号墳が近年、未盗掘の状態で発見された¹⁸。墳丘は改變が著しく小規模な円墳と報告されているが前方後円墳の可能性も残り、全長7.4m以上の複室構造の横穴式石室で組合式の家型石棺が置かれる。石室内の発掘はおこなわれていないが、前室から銀製大刀が1振り出土している。これも墳丘規模は小さいながら地域首長墳と考えられる。上島古墳や中村1号墳のように内容から上位に評価される首長墳は他になく、旅伏山東麓・南麓は小規模な石室墳が6世紀後葉から7世紀中葉にかけて築造される地域である。後述するように、出雲東部を二分した大首長層に取り込まれ、その関係を変化させつつもしながら独自性を維持したと評価できよう。微視的にみれば、青木遺跡の北側丘陵上には墳丘規模の小さい群集墳や、横穴墓がまとまっている。ここを墓域とした集団は地勢で見る限り青木遺跡を含めた扇状地および谷筋を居住地とした集団単位であったであろう。青木遺跡の発掘調査区内では明確な生活遺構は確認されていないが、古墳時代中後期の遺物が一定量出土しており関連がうかがえる。

石室形態からみた古墳時代後期後半の領域と青木遺跡周辺の位置づけ

古墳時代後期後半に当雲地域には東西2つの首長系譜があらわれる。出雲西部の首長が大念寺古墳・上塙治築山古墳・地藏山古墳であるが、大念寺古墳は全長100m級の前方後円墳であり、出雲東部の山代二子塚古墳となりび出雲地域を東西に二分する大きな勢力が保持されていたと考えられている¹⁹。両者の墳丘規模は、同時期の全国の首長墳を見比べても卓越したもので、それぞれが強い求心力をもち地域内の労働力を結集する大きな影響力をもつ首長であったことがうかがえる。青木遺跡のある出雲平野北東部、旧平田市周辺にあたる地域は、地理的にこうした両大首長の狭間に存在しており、古墳の様相も東西の要素が混在している点で独特である。こうし

た古墳の様相、特に横穴式石室の形態を整理した大谷晃二氏は⁶⁰、6世紀後葉から7世紀中葉にかけてのこの地域における領域の形成過程について興味深い事実を指摘する。

大谷氏が「島根半島西部」とする地域の横穴式石室分布を型式別に示したのが第6図である。この図には時期的に前後するものが含まれている。段階を追ってみると、まず石室編年1期・2期 (TK43~TK209併行期) の時期にはA型・B型石室が、神戸川右岸の大念寺古墳や上塙治築山古墳といった出雲西部の大首長の石室に採用される。これと同型式で規模を縮小したもののが「在地首長墳」とされるこの地域の石室墳にもみられる。山根垣古墳(図中11)など、図中の★と●にあたる。B型石室には、石室の形態や石材の積み方は共通するが、これを模倣的に簡略化し小型化したb型石室が存在する。これが図中の○であり、青木遺跡の近隣では差指見谷古墳(直径約8m、図中6)や、前述の中村1号墳に近い宍岡谷古墳群(図中7~9)などに見られるほか、後の橋絆郡にあたる東郷川流域の小規模墳に分布している。定岡谷古墳群は19基が知られる後期の横穴式石室を主体とする群集墳で、横穴墓が盛行する出雲西部にあって小規模ながら石室墳を継続的に築造し群集する事例はこれの他は刈山古墳群しか知らない。このように、出雲西部の大首長墳にあるB型石室を模倣したb型石室が群集墳に採用される背景について、大谷氏は「群集墳被葬者に隸属する人々が、大首長墳(上塙治築山古墳など)や在地首長墳(山根垣古墳など)の造営に動員された結果、そこで習得した技術や知識をもって、直接的な支配者である有力農民の群集墳を築いたことによって生じた現象」と説明する。大谷氏の説くように、類似する石室形態の分布範囲を労働力の徵發対象の範囲と読み替えれば、石室編年2期以前、6世紀末段階まではこの一帯は広く出雲西部の大首長の統制が及ぶ領域内であったということになる。統いて石室編年3期 (TK209~飛鳥Ⅰ併行) に神戸川右岸の大首長墳では、切石1枚石で天井と各壁を構成し正方形プランにちかいC型石室へと変化する。この地域でも、美談神社2号墳でこのC型石室がみられ依然として出雲西部の大首長の影響下にあることがみてとれるものの、出雲東部の首長に採用された独特の石室形態である出雲型石棺式石室(図中2)が美談地域から東郷川流域まで広く分布している。こうした出雲東部の首長による影響が7世紀初頭のごく限られた期間見られた後に、後の郡境に相当する集団差が明確になる。すなわち、石室編年4期 (飛鳥Ⅱ併行) に、平田船川を境とした石室形態の差異があらわれる。以西の美談地域では、出雲西部の石室形態であるD型石室へと同調して変化しているのに対し、以東の東郷川流域ではC型・D型の石室がみられない。後者の地域は7世紀前葉に出雲東部型の石棺式石室やすでに西部で途絶えたb型石室を採っており、出雲東部、特に山代方墳など意宇の人首長の強い関係をもつようになったと考えられる。このように現在の平田船川あたりを境にした山塊の切れ目は古代の橋絆郡と出雲郡の境界と等しく、この集団の別が7世紀前葉には成立していたと考えることができよう。



第6図 島根半島西部の横穴式石室の型式分布 (註(8)大谷2001より)

国郡郷制下の遺跡の環境

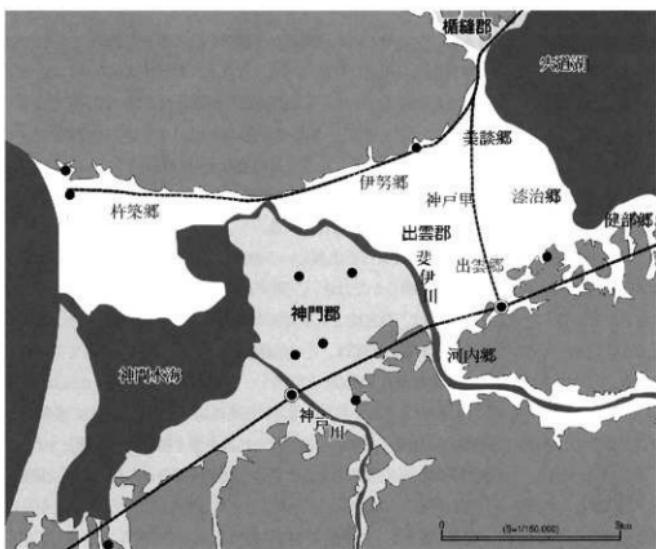
青木遺跡を含む地域は出雲国出雲郡に編成され、遺跡所在地はそのうち伊努郷、美談郷のいずれか、あるいは両郷の郷境付近にあたると見込まれている（第7図）。出雲郡の郡家は平野南辺の出云郷に属し、正倉跡とみられる倉庫群が発掘調査された後谷遺跡の一帯が有力な候補地である。これと青木遺跡は出雲平野をはさんで対極に位置しており、直線距離で4.8kmの隔たりがある。

青木遺跡周辺に置かれた施設が、伊努郷・美談郷を含めた複数の郷域にまたがる機能をもっていたことは、今回の発掘調査で出土した付札木簡の記載や墨書き上器の内容などから明らかである。そうした遺跡の内容だけでなく、地理的にも両郷にまたがるであろうことが『出雲國風土記』の記載から推定される郷の位置関係からも想定される。まず伊努郷について『出雲國風土記』は「伊努郷。郡家の正北八里七十二歩なり。国引き坐しし意美豆努命の御子、赤文伊努意保須美比古佐委氣能命の社、即ち郷の中に坐せり。故、伊農と云ふ。〔神龜二年に、字を伊努と改む。〕」と記す¹⁰。その範囲については、現在の東林木、西林木、日下、矢尾のあたりと考えられるほか、上記に加えて石臼と高浜地区を合わせさらに西と南に広く考える加藤義成氏の見解もある。いずれにせよ、青木遺跡の所在地は伊努郷の中でも東端にあたると考えられる。なお、加藤義成氏は「郷守は東林木の山辺にあったものと思われる」としており、これは青木遺跡の周辺を想定していたものであろう。一方、美談郷については「美談郷。郡家の正北九里二百四十步なり。所造天下大神の御子、和加布都努志命、天地初めて判れし後、天御領出の長と供へ奉り坐しき。即ち彼の神、郷の中に坐せり。故、三太三と云ふ。〔神龜二年に、字を美談と改む。〕即ち正倉あり。」と『出雲國風土記』は記している。その郷域は現在の美談町と今在家とする想定のほか、上記に国富町と原鹿、今在家の北一部を加えるとする関和彦氏の見解がある¹¹。

美談郷には郡倉が置かれており、出雲郡の北半の宇賀郷、美談郷、伊努郷、杵築郷がその対象範囲であったと想定される。その立地環境には交通路との位置関係が背景にあるものと考えられよう（第8図）。出雲国府から発する「北へむれる道」（枉北道）は島根郡、秋鹿郡を経て宍道湖北岸を西へ続き、櫛縫郡家を経て南下して出雲郡家に至る。一方で、西端の杵築郷から伊努郷を経て美談郷にいたる北山山脈を通る道が想定されることから、この道と枉北道とは美談郷で結節するものと想定される。美談郷に正倉が置かれたのはこうした交通上の重要性、



第7図 遺跡周辺の郷の位置関係



第8図 出雲郡・神門郡の遺跡分布と交通路

利便性が背景にあるものと考えられている。また位置を特定できないが、東流して穴道渓へ注ぐ斐伊川支流があったことが想定されることから、穴道湖と神門水海へ、また外海へつながる水運の面でも美談郷が重要な役割を占める。陸上交通のみならず海上交通上でも、東西の動きと南北の動きの交点として、郡家と向き合う位置での重要性が看取されよう。

『出雲國風土記』による郡家から各郷への里程は、美談郷が九里二百四十歩（5.238km）、伊努郷が八里七十二歩（4.405km）と非常に近い。両者の郷の位置とされる郷家なりが、単純計算でわずか800mの距離にあるとされる点は、北山山裾に東西に長くのびる両郷が、連の結びつきをもった地域の共同体として存在していたことを示唆し、青木遺跡で得られた結果を理解するうえで興味深い事実である。

奈良・平安時代の出雲平野

第8図には出雲平野の奈良・平安時代の遺跡のうち主要なものを●で示している。主として文字資料や大型建物など、官衙関連とされる性格をもつ遺跡である。その分布をみると、明らかに神門川流域の微高地に多く、斐伊川右岸には確認されていない。これはひとつに、斐伊川の氾濫原でありその堆積作用により遺跡が深く被覆されていることや、低地であり現在に至る土地利用が主として水田で、開発にともなう発掘調査が少ないという原因がある。よって、現在のところ出雲郡域では、主要な遺跡は山際の微高地や丘陵上に限られている。出雲郡内で特記される遺跡として、出雲郡に比定される後谷遺跡のほか、出雲大社の至近で近年調査された鹿嶋山遺跡が特筆される。鹿嶋山遺跡では三彩をはじめとする階層の高い器財のほか、墨書き器や帶金具などが出土しており、朽葉大社との関係が強くうかがえる。このほか、神社遺構として注目された斐川町松沢Ⅲ遺跡などが関係するが、これについては第18章総括にて再度詳述する。遺跡が少ない出雲郡に比べ、斐伊川左岸の神門郡は比較的多くの関連遺跡が調査されている。郡家は大型建物群が確認された古志本郷遺跡の付近が有力とされ、三田谷遺跡では郡レベルの物流等に関わる施設があったと考えられている。この他に各郷程度の分布で文字資料出土遺跡が点在している。

奈良・平安時代の青木遺跡と大寺

青木遺跡の歴史的背景を考えるうえで、欠かせないのが優れた仏像群を伝える大寺薬師の存在である。現在は青木遺跡北の大寺谷に所在する淨土宗萬福寺の境内に収蔵庫がもうけられ、薬師如来像をはじめ、多くの仏像が保管されている（写真図版1）。薬師如来と脇侍の日光・月光菩薩像、聖觀音像2躯、四天王像4躯をあわせた9躯は重要文化財に指定されている（戦前は国宝指定）。薬師如来像は高さ134センチ、重量感にあふれた像であり9世紀から10世紀にかけて製作されたと考えられる。衣文などの造形上の特徴から、天台宗の地方伝播を背景に成立した像であることが指摘されている¹⁰。また四天王像は木彫仏の白眉とされる優品であり、中央の仏師による作である可能性が指摘される。年代は9世紀と考えられる。

かつての大寺薬師は現在地から約300m奥に入った広瀬という地にあったとされ、現在でも平坦地が残る（第9図）。この場所に堂宇がいつまであったか明らかではない。慶安元（1648）年には大規模な山崩れがあり、完全に埋没したとされている。近世初頃までは、現在地である萬福寺の境内に薬師堂が建てられており、現存する仏像群はそこに移し置かれていたと伝えられる。問題は、この仏像群がいつまでさかのぼってこの地にあったか、という点であるが、その来歴はまったく資料がなく明らかではない。一説には北山を越えた反対側に位置する飼淵寺とともに一体の天台寺院をなしていたともされており、地元に伝える縁起では推山天皇の勅願寺としている。その当否は別としても、前述の薬師如来像や四天王像などの優れた仏像を多く持ち得た寺院とすれば相当の規模であったことは間違いない。この大寺薬師から川寺跡を含む大寺谷では畠地部分から須恵器・土師器の散布が認められ、大寺谷遺跡とされている。この谷筋に古代寺院があったことを示す資料として瓦の出土が注目される¹¹。第9図で瓦出土地とした地点で、市営住宅の井戸を新設する際に軒丸瓦1点が出土している（第10図）。瓦を検討した林健亮氏によれば、沼陽から四王寺Ⅱ類と同様、年代は8世紀後半に位置づけられる。出雲地域では国分寺の瓦が同寺や同尼寺に限定的に用いられる一方で、いわゆる氏寺である教吳寺の同瓦などが他の新造院へ供給されているという。その背景には私寺に必要な瓦の生産が、郡領レベルでの関係下で共有あるいは流通していたことが読み取れると林氏は述べている¹²。四王寺の同瓦が、大寺に供給されているのもこうした関係性の一例と評価されている。

瓦が出土している大寺谷にあわせ、大寺三藏遺跡も一連の遺跡と考えられる。大寺三藏遺跡は大寺谷の開口部にあたり、丘陵先端にひろがる微高地上に位置する。出雲平野を見渡せる場所であり、遺跡の占地としては絶好的の立地である。ここでは昭和57年にチップ工場建設に伴う事前の試掘調査で存在が明らかになった¹³。第10図の■が設定されたトレチで、7カ所のトレチのうち西側にある谷に近いものから遺物が出土している。遺物の内容は奈良時代の須恵器や中世の土師質土器であり、ごく小規模かつ重機による試掘であったことを勘案すれば、かなりの遺物密度をもつ遺跡であると考えられる。柱穴とみられる遺構も確認されており、青木遺跡と同時期に機能した何らかの施設があったことは間違いない。地理的に見ても青木遺跡と一連のものであろう。現状は造成・舗装された敷地になっているが、遺構自体は良好に保存されているものと想定される。

このように青木遺跡の範囲、施設の機能を考えるには、上記2遺跡の存在を念頭に置かねばならない。あわせて、現時点で何ら資料は得られていないものの、北西に延びる湯屋谷の谷筋も含めた一連の遺跡展開が想定されよう。



第9図 青木遺跡と大寺周辺の遺跡

写真図版一

大寺薬師の仏像



薬師如來坐像



持國天立像



廣目天立像

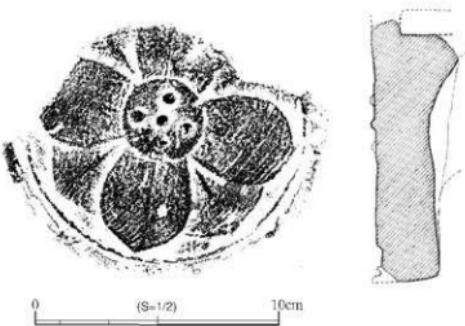


增長天立像



多聞天立像

*協力：大寺奉賛会
*写真提供：島根県古代文化センター



第10図 大寺谷出土 軒丸瓦
※林健亮氏採拓



第11図 大寺三藏遺跡出土遺物
(1~3: 土師質土器、4~6: 須恵器)
※註(14)文獻より転載

中近世の周辺環境

古木遺跡が所在する 帯は平安末期に九条家の荘園として林木庄となり、水田開発、經營された。元久元(1204)年の九条兼実置文（九条家文書）に女院庁分御領としてあるほか、建武3(1336)年の九条道教領日録案（九条家文書）に「出雲国林木・美淡向庄、領家職」とみえ、本家職を皇室、領家職を九条家が所有し、その家司が預所職に補任されるという支配形態が長期間続いたことが推定されている¹⁾。一方、在地支配は文永8(1271)年の杵築大社三月会相撲舞役結番帳などから地頭が担当していたことが確認される。応安3(1370)年の九条経教御教書案（祇園社記統録）には「出雲国美淡・林木向庄事、所被寄付当社也」と、美淡上とともに九条家から祇園社へ寄進されたことがうかがえ、南北朝明治以降は実権が九条家から在地側に移ったと考えられる。

なお、古代に出雲郡に属していた林木地域は郡域の変動のなかでその所属が変化している。正応元(1288)年の鎌倉將軍家政所下文（日御碕神社文書）では神門郡としてみえ、その後弘治3(1557)年の尼子晴久寄進状（坪内家文書）には所属が出東郡（出雲郡）に復していることが確認できる。その後近世初頃の斐伊川東流を境に橋縫郡に所属したとされ、旧出雲市域では唯一、東林木村と西林木村は橋縫郡に属していた。

その後戦国期には尼子氏の直轄地に指定され、杵築大社、鰐淵寺、日御碕神社など在地有力社寺や在地土豪、商人などの所領となっていた。また、この地域は毛利氏による尼子氏攻めの拠点とされた地域である。遺跡の北西1.5kmにある鳶ヶ巣城は、守護職佐々木氏から分かれた穴道氏により16世紀初頃に築城され、16世紀末に現状に続く改変があった。毛利元就による出雲侵攻で最初に軍事拠点とされた城であり、ここを足がかりに出雲東部へと軍が進められた。戦終が出雲東部に移動して荒原城が毛利氏の指揮中枢になると、鳶ヶ巣城は兵員や物資の中継、兵站基地としての機能を果たしたと考えられる。この地が選択された背景には道路交通上の交点であったことと、穴道湖、神門水海から日本海へつながる水運上の要所であったことがある。水軍をもつ毛利軍にとっては、特にこの点が重要であったと考えられる。残存する遺構としては、山頂から四方にのびる尾根上に10カ所の郭があり放射状連郭の配置をとるほか、南麓の平地に近い部分に館跡と想定される平坦地がある²⁾。

【註】

- (1) 島根県古代文化センター他『大寺1号墳発掘調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書29、2005年3月
- (2) 内田律雄「出雲の前方後円墳について」『山陰史談』16号、1980年3月
- (3) 註¹²⁾内田氏文中の年代記。
- (4) 『出雲市埋蔵文化財調査報告書 第1集』出雲市教育委員会、1988年3月
- (5) 松江北高校考古学部・大谷晃「『上島古墳測量調査報告』『島根考古学会誌』第22集、島根考古学会、2005年5月
- (6) 『中村1号墳』平田市教育委員会、2004年3月
- (7) 渡邊貢等「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会、1986年
- (8) 大谷晃：「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市教育委員会、2001年3月
- (9) 加藤義成『修訂 出雲國風上記參究』今井書店（改訂四版）による。
- (10) 関和彦「『出雲國風上記』註論（その三）出雲都条」「古代文化研究」島根県古代文化センター、1998年3月
- (11) 的野克之「神々の国の仏たち」『古代出雲文化展』展示図録、島根県教育委員会、1997年
- (12) 「大寺谷遺跡、『古代の出雲を考える3 出雲平野の集落遺跡I』」出雲考古学研究会、1983年12月
- (13) 林健亮「出雲の古代寺院――瓦編年を中心―」『島根考古学会誌』第9集、島根考古学会、1992年3月
- (14) 『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第2集、出雲市教育委員会、1989年3月
- (15) 「島根県の地名」日本歴史地名大系第33巻、平凡社、1995年7月
- (16) 島根県教育委員会『出雲・上堺治地城を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980年3月

写真図版二
航空写真／南から



写真図版三
航空写真／北から



写真図版四 航空写真／西から



写真図版五
航空写真／東から



第2章 調査の経過

第1節 調査経過の概要

事業の概要

一般国道431号道路は、出雲市を起点として旧平田市から松江市・境港市を経て米子市に至る総延長95.8kmの道路である。山陰の核である出雲市域から米子市域を東西に結ぶ地域の大動脈であり、宍道湖、中海をはさんで南側を通る国道9号線と共に、生活・経済に不可欠な幹線となっている。

一般国道431号東林木バイパスの建設は宍道湖・中海北岸の市町村を連絡する地域高規格道路「境港出雲道路」の一部を構成するとともに、現道の線形不良及び交通混雑の解消を目的としている。出雲市矢尾町から出雲市東林木町に至る延長4.2kmの本線4車線、副道及び歩道両側設置の計画で、平成10年12月地域高規格道路の整備計画に組み込まれた。副道の全線供用開始は平成20年度の予定であるが、本書で扱う青木遺跡が所在する東林木町地内については平成16年度よりすでに供用開始となっている。

本調査に至る経緯

島根県教育委員会は、平成11年度に出雲土木建築事務所から遺跡有無の照会を受けて、平成12年3月に事業予定地内の分布調査を実施し、青木遺跡、馬渡り遺跡、山持遺跡、里方本郷遺跡、下澤遺跡の計5遺跡を発見するとともに、平成12年3月に遺跡の存在と取扱いについて協議が必要な旨を回答した。平成12年7月に上本部と協議を行い、10月から青木遺跡と馬渡り遺跡の範囲確認調査を実施することとなった。

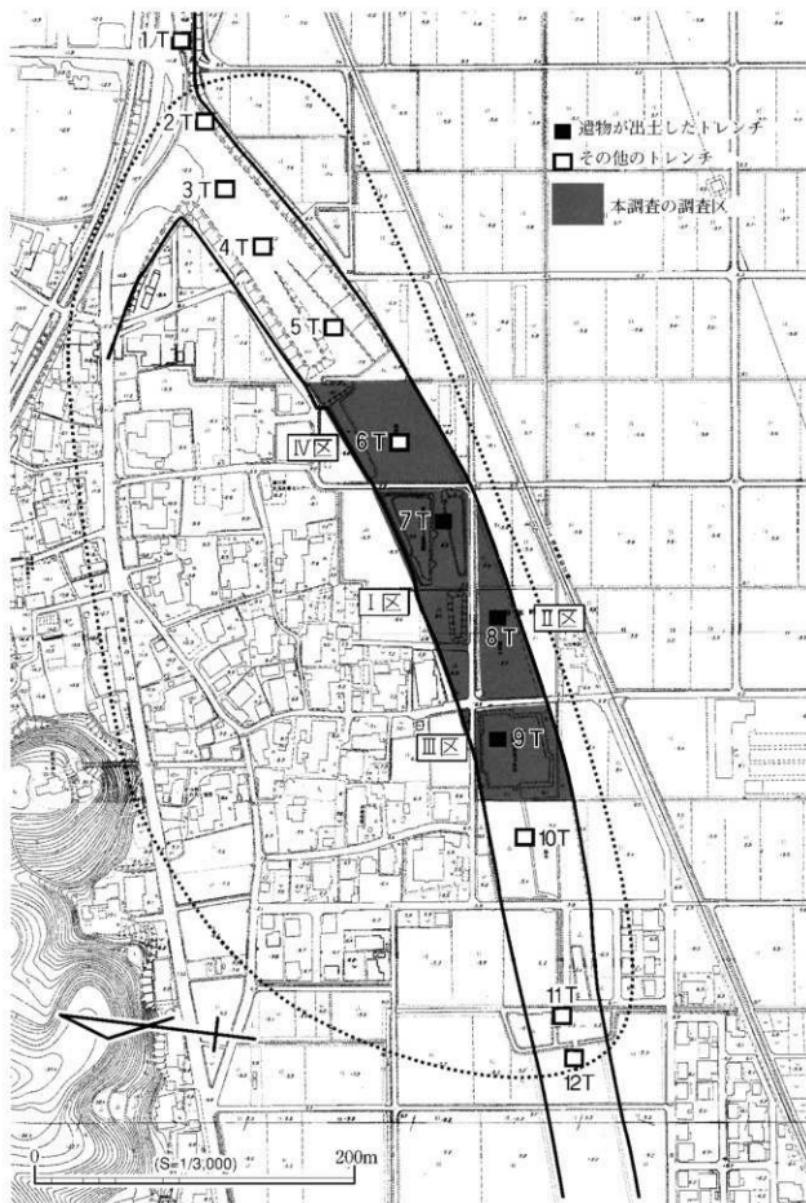
青木遺跡は踏査の結果から、かなり広範囲にわたる遺跡であると考えられた（第12図の破線範囲）。この範囲内で本調査が必要な部分を確定するため、事業地内に12箇所のトレンチを設定して確認調査を行った。その結果、3箇所のトレンチ（7～9T）から中世の遺物、遺構が確認された。この中世構造面は地表から約1m下にあり、自然堆積層である疊層の上面に形成されていた。疊層の堆積は非常に厚く人工遺物が全く含まれないため、この疊層下に遺構等は存在しないものと判断して確認調査は終了した。この結果、遺物、遺構を確認した部分（I～III区）については本調査が必要である旨を土木部に回答した。

本調査の経過

確認調査の結果に基づいて調査対象範囲にI区～III区の3箇所の調査区を設定し（第13図）、平成13年4月より本格的に青木遺跡I A・I B・I C・II区の発掘調査をおこなった。調査の結果、古代末から近世初頭にかけての大規模な集落跡であることが確認され、多数の掘立柱建物跡や溝状造構、土坑、陶磁器類などの多種多様な遺物を検出して12月に現地調査は終了した。

平成14年度は引き続きI区の残りであるI D区とIII B区の調査を実施したところ、I D区の中世構造面から前記の疊層をはさんだ1～1.5m下層に、弥生時代～平安時代の遺構および遺物包含層が存在していることが8月末になって判明した。この弥生～平安時代の遺構面の広がりを確認したところ、I D区の西側に位置するIII B区の下層には存在していないことが判明した。この新たに確認した調査対象地をIV区とし、これと併せてI C区の再調査について、平成14年11月に上本部に要請した結果、平成15年度に調査を実施することが可能となった。

I D区の奈良・平安時代の遺構面の現地調査は12月まで行い、礎石建物跡、掘立柱建物跡、多量の墨書き土器・木簡等を検出した。弥生時代の遺構面の調査は12月末から平成15年3月まで行い、四隅突出型墳丘墓1基や人骨を作り土塙墓を検出した。この土塙墓からは近畿式銅鐸の飾り耳が出土し、銅鐸片が土塙墓から検出されたのは全国で初めての例である。これにより遺跡の重要性が注目されることになり、平成15年3月には上本部と遺跡の取扱いに関する協議を行い、ルート変更や工法変更等による遺跡の保護について要請した。ルート変更について



第12図 調査区およびトレーンチ配置図
(地形図は平成15年3月作成、一部工事完了部分あり)

は城壁地域との関係等から不可能であるとの回答を受けたが、遺跡の保護については検討を要することとして8月以降に再度協議を行うことで合意した。

平成15年度はⅠC区とⅣ区の調査を実施した。調査の結果、奈良・平安時代の遺構面では神社建物と考えられる建物跡や神像、充出券木筒等の貴重な発見が相次いたため、この奈良・平安時代の遺構面で保存する方向で検討することとなった。このことにより弥生時代の遺構面の調査については奈良・平安時代の遺構の存在しない箇所のみを調査することになったが、結果は最古型式の四隅突出型埴丘墓を含む計12基の貼石埴丘墓を検出した。こうした成果は四隅突出型埴丘墓の起源と系譜について極めて貴重な資料となった。

このように次々と明らかになる新知見から遺跡の重要性がさらに高まり、平成16年1月末に遺跡の取扱いについて土木部と再度協議を行った。その結果、本線部分は将来施工予定箇所であることから、15年度に調査を実施したⅠC・ⅠD・Ⅳ区については、保護層としての真砂土による埋め戻しを当面行って遺構面を保護する措置が執られることとなった。なお、それ以外の部分については掘削を作らう地質改良工事が施工されており、遺跡は残存していない。

平成16年2月末には保護層で被覆した後に埋め戻しが開始され、埋め戻し終了後には携帯電話用待避所となる本線部分の空閑地を利用して四隅突出型埴丘墓1基、神社建物1棟、石敷き井泉跡の遺構表示をおこなうとともに、説明板の設置、遺跡概要を記したパンフレット配布ボストの設置などを完了した。

第2節 発掘作業の経過

1. 平成14年度の調査

平成13年度の調査経緯については、既に刊行した『青木遺跡（中近世編）』（鳥取県教育委員会、2004年）に詳細を記しており、本書掲載の調査成果と関連が無いためここでは省略する。平成14年度の調査はⅠD区（1,200m²）とⅢB区（2,600m²）の調査を実施した。5月9日からⅠD区の調査を開始し、中世の遺構等の調査を行っていたが、調査前は標高が低いため湧水が多く、調査区の周囲に排水のための溝や溜めマスを掘りながら進めていたところ、6月6日に溜めマスを掘削中に墨書き土器が3片出土した。当初、中世遺構面の下層は土石流による礫層が厚く堆積していたため他の時代の遺構面等は存在しないものと思われていたが、土器が出土したことから礫層より下位に古代の包含層等が存在している可能性が考えられた。中世遺構面の調査が終了した地点にトレチを2箇所設定して調査を行ったところ、8月30日に調査区西側に設定したトレチから、古代の包含層と弥生時代の包含層及び人骨の脚部を検出した。これにより9月からは中世遺構面下層の本格的な調査に着手することとなった。

調査の結果、奈良・平安時代と弥生時代の遺構面が重複して存在していることが判明した。奈良・平安時代の遺構面は現地表から約2.5m下に位置することから湧水が著しく、地盤沈下や壁面の崩壊等の影響が考えられる状況であった。事業地を横断する道路を保全するためガードレール等を設置し、調査区壁面は安全勾配を考慮して掘削するなど作業の安全管理に努めた。調査区内は湧水及び調査区外から水が流れ込むため、調査区の周囲等に排水用の溝を掘りながら調査を進めた。調査の結果、礫石遺物、掘立柱建物の他に多量の墨書き土器と木筒等が出土し、古代の官衙関連遺跡と考えられたため11月23日に現地説明会を開催し、約160名の参加があった。

その後、弥生時代の調査についてⅢB区の調査班も合流して2班体制で行っていたところ、平成15年1月17日に近畿式銅鐸の飾り耳が墓壙から人骨に伴って出土した。銅鐸片が上塙墓から検出されたのは全国で初めての例であり、1月30日に記者発表を行った。また、この墓壙の南西約10mの位置で四隅突出型埴丘墓の突出部が確認され、調査区の東側では人骨を伴う土塙墓7基を検出したことにより2月26日に再度記者発表を行い、3月2日には2度目の現地説明会を開催したところ約100名もの多数の参加があった。その後補足調査を行い、平成15年



第13図 青木遺跡・調査区配置図

3月12日にⅠD区の調査は終了した。

ⅢB区はⅠD区の調査が予想外の展開になったため、急遽、山持遺跡の調査班が山持遺跡終了後に調査を行うこととなり10月16日から調査を開始した。調査の結果、中世の掘立柱建物跡や溝、ピット群を検出した。遺物は白磁・青磁を中心とする輸入陶磁器や国産陶磁器、土師質土器、木製品等が出土している。ⅢB区の調査は12月26日で終了した。

2. 平成15年度の調査

平成15年度の調査はⅠC区（今後はⅠD区と合わせてⅠ区と呼ぶ）とⅣ区の調査を2班体制で実施した。Ⅰ区は2,600m²、Ⅳ区は3,000m²が調査対象面積である。調査は表土掘削や廃土処理に手間取ったが6月2日より開始した。現地調査を開始した直後、昨年度出土遺物の整理中に絵馬1点を確認した。絵馬は中国地方では初めて出土したことから6月12日に記者発表を行った。奈良・平安時代の調査では礎石建物の他に神社の可能性のある建物や石敷きの井戸跡など特殊な遺構や多量の墨書き土器・木簡などを検出していたが、9月末にはⅣ区から神像が出土した。信仰の対象であった神像が遺跡から出土することは極めて珍しく、また、今回出土した神像は現存する神像のなかでは最古級の可能性があることから注目され、10月14日に記者発表を行い、10月19日に神像と古代の遺構について現地説明会を開催し、約380名の参加があった。

11月に入りⅣ区から田の壳質を記した「壳田券木筒」が出土し、この木筒も全焼で初めての出土であったことから、11月18日に記者発表を行った。このように貴重な発見が相次ぎ、遺跡の重要性がさらに高まったため古代の遺構面で保存する方向となり、古代の遺構を残しながら弥生時代の遺構面の調査を進めていった。弥生時代では四隅突出型埴丘墓と貼石墓を確認していたが、調査終了同時にⅠ区から最古型式と考えられる四隅突出型埴丘墓が認められたため、翌年1月14日に記者発表をし、1月18日に第2回目の現地説明会を開催して250名もの多数の参加があった。その後、補足調査を実施して、平成16年1月20日で現地におけるすべての調査が終了した。

第3節 整理作業の経過

1. 経過

整理作業は平成15年度に平成13・14年度に調査を実施したⅠA～ⅠD区とⅡ区の中世遺構面の報告書作成作業を2班体制で行い、同時にⅠD区の弥生時代～奈良・平安時代の遺物の整理についても僅かであるが進めていた。この整理中に絵馬1点を確認している。

なお、平成15年度末には青木遺跡（中近世編）の報告書を刊行している。

平成16年度は山持遺跡の報告書作成と青木遺跡の整理を1班体制で行った。青木遺跡の整理は膨大な量の遺物の中から墨書き土器や木簡などの文字資料の抽出を優先的に行った。これらの実測や文字の解読は困難を極めたが、年度末には墨書き土器が約800点、木簡は95点となっていた。

平成17年度は2班体制で本格的に報告書作成作業を開始した。16年度に引き続き文字資料の整理に追われながら、弥生土器、須恵器などの接合・実測、写真撮影、遺構図作成、原稿執筆等を行い、17年度末に弥生～平安時代編の報告書刊行の運びとなった。

2. 調査指導者

(敬称略、指導日順)

平成14年度

- 渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）
山田康弘（島根大学法文学部助教授）
井上貴央（鳥取大学医学部教授）
田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）
蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員）

平成15年度

- 渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）
田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）
蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員）
井上貴央（鳥取大学医学部教授）
加藤友康（東京大学史料編纂所教授）
金田草裕（京都大学院文学研究科教授）
南木勝彦（流通科学大学教授）
浅川滋男（鳥取環境大学教授）
梶山林繼（國學院大學教授）
辰巳和弘（同志社大学助教授）
山中敏史（奈良文化財研究所室長）

平成17年度

- 佐藤 信（東京大学教授）
平川 南（国立歴史民俗博物館長）
渡邊光宏（奈良文化財研究所室長）
伊藤 実（広島県埋蔵文化財調査センター）
山田昌久（首都大学東京助教授）
難波洋三（京都国立博物館考古室長）
淺漱 繁（京都国立博物館主任研究官）

第3章 弥生時代の成果の概要

第1節 基本層序と遺構面の状況

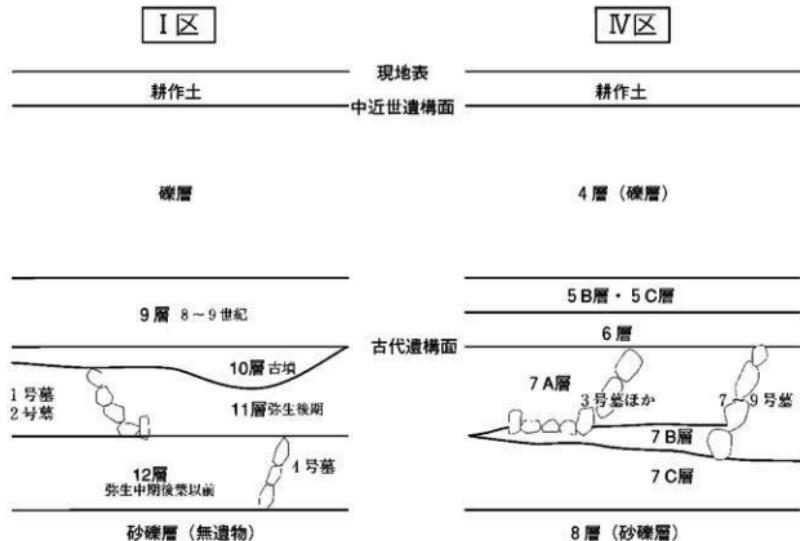
1. 遺跡の基本層序

弥生時代の遺構面は標高3.3~4.2mにかけて形成されていた。基本的に北から南へ向けて地形が下がっており、それに合わせて遺構面もゆるやかに傾斜する。調査時の現地表は標高6.1~6.9mであり、遺構面とは約2.8mの高低差がある。

第14図に青木遺跡の基本層序を示した。層位名はI区とIV区で異なり煩雜であるが、地区により層序関係が微妙に異なる部分もあるため、あえて統一せずに調査時のままで用いることとする。なお本文中で特に断りなく「I区9層」や「IV区基本層序8層」と言った場合は、ここで示した層位を指す。

古代以降の土層

現地表直下は水田耕作上・洪水沙など複数次にわたる堆積上で、その下に中近世の遺構面が残る。この遺構面の基盤層が、山系の谷筋から襲った上石流堆積物で、大小の砾を中心とした上層である。これをIV区では4層としている。4層の堆積上には構成物の粒度がそろった横位堆積があり、ゆるやかな水流が認められる部分もある。しかしながら4層の大半は1単位で構成されており、1度の大規模な上石流によって一気に堆積が進んだことが見て取れる。この上石流が起こった時期は限定できないが、IV区ではこれに被覆されている遺構が10世紀頃



第14図 基本層序模式図

とみられるため、10~13世紀の間と推定される。

古代の遺構面と弥生時代の遺構面の関係

I区の9層、IV区の5層・6層は古代の遺構面上に堆積した土層であり、8世紀後半~9世紀の遺物を包含している。この包含層の直下に被覆された古代の遺構面は、標高4.5m前後に形成されている。古代の遺構面はあまり南北の高低差がないことから、弥生時代の遺構面が比較的高い北寄りの地点では両者の高低差が小さく、30cm程度の高低差しかない。特に墳丘墓など高さをもつ遺構については、残存する最も高い部分が古代の遺構面と重複して、同一面で検出されたものもある。

弥生時代の包含層

I区の10層に対応する古墳時代ごろの包含層は、IV区では特に名称を設定していない。IV区で7層とした土層の上部で古墳時代の遺物が出土しており、これらは次章で扱っている。

I区の11層とIV区の7A層・7B層は墳丘墓を被覆する、弥生後期を中心とした時期の包含層である。第14図では説明のためにこの部分を早く表現しているが、実際にには遺構を直接被覆する土層は非常に薄い。したがってIV区では、7A層・7B層にあたる遺構被覆土から出土した遺物はそれぞれの遺構の頂で「被覆土中出土遺物」として扱った。IV区では、I区11層にあたる弥生後期の遺物は上として古代遺構面より上の6層中から出土している。

よって7A層・7B層は説明のための便宜上の層序であって、本文中で基本層序7層とするものは、厳密には図中の7C層に対応する。

IV区7層(厳密には7C層)は弥生中期以前の包含層で、I区の12層と対応する。大半の墳丘墓はこの土層を基盤として構築されている。一方、このI区12層に被覆された4号墓が墳墓としては最も層位的に古い。またIV区SK04は7層下面(8層上面)から掘り込まれた土壌であり、弥生中期中葉の遺物を含む。これが青木遺跡で確認されている最も古い時期の遺構である。

最下層の8層は河川堆積物とみられる細かな砂疊層で、遺物をほとんど含まない。溜耕設置などの際の掘り下げによって弥生前期の土器が出土しており、8層がそのころの堆積である可能性もある。標高3m以下であり涌水がはげしいため、これ以下については調査をおこなっていない。

第2節 遺構の概要

1. 四隅突出型墳丘墓・貼石墓の概要

第1表 四隅突出型墳丘墓・貼石墓一覧表

遺構名	調査区	平面形	規 模 (m)				時 期	墳丘主軸	掲載ページ
			墳丘本体		突出部含む				
1号墓	I区	四隅突出型	14+	8.8+	19.4	15.2	弥生後期後葉	N-6°-E	37
2号墓	I区	四隅突出型	9.0	7+	10+	7.4+	弥生後期	N-6°-W	61
3号墓	IV区	四隅突出型	9.1+	-	11.2+	-	弥生後期後葉~後期終末	N-3°-E	71
4号墓	I区	四隅突出型	16.2	2.9+	17.0	-	弥生中期後葉	N-4°-W	88
5号墓	I区	方形	7	6+	-	-	弥生後期前葉~後葉	N-18°-W	106
6号墓	I区	方形か	3.0+	2.0+	-	-	弥生中期中葉~後期中葉	-	109
7号墓	IV区	方形	6.5	-	-	-	弥生後期前葉~中葉	-	115
8号墓	IV区	円形付設	3.0	-	-	-	弥生後期前葉~中葉	-	〃
9号墓	IV区	方形付設	3.5+	-	-	-	弥生後期前葉~中葉	-	〃
10号墓	IV区	円形	-	8.5	-	-	弥生中期後葉~後期初頭	-	124
11号墓	IV区	方形	7.2+	-	-	-	弥生後期初頭	N-8°-W	132
12号墓	IV区	方形付設	3.2	2.5	-	-	古墳前期初頭	N-3°-W	〃

数量と位置関係

I区・IV区から計12基の墳丘墓を検出した（第1表）。その内訳は四隅突出型墳丘墓が4基、方形貼石墓4基、円形貼石墓1基、貼石墓に付設された小規模な貼石区画3基である。造構名は検出した順に番号をふっている。IV区については整理時に造構名称を改めたものがあり、次章本文の各項で詳細を記した。

各造構の位置関係は第15図（32ページ）に示している。東西120mにわたって墳丘墓が分布している。I区の西半とIV区の北東側に集中しており、図中でアミ掛けした部分では確認されていない。これは奈良・平安時代の建物跡など重要な造構が検出された部分にあたり、それらを保護するために弥生時代の造構面まで掘り下げていないためである。この範囲内については弥生時代の造構の有無が不明であるが、密度や配置からみて、同様に分布している可能性が極めて高い。

遺存状態

墳丘墓のほとんどは古墳時代から奈良・平安時代にかけて削られ、遺存状態は悪い。かろうじて墳丘の下部が遺存するものが3基ほどあるが、上部が削平されていることなどから主体部等は検出できなかった。多くは貼石の最下段あたりが部分的に残存するのみで、本来の位置から動いた状態で石が散らばっているために墳形が断定できないものもある。

時期

独立した墳丘墓の築造は弥生中期後葉のものが最も古く、後期後葉のものが最も新しい。付設される貼石区画は山塙前期初頃までみられる。詳細な時期を特定できるものは少ないが、共伴遺物や層位から第1表のように整理される。

四隅突出型墳丘墓である4号墓と方形貼石墓6号墓が初期のもので、弥生中期後葉に現れる。6号墓は被覆土中に中期中葉のものが含まれており、若干先行する可能性を残す。円形貼石墓10号墓と方形貼石墓11号墓が後期初頃とみられ、4号墓に後続するものである。

その後、後期前葉から中葉にかけては貼石墓が中心であり、墳丘規模も縮小化がうかがえる。6・7・8号墓が相次いで作られるほか、5号墓もこの時期の可能性がある。2号墓は配石構造からこの頃の四隅突出型墳丘墓と推定されるが、10m以下の小型のものである。

後期後葉には四隅突出型墳丘墓1号墓と3号墓が築造されており、これを最後に独立した墳丘墓の築造は停止する。ただし、方形貼石区画である12号墓のような付設造構は、古墳時代初頃になっても作られている。

墳丘をもつ埋葬造構は1号墓あるいは6号墓が初現であるが、SK04のような土壤墓とみられるものが中期中葉にあり、墓域としての立地契機はさかのぼる可能性がある。また、墳丘墓が作られなくなった古墳前期にも人骨を残す土壤墓はあらたに構築されていることから、埋葬は統いておこなわれたと評価される。

墳丘の規模

墳丘の規模を比較すると四隅突出型墳丘墓が他の貼石墓よりひとまわり大きく、遺跡内の墓制階層としては最上位と評価できる。1号墓と3号墓はほぼ同規模で、突出部を含まない方丘部が一辺長さ13~14mある。四隅突出型墳丘墓としては中型の部類に入るものである。4号墓は一辺長さ16.2mあり、それよりわずかに大きい。弥生中期の墓制の中では傑出した規模である。

その他の貼石墓は、判明しているもので見る限り7~8m程度の小規模なものが中心である。11号墓はレーダー探査で一辺13mほどの規模である可能性があり、これらの中では最も大きいものとみられる。

墳丘の方位

墳丘の主軸方位は正方位に近く、3~8°ほどの差で東西に振れている。北山山系の主稜線や扇状地の展開方位はこれと異なり、周辺地形等の制約は考えられないため、墳丘墓はいずれも正方位を意識した方位配置であると判断される。1号墓と2号墓でしか判断できないが、長方形の墳丘は南北に長く主軸をとるように見受けられる。なお、5号墓のみが18°西に振れており、他のものとやや方位が異なる。

第2表 人骨・土壙墓一覧表

遺構名	調査区	時 期	年 齢	性 別	埋葬姿勢	埋葬標高	埋葬主軸	掲載ページ
1号人骨	I区	弥生後期後葉～古墳中期	壯年	女性	横臥伸展葬か	3.8m	N-0°	142
2号人骨	I区	弥生後期～古墳中期	8歳程度	不明	不明	3.9m	N-90° -W	143
3号人骨	I区	弥生後期～古墳中期	壯年～熟年	女性	仰臥伸展葬	3.8m	N-15° -W	ク
4号人骨	I区	弥生後期～古墳中期	成人	男性	不明	3.8m	不明	144
5号人骨	I区	弥生後期～古墳中期	壯年後半～熟年	男性	仰臥伸展葬	3.9m	N-98° -W	ク
6号人骨	I区	弥生後期～古墳中期	不明	男性	仰臥伸展葬	3.6m	N-60° -E	ク
7号人骨	I区	弥生後期～古墳中期	熟年	女性	仰臥伸展葬	3.7m	N-88° -E	ク
8号人骨	I区	弥生後期～古墳中期	5, 6歳程度	不明	不明	3.9m ?	不明	ク
9号獸骨	I区	弥生後期～古墳中期	犬			3.8m	不明	ク
10号人骨	IV区	古墳前期	不明	不明	仰臥伸展葬	5.1m	N-80° -E	145
11号人骨	IV区	古墳前期	不明	不明	仰臥伸展葬	5.3m	N-90° -E	ク
12号人骨	IV区	古墳前期～後期	不明	不明	横臥伸展葬か	3.9m	N-95° -W	ク
SK03	IV区	弥生前期～中期後葉				4.1m		ク
SK04	IV区	弥生中期中葉				4.0m		146

2. 人骨・土壙墓の概要

数量と配置

埋葬姿勢の人骨はI区、IV区合わせて11体を確認した。このほか犬とみられる獸骨（9号獸骨）1体がある。また、埋葬姿勢は残らないが、理上中に部分的な骨片が含まれるSK03とSK04の2基は土壙墓と考えられる。

人骨はI区では1号墓の北東側で8体、IV区では3号墓の北側に2体と調査区中央付近で1体検出した。いずれも埴丘墓を避ける位置に配置されており、特に3号墓では埴丘辺に沿うように、主軸をそろえて埋葬されている。埴丘墓を意識した配置と考えられる。

人骨の時期

埋葬姿勢をとどめる人骨は本来墓壇面近くに置かれたはずであるが、墓壇のほとんどは後世に削り去られていて、かろうじて墓壇底面と人骨が残存している状態で検出された。したがって、本来の墓壇の掘り込み面は残っていない。また、墓壇内で人骨と共に置かれた遺物は銅鐸片を除けば皆無であり、埋葬時期を直接知る根拠は極めて少ない。

周辺の埴丘墓との層位的関係からみると、I区の1号墓より1号人骨は新しいと判断される。その根拠は1号墓の頃で詳述している。また、IV区の3号墓より10号人骨・11号人骨は明らかに新しい。この3体の埋葬時期については、仮に埴丘墓が築造された直後と仮定しても弥生後期後葉をさかのばらない。むしろ埴丘墓の構築面とのレベル関係をみると、埴丘墓の埋没がかなりの土砂によって進んだ後に墓壇が掘り込まれたと考えられる。その時間差を考慮すると埴丘墓よりかなり新しく、古墳時代に入る可能性が高い。残存した人骨は古墳中期の包含層で被覆されているものがあり、年代の下限は古墳中期となる。

3体以外の他の人骨についても、上記の3体と層位的関係は近い。第2表には人骨が残存していた標高を示した。I区についてみれば、3.6～3.9mに集中がみられる。これらと近い位置にある1号墓の埴丘掘は標高3.7～3.8mであり、人骨の垂直位置は1号墓の構築面とほぼ同じということになる。墓壇の深さは少なくとも50cmは必要であろうから、本来の墓壇掘り込み面は1号墓の構築面より50cm以上高かったはずである。こうした推定にもとづけば、これらの人骨の埋葬時期は1号墓の築造時期である弥生後期後葉より新しく、古墳前期を中心とする時期であった可能性が高い。人骨が多数出土した調査時には、1号墓がごく一部しか確認されていない状況であったためにそれと同時期あるいはそれより古い可能性をもつと想定し、弥生時代の人骨と評価していた。しか

その後に1号墓のほぼ全容が明らかになり、人骨との層位的な検討が可能になったことから、最終的な報告では上記の年代を結論としたい。

人骨の取り扱い

I区では比較的良好な保存状況で残存していた。基本的に企点を取りあげている。中には骨が脆弱になつたものがあったので、発砲ウレタンで人骨を覆い、周囲の土ごと取り上げたものもある。IV区で検出された3体はI区に比べて遺存状態が不良であり、かつ遺構を保護して埋め戻す方針が決定していたため、上面を検出して埋葬姿勢と方位等を確認し、記録した段階でただちに埋め戻した。

取りあげた埋葬姿勢を保つ人骨は、すべて鳥取大学医学部井上貴央教授に鑑定をお願いした。最終的な整理作業が完了していないため、本書では人骨の性別や年齢などごく概要を記すにとどめ、次年度以降にあらためて詳細な観察結果を報告する予定である。

また、I区では弥生～古代の包含層中から大量の獸骨が出土している。本来の位置関係を保たず、層位との対応が乱されているため明確な時期を判断できたものは限られている。これらの獸骨についても全量持ち帰り、現在整理作業を進めている。

土壤墓

上記の人骨以外に、IV区ではSK03とSK04の2つの土壤を確認している。IV区の北寄りに位置し、いずれも埋土中から骨片が断片的に出土した。明確な棺痕跡など認められない。人骨は残存状態が悪く埋葬姿勢など明らかでないが、いずれも土壤墓と考えられる。

第3節 遺物の概要

遺構に伴う遺物

墳丘墓等の遺構に伴う遺物は、第4章の各遺構の項に掲載している。遺物の内容はほとんどが土器であり、それ以外には唯1号人骨に伴う銅鐸片がある。原位置を保ち、遺構に確実に伴うものは少ない。遺構の被覆土や基盤層から出土したものは直接遺構と関係ないが、年代等を考えるために重要であるため、それぞれ関連遺物として遺構の項に掲載している。

包含層出土の遺物

出土状況が遺構と関係しない遺物については、包含層出土遺物として第5章でまとめて扱った。内容は土器、土製品、石器・石製品、鹿角製品である。

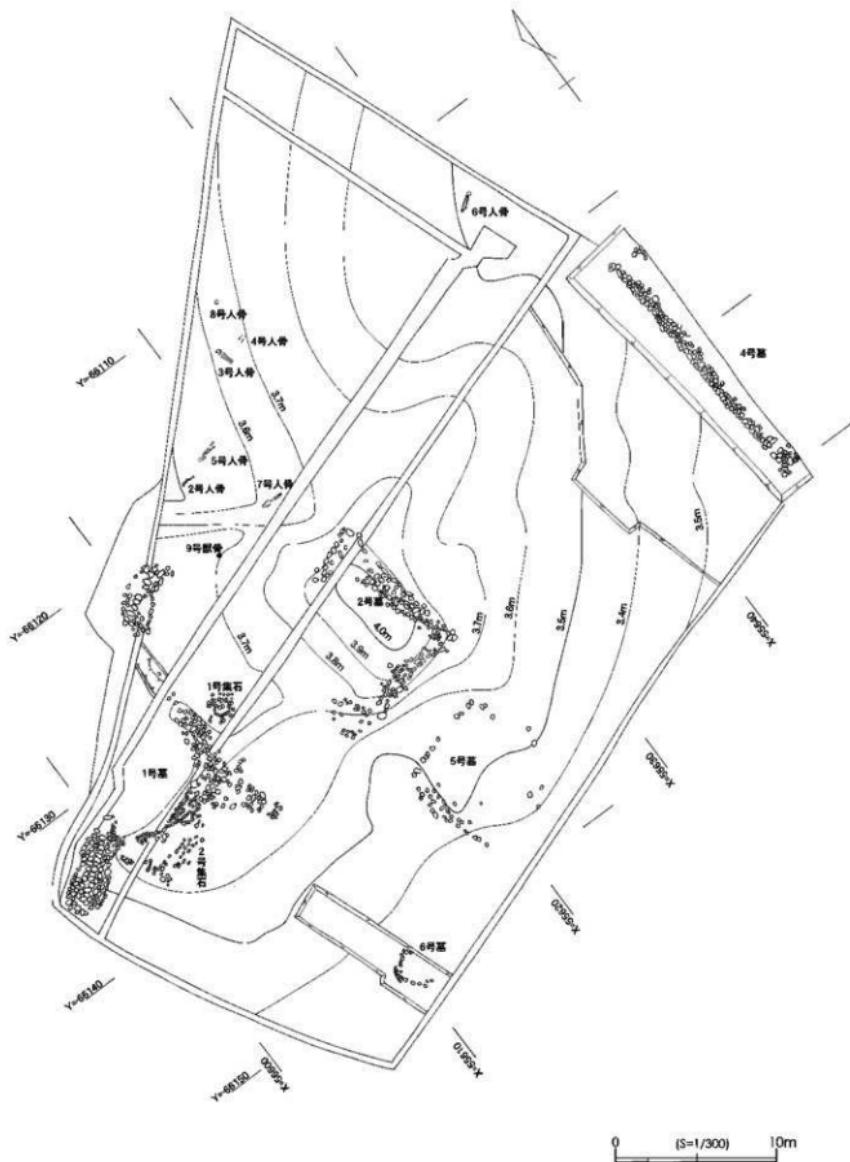
土器は292点を掲載した。I区とIV区それぞれ、出土層位とグリッドごとにわけて掲載している。掲載したもの以外にコンテナ170箱分の弥生土器が出土しているが、跡全体の傾向を示すように意識しながら、残存状況の良いもの、特徴的なものを選別して掲載した。

土製品は分銅形土製品と管状土鍤、十玉、紡錘車、有孔円盤がある。分銅形土製品は9点出土している。出土層位はさまざまで、古代の包含層に含まれていたものもあるが、弥生中期後葉から後期初頭にかけてのものと考えられる。

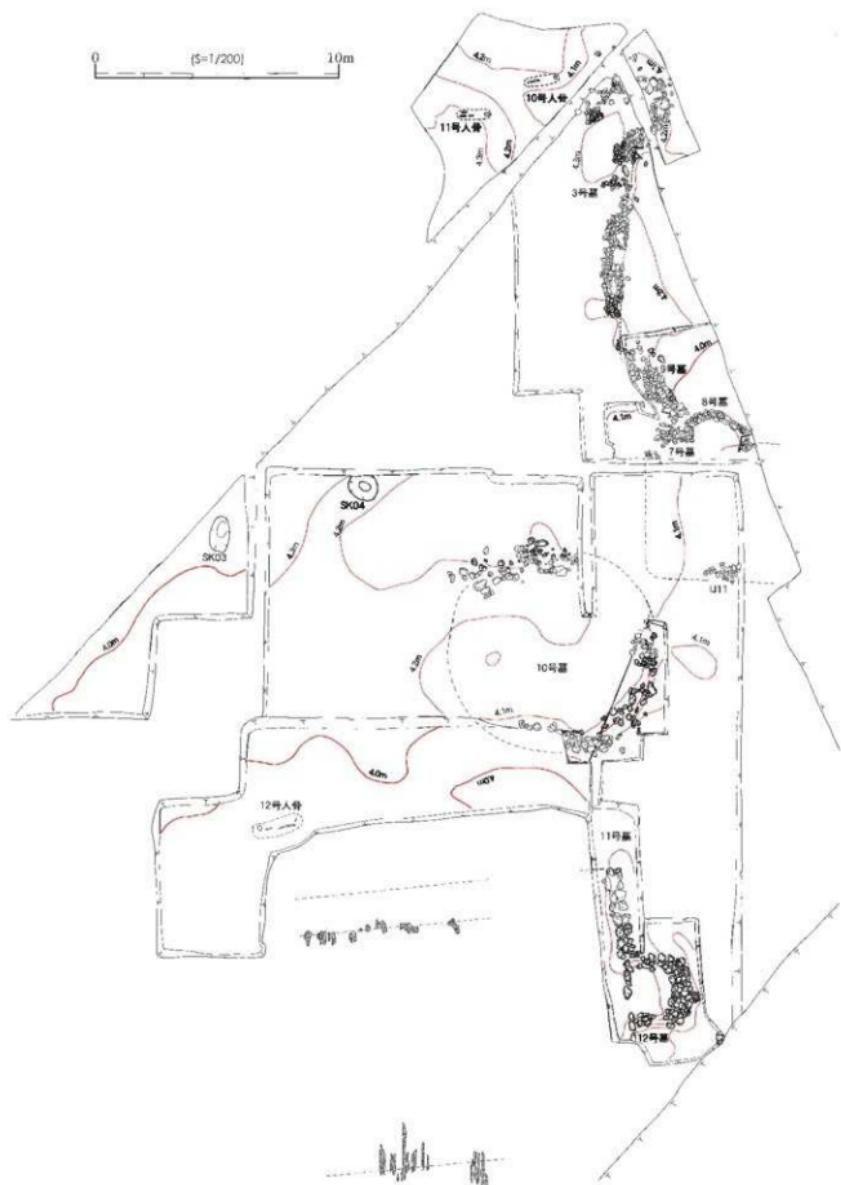
石器・石製品は53点出土した。砥石および玉類には古墳時代以降のものが含まれる可能性があるが、峻別しがたいために当遺跡出土の石器・石製品はここでまとめて掲載した。

鹿角製品は8点出土しており、ニホンジカの角を素材とする製品および加工残材。刻み目をいたした刻骨1点があるほか、筒状の製品3点がある。4点は角から素材を切り出した加工痕跡を残す残材である。また人工的な加工は加わっていないが、サメの椎骨3点が出土しており、写真のみ掲載した。

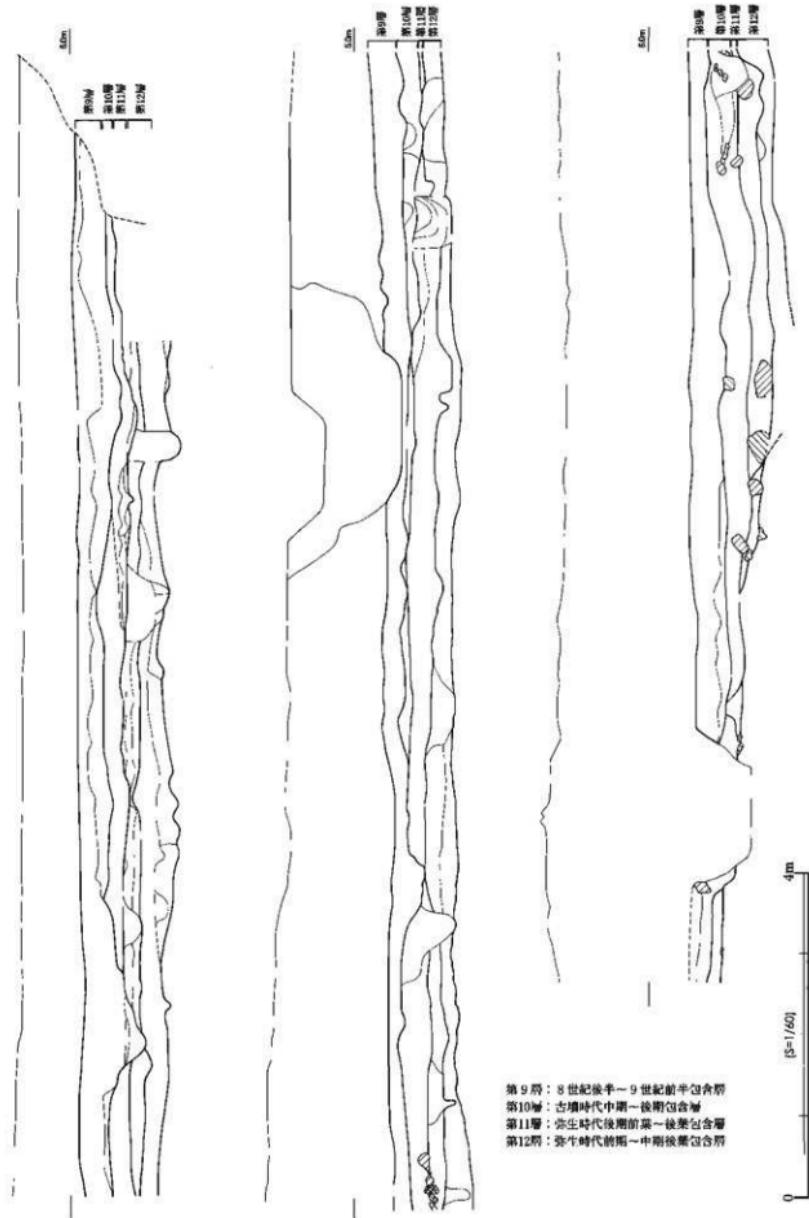
第15図 弥生時代の遺構全体図
(上IV区、下1区)



第16図 I区 弥生時代の遺構配置図



第17図 IV区 弥生時代の遺構配置図



第18図 I区北壁土層断面図

第4章 弥生時代・遺構の詳細

第1節 四隅突出型墳丘墓・貼石墓

1. 1号墓

位置と調査経過

全体図を第19図に、部分の実測図を第20~24図に示した。

1号墓はI区の北西端寄り、標高約3.8mの位置に築造された四隅突出型墳丘墓で、3箇所の突出部を含む平面全体の70%程度を調査している。突出部の1箇所は事業地外のため調査を行っていない。墳丘上部は後世の削平を受けて失われており、遺存状態はあまり良くない。なお墳丘東辺の北東突出部付近では銅鐸片を伴う土塙墓（1号人骨）が重複している。

1号墓を確認する以前におこなったトレーナー調査によってすでに1号人骨を確認していたため、周辺に土塙墓群が存在している可能性が高いものと考え、それらの検出を中心に調査を進めていた。1号人骨からは人骨とともに銅鐸片が出土したことから、周辺の調査も慎重に行っていたところ、1号人骨の西側で板状の石列が4段程度並んでいるのが確認された。この石列は墳墓の可能性が考えられたため慎重に包含層の掘削を進めたところ、板状の石列は一列に並びその周辺にも石が貼り付けられていることが次第に明らかとなり、これらの石列は四隅突出型墳丘墓の突出部であることが判明した。これは南西方向に突出する突出部であったことから、この時点では銅鐸片を伴う1号人骨が四隅突出型墳丘墓の主体部である可能性も考えられた。しかし、調査が進み南東突出部と北東突出部を検出した段階で1号人骨は1号墓の主体部でないことが判明した。それは1号人骨が1号墓東辺の墳丘斜面に平面に重なり、同時に併存することが位置関係上不可能だからである。

1号墓と1号人骨（銅鐸片を伴う）との前後関係

1号人骨と1号墓との前後関係を把握するには、両者の切り合い関係を確認する必要がある。すなわち、1号人骨の墓壙が1号墓の貼石を切り込んでいるのか、あるいは逆に貼石が1号人骨の墓壙を覆っているか、という点である。ところが、1号人骨の墓壙は、存在が判明する以前に設定した確認調査時のトレーナーや排水溝等によって掘削され、すでにほとんどが失われていた。よって、上記の貼石との重複関係は把握できない状況であった。

次に、両者のレベル（標高）関係を比較検討した。1号墓の填埋レベルは、東辺中程で3.80~3.85m、北東突出部付近が3.60mで、問題となる1号人骨と重複するあたりは3.7mと推定できる。一方、1号人骨の墓壙底面は標高3.8mであった。この比較から、1号人骨の墓壙は1号墓より少なくとも10cm以上、高く浮き上がっていたことになる。したがって、1号墓が後に作られたとすれば1号人骨の墓壙は完全に削り去られて底面を残さなかつたはずであるが、実際には墓壙底面の残存を確認している。

上記の理由から、1号墓が完成後に一定時間が経過し、墳丘を被覆する土砂の堆積が進んだ段階で1号人骨の墓壙が掘り込まれたと考えられる。つまり1号墓が古く、1号人骨はそれより新しいという結論が導かれる。

規模・埋葬施設

1号墓の墳丘は南北方向に長い長方形を呈しており、主軸方向はN-6°-Eをとる。突出部を除いた平面規模は南北約14m、東西約8m、突出部を含めると南北約19m、東西約15mを測り、墳丘に比べて突出部は比較的大きいものである。墳丘の上部は古墳時代中期~奈良時代の削平によって失われ、本来の墳頂面は残っていない。現状で残存している最大の高さで40cmを測る。残存上面において、埋葬施設の底部が痕跡を残していないか精査したが、確認することはできなかった。

墳丘は弥生前期~中期後葉の包含層（I区12層）を基盤面にして造られる。周囲に周溝は認められなかった。

貼石の状況

埴丘斜面は約15°前後の緩やかな傾斜をもち、斜面には貼石を施している。検出当初は搅乱等により浮いていた石も多く、築造時の原位置を保っている可能性が高い貼石を選択しながら調査を行った。貼り付けられた貼石は10~40cmの石を使用しているが、南辺側は10~20cmの若干小さめな石を貼り付け、南西突出部に向かっては搅乱により石が流出して状況が把握できないが、8段以上貼り付けていたと考えられる。裾部には30cm程度の石を立石状に並べられている状況が部分的ではあるが認められる。東辺側の貼石は20~40cmと比較的大きいものを使用して5段以上貼り付けている。裾部には立石を意識した並びが部分的に認められる。

また、埴丘南辺及び東辺側には集石が認められ、埴丘から転落した貼石の可能性も考えられるが、円形状に組まれた石組みも認められるため、遺構の可能性を考慮し1号集石・2号集石として後述する。

突出部の状況

3箇所の突出部を調査している。

南西突出部(第22図)の遺存状況は比較的良好で規模は長さ約5m、幅約2.4mを測る。突出部は全面が石で被われ、上面の稜線上には「踏石状石列」が認められる。「踏石状石列」は長さ約40~60cm、幅30~40cmの板状の石を一列に敷いており、一部石が失われているが15個遺存していた。その周辺には40cm前後の大きさの石で貼石を施している。裾部には石が失われている部分もあるが30cm程の石を縦もしくは横に立てた立石と石を平らに敷いた敷石をめぐらしている。

南東突出部(第21図)は他に比べて遺存状況が悪く、石の流出が目立つ。特に突出部の稜線部分と先端部の遺存状況が不良であるが、規模は長さ約4.5m、幅約2.5mを測る。貼石が他の突出部と比べて20cm程度の小さめの石を使用していることから、全体的に他の突出部とは違う印象を受ける。また、埴丘際の稜線上には周辺の石より若干大きい40cm前後の石が5、6個残存しており、その状況は二列並んでいたように見えるが、これが「踏石状石列」を構成していたかどうか判断できなかった。裾部の遺存状況も悪く、立石や敷石も確認できなかった。

北東突出部(第20図)は南西突出部と同じ形態を呈していたと思われるが、南西突出部の貼石は密に貼っているのに比べて石の貼り方が粗雑な印象を受ける。突出部の規模は長さ約4m、幅約2mを測り、突出部上面の稜線上に明瞭な「踏石状石列」を有している。「踏石状石列」に使用されている石は長さ40~60cm、幅30cm前後の板状に近い石を一列に並べ、10個が遺存していた。この先端部の両脇には同規模の石が長軸を突出部に並行するように置かれている。裾部には20~40cm程度の石を縦もしくは横に並べた立石が認められたが敷石は認められなかった。

1号墓周辺の出土遺物

第25図~第27図に1号墓に関連する遺物実測図を掲載している。

埴丘上面は古墳時代~奈良時代の包含層によって削平を受けており、上体部等が完全に消滅していたため1号墓に確実に伴う遺物は不明である。特に埴丘の東寄りは古墳時代中期~後期の遺構、遺物で著しく搅乱されていた。そのような状況であったため覆土には弥生時代から奈良・平安時代の土器が混在しており、今回掲載した上器は南西突出部の貼石上面や貼石の間で出土したものとなるべく選び出して図示している。

第25図1~11は複合口縁の壺である。1~7は口縁部が外反してのび、複合口縁の稜が下向きに突出するもので、外面に3~7条の掘凹線を施す。8、9は口縁部が外反気味に長くのび、複合口縁の稜が横方向に屈曲するもので、外面には多条の掘凹線を施している。10、11は口縁部が若干薄く作られ外面に掘凹線を施さないものである。第25図12~第26図2は複合口縁の壺である。12、13は短いL字縁部の外面に掘凹線を施したもので、13は頸部に波状文を施している。14はL字縁部外面に掘凹線を施さないものであるが、頸部に櫛状工具による刺突文を施す。第26図1はL字縁部を欠くもので、肩部から胴部に円形浮文や列点文、斜格子文などで装飾されている。2は胴部から底部にかけて扁平を呈する特異な形態をしている壺で、口縁部は外反してのび端部はやや平らに近い。胴部

の形態が「地域ではあまり見られないもので搬入品の可能性も考えられる。3~9は器台である。3~6は外面に多条の擬凹線を施し、その他は擬凹線を施さないものである。3~5は受け部及び脚部がやや短めで、6は長いものである。第27図1~3は搬入品と考えられる土器である。1は口縁端部外面に刺突文、頸部の境に突帯をめぐらす。2は胸部外面に突帯をめぐらし、刺突文を施している。3は腹部片で2条の突帯をめぐるもので、全形は把握できないが壺柄の可能性も考えられる。4は注口土器の把手である。5、6はスタンプ文土器の胴部に突帯をめぐるもので、突帯の上下端が突出している。外面には半裁竹管による刺突文やC字状文のスタンプ文で装飾を施している。7は特殊壺形土器で頸部はやや直線的にのび、胸部との境に凹線を施している。胴部は外面に2条の突帯をめぐらし、上部に刺突文を施している。外面に赤色顔料を塗布している。8は瓶で底部に円形の孔4個を有している。

第27図8を除いては後期前葉V-2~3の様相を呈しているものと考えられる。

1号墓の時期

築造時期については、主体部を検出できなかったことや、明確に共伴する遺物がないことから判断し難いが、墳丘築造基盤面の時期から中期後葉以降であることは確実である。貼石の隙間から出土した土器は築造時と時間差をもつ可能性があるものが含まれているが、全体的な様相から、弥生時代後期後葉頃と推定される。

1号集石

1号墓東辺側に隣接する位置で検出した集石遺構である(第23図)。平面形状は円形状を呈しており、規模は1.9m×2.0mを測る。石の大きさは拳大~50cm程度のものを全面に貼り付けている状況が認められる。断ち割り調査を行っていないため性格や1号墓に付属するものか否かは判断できなかった。

時期については1号墓同様に古墳時代の搅乱を受けていたため、集石上には古墳時代の土器片が認められたが、築造面が1号墓と同様の第12層であることから、1号墓と同時期ないし後出するものと考えられる。

2号集石

墳丘南辺側から約2m離れた位置で検出した集石遺構である(第24図)。墳丘から転落した貼石等が集積したとも考えられるが、北辺側が弓形の形状を呈していることから墳丘墓もしくはそれに付随するものの可能性もある。

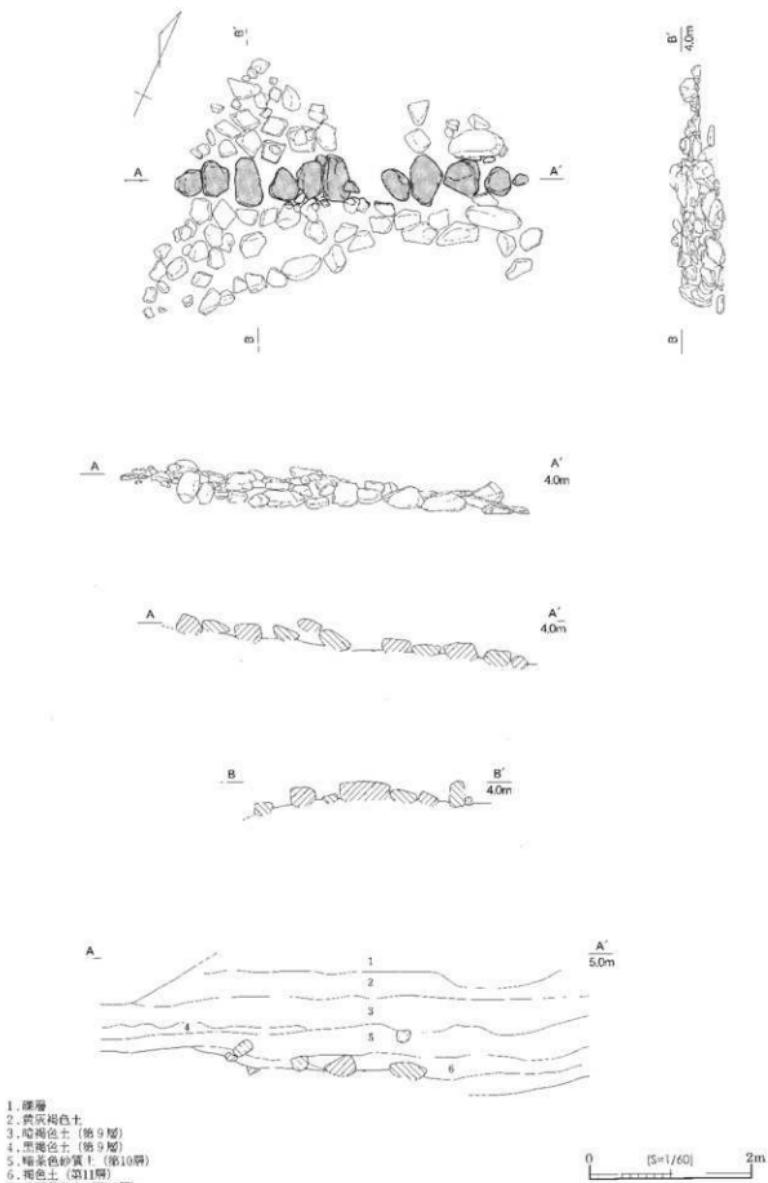
規模は6.5m×3.0mを測り、石が散乱している状態で検出した。石の大きさは拳大~35cm程度のもので、西側はやや密に石が集石している状況である。これを墳丘墓等の遺構とするかの判断はつきかねるが、この集石内からは弥生時代後半の土器が出土している。

2号集石出土遺物

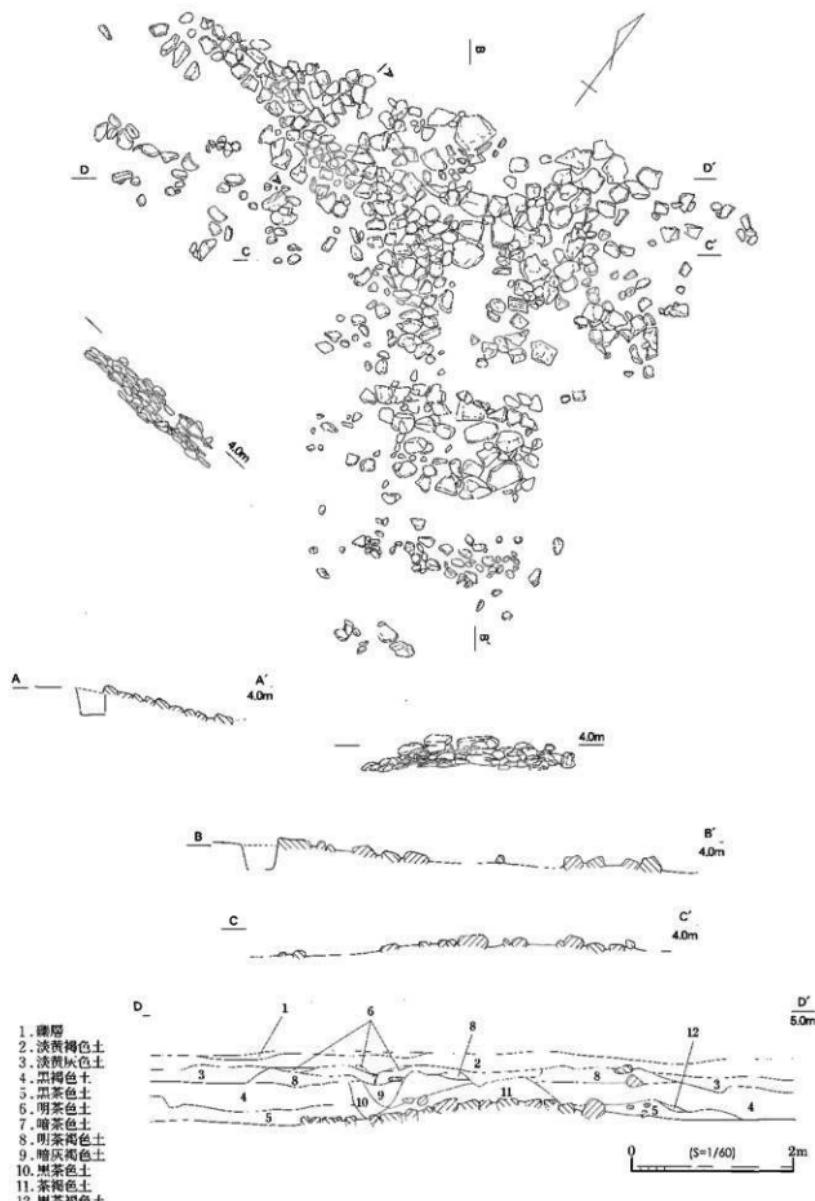
第28図に示した。1~3は擬凹線を施す複合口縁の壺である。1は口縁部が短くのびるもので肩部に櫛状工具による刺突文を施す。3は頸部下半に擬凹線を施す。4~7は擬凹線を施さない複合口縁の壺である。5、6は肩部に波状文を施している。8は広口壺の口縁部で、外面に凹線を施す。9は外反して長くのびる口縁部を有する壺である。10はスタンプ文土器で胸部に突帯をめぐらし、突帯の上下端が突出している。外面には半裁竹管による刺突文、C字状文で装飾されている。11は壺の底部で平底を呈している。12は蓋の把手である。



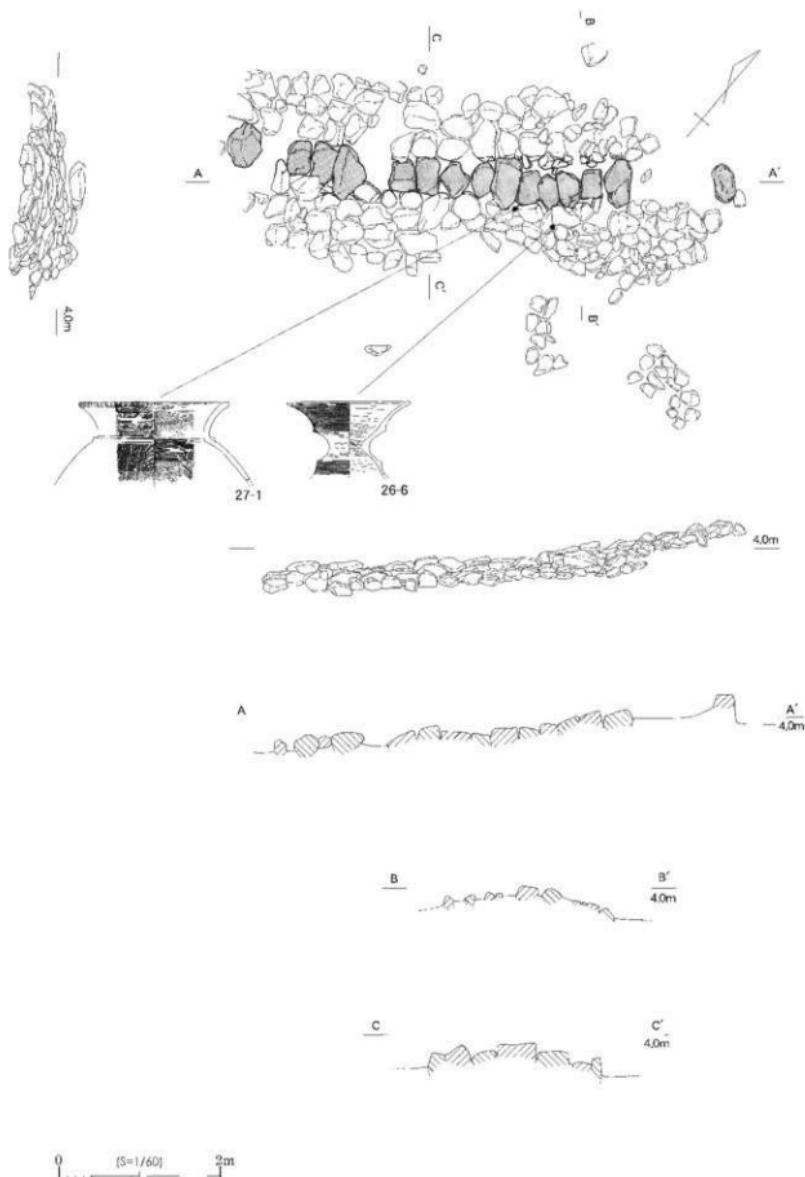
第19図 1号墓実測図



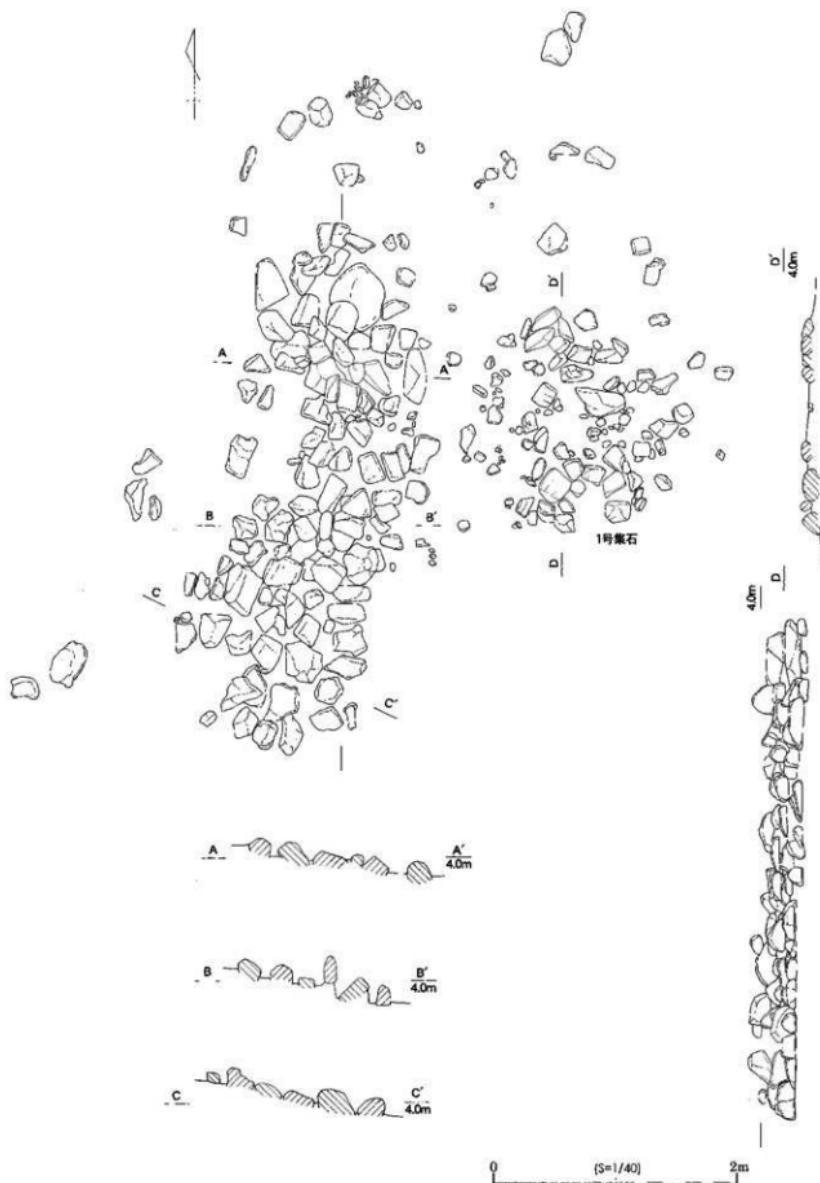
第20図 1号墓北東突出部実測図



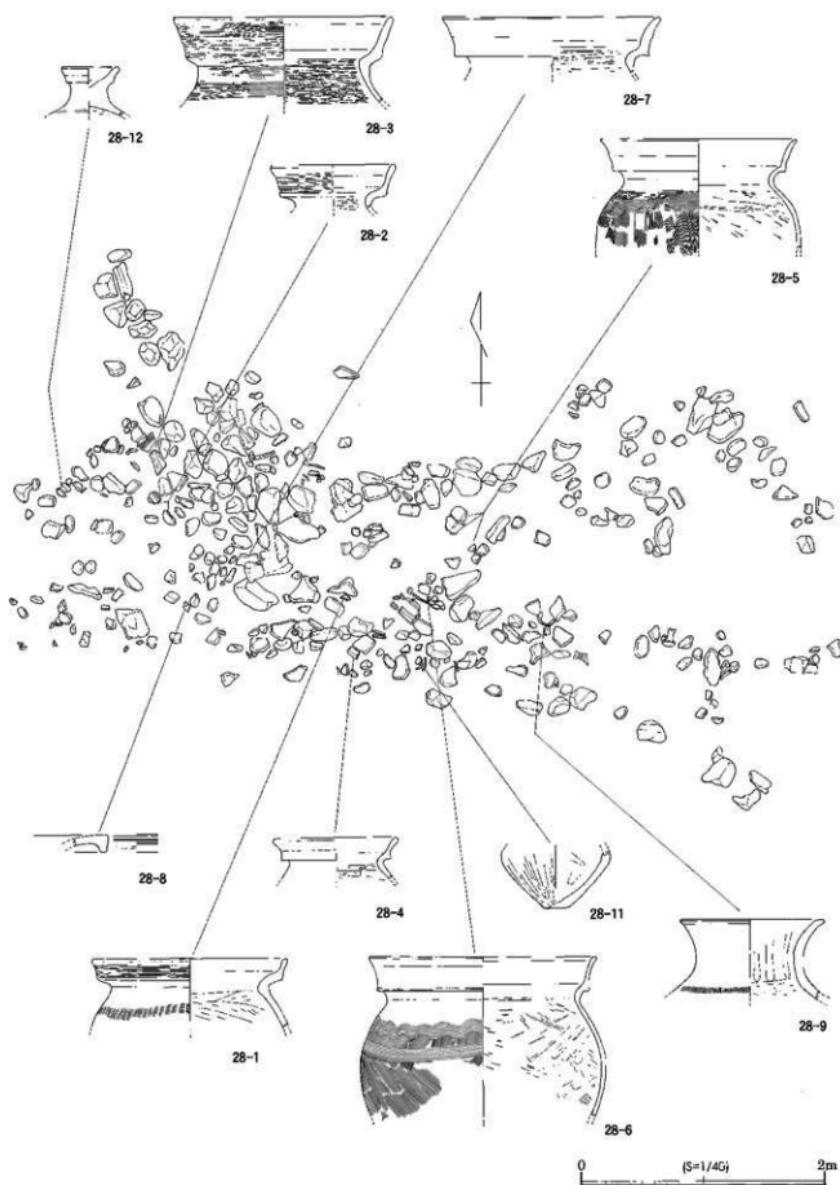
第21図 1号墓南東突出部実測図



第22図 1号墓南西突出部実測図



第23図 1号墓東辺・1号集石実測図



第24図 2号集石実測図

写真図版六 弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／一号墓



上：1号墓（左）と2号墓（右）（右上が北）

下：1号墓（右が北）

写真図版七 弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／一号墓



上：南から
下：東から

写真図版八
弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／一号墓



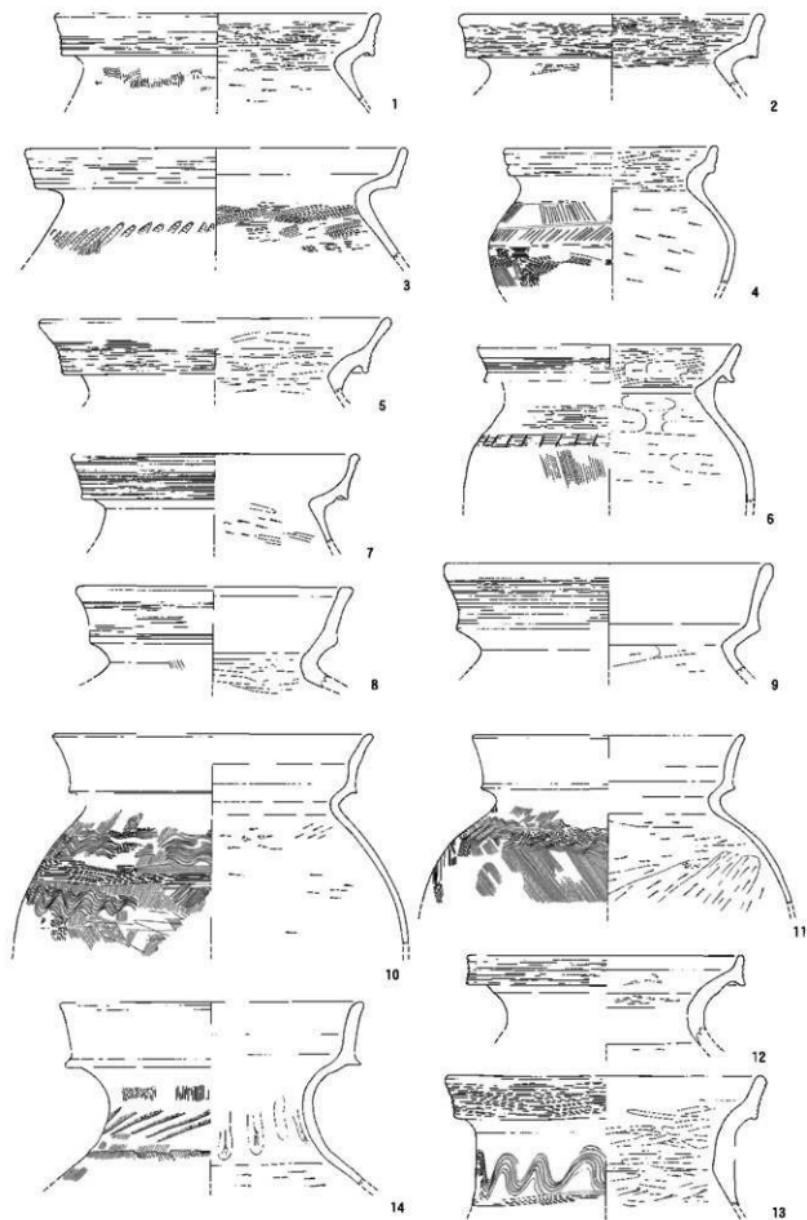
上：南東突出部
下：南西突出部

第3表 1号墓関連遺物 観察表①

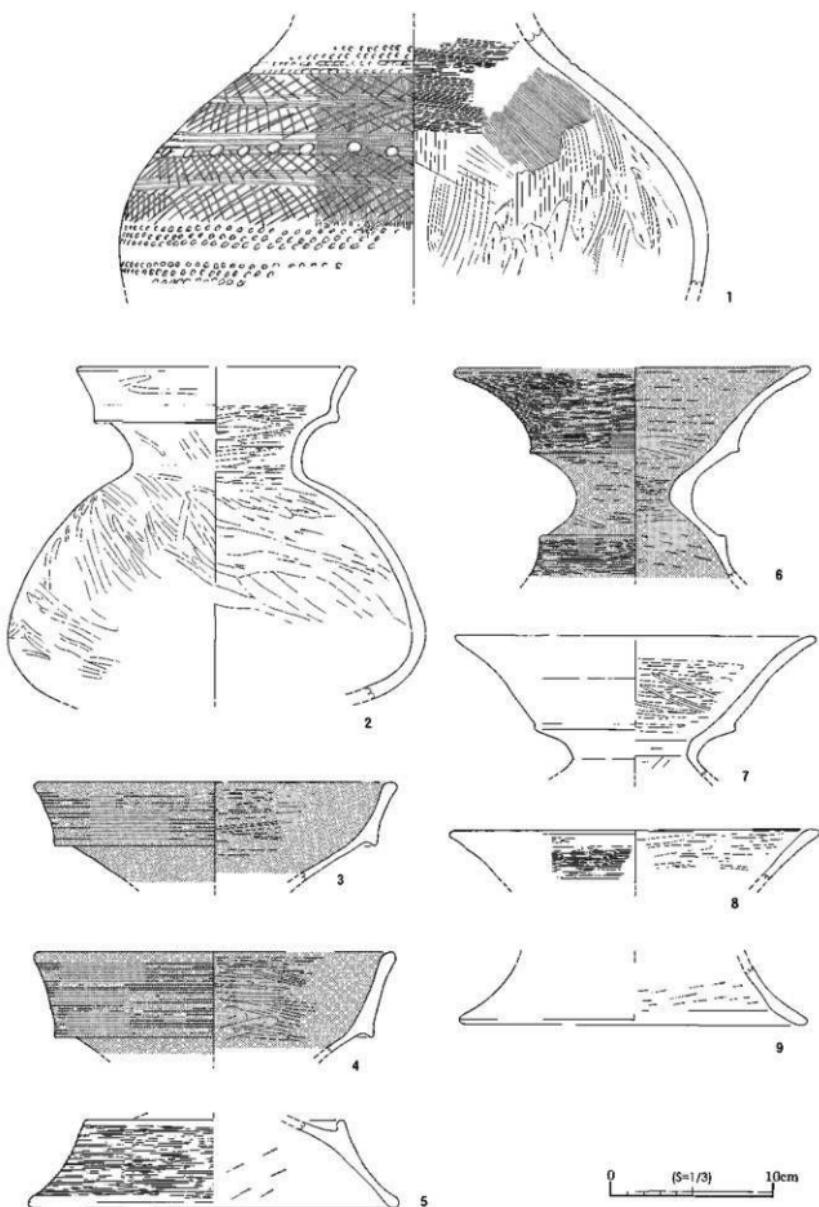
番号	種別	器種	口径	直径	基高	残存率	調査	色調	施文・備考
第25回									
1	弥生土器	甕	19.6			口縁全周の25%	内面：口縁部回転ナデ・ミガキ、肩部ケズリ/外面：口縁部	内外面：灰褐色1	口縁に回線(4条か)
2	弥生土器	甕	(18.2)			口縁全周の20%	内面：ミガキ、ケズリ後ミガキ/外面：ナデ、一部ミガキ	内外面：灰褐色3	口縁に7条の擬凹線、内外面に焼付着。
3	弥生土器	甕	(22.8)			口縁全周の20%	内面：口縁部ナデ、肩部ハケメ	内外面：灰褐色2	口縁に4条の擬凹線、肩部に斜行刻文 内外面に塗
4	弥生土器	甕	(12.8)			口縁全周の40%	内面：口縁部ミガキ、肩部ケズリ/外面：口縁部・側部上下ナデ、側部下ハケメ	内面：灰褐色1 外面：灰褐色2	口縁に3条の凹線、肩部に斜行刻文 及び斜行刻突文。
5	弥生土器	甕	(21.4)			口縁全周の10%	内面：口縁部ナデ後ミガキ、肩部ケズリ後ミガキ/外面：ナデ	内面：灰褐色2 外面：灰褐色4	後期。口縁に8条の擬凹線。外面に焼付着。
6	弥生土器	甕	16.0			口縁全周の20%	内面：口縁部ヘラケズリ後ヘラミガキ、肩部の2脚後ハラケズリ/外面：口縁部コナデ、内外面：焼付着	内面：灰褐色1	口縁部に擬凹線、側部に平行沈線・刻突文。外面の一部に黒斑。
7	弥生土器	甕	(17.6)			口縁全周の20%	内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ後ミガキ/外面：ナデ	内外面：灰白色	後期 口縁に11条の擬凹線
8	弥生土器	甕	(16.8)			口縁全周の10%	内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ後ミガキ/外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ後ナデ	内外面：灰褐色1	後期 口縁擬凹線後ナデ
9	弥生土器	甕	20.0			口縁全周の20%	内面：口縁部コナデ、調部ヘラケズリ/外面：ヨコナデ	内外面：灰褐色1	口縁部に多条の擬凹線
10	上部器	甕	19.4			口縁全周の40%	内面：口縁部ナデ、肩部ケズリ後ナデ/外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ	内外面：灰褐色1	肩部に波状文及び10条の直線文 外面に焼付着 早田5併行
11	土器器	甕	(16.4)			口縁全周の25%	内面：口縁部ナデ、肩部ケズリ/外面：口縁部ナデ、基部ハケメ	内外面：灰褐色2 外表面：桃褐色1	肩部に波状文 泉田5併行
12	弥生土器	甕	(16.5)			口縁全周の25%	内面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ケズリ/外面：ナデ	内面：灰褐色3 外表面：灰褐色2	後期 重み有り
13	弥生土器	甕	(19.0)			口縁全周の25%	内面：口縁部ナデ・ナデ後ミガキ、肩部ケズリ後ミガキ/外面：ナデ	内面：灰褐色2 外表面：桃褐色2	口縁に9条の回線。底部に波状文・少なくとも3条以上の平行沈線。
14	上部器	甕	18.3			口縁全周の80%	内面：口縁部ナデ・肩部ナデ・シボリ、肩部ケズリ/外面：口縁部ナデ・肩部ハケメ後ナデ	内面：焼褐色2 外表面：桃褐色1	頂部に擦状工具による斜行刻文。
第26回									
1	弥生土器	甕				肩部全周の25%	内面：ハケメ、肩部ハケメ後ケズリ/外面：ハケメ、ナデ	内面：焼褐色1 外表面：灰褐色1	中期、肩部に直点文、波状条文から2、3、5、5、3、間に刻突文、刻植字文、円形浮文。下部に3点ずつの直点文、波状条文は複数有り。
2	弥生土器	甕	16.9			口縁全周の60%	内面：口縁部ナデ、面部ミガキ、面部半ケズリ、肩部下ナデ/外面：口縁部ミガキ、面部ナデ	内面：灰褐色1 外表面：灰褐色4	中期。底部外面に焼付着。
3	弥生土器	器台	22.2			受部全周の20%	内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ/外面：ヨコナデ	内外面：灰褐色1	口縁部に擬凹線 赤彩
4	弥生土器	器台	22.0			受部全周の10%	内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ/外面：ヨコナデ	内面：灰白色 外表面：灰褐色1	口縁部に多条の擬凹線 赤彩
5	弥生土器	放形器台	(21.8)			肩台部全周の1%	内面：ケズリ後ナデ/外面：ナデ	内外面：灰褐色1	21条の擬凹線。
6	弥生土器	器台	(20.8)			全体の40%	内面：受部ミガキ、脚台部ケズリ/外面：受部・脚台部ナデ、脚部ミガキ	内面：灰褐色2 外表面：灰褐色1	赤彩。器受部には30条以上、脚台部には11条以上の擬凹線。
7	弥生土器	器台	22.0			受部30%	内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ、ヘラケズリ、ヨコナデ/外面：ヨコナデ	内面灰褐色1 外表面：桃褐色1	
8	弥生土器	器台	(22.6)			口縁全周の10%	内外面：ミガキ	内外面：燒褐色1	18条以上の擬凹線。
9	弥生土器	器台	(20.8)			底部全周の30%	内面：ケズリ、ナデ/外面：ナデ	内面：灰褐色3 外表面：灰褐色1	

第4表 1号墓関連遺物 観察表②

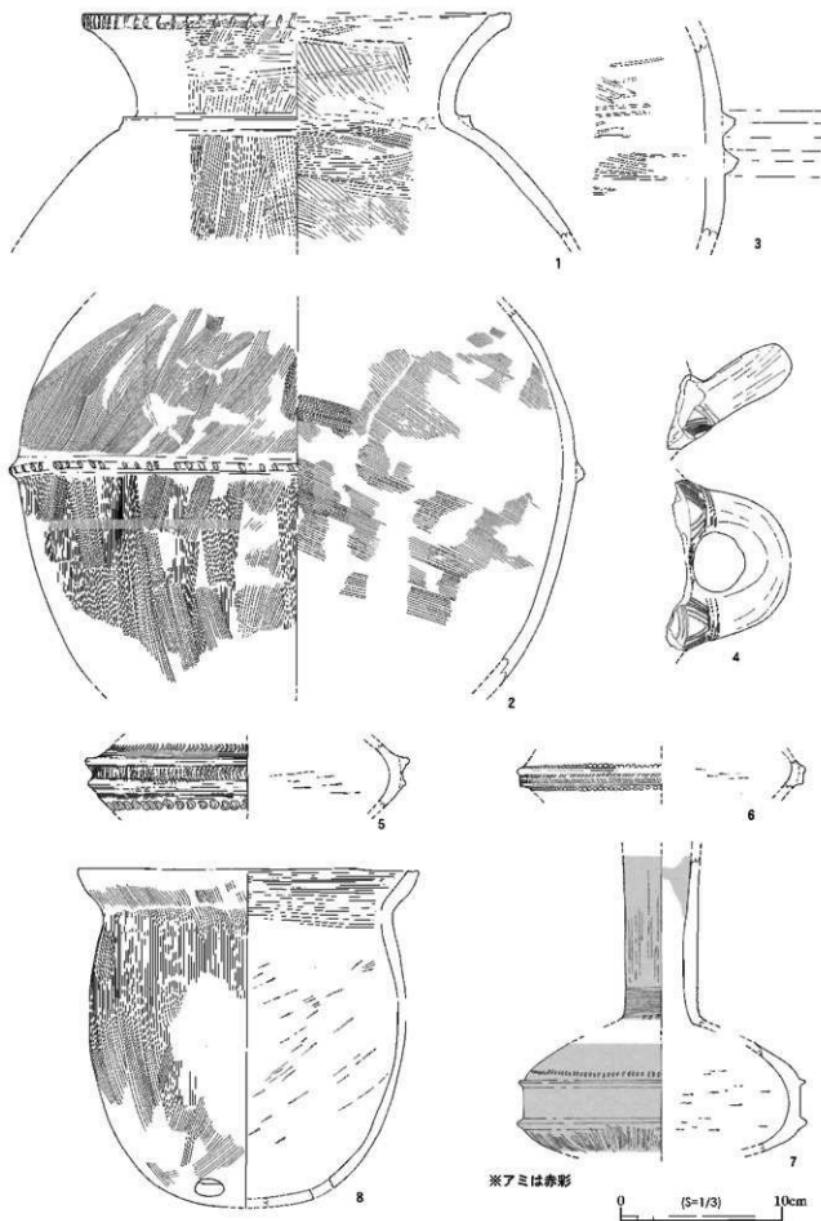
番号	種別	器種	口径	直徑	基高	残存率	調査	色調	説文・備考
第27回									
1	弥生土器	壺	26.2			口縁～ 颈部 9.0 %	内面：口縁部ハケメ後ナデ、口縁 上部テハケ後ヨコハケ後ナデ、 頭部相撲压痕、頭部ハケメ/外側： ハケメ	内面：暗褐色1 外側：灰褐色1	口縁に刻目文、頭部に穴穿。 九州系
2	弥生土器	壺		1	体部全周 の25%		体部全周 内外面：ハケメ		内面：暗褐色1
3	弥生土器	壺			小片		内面：粗いミガキ後ナデ/外側：粗 いミガキ後ナデ、ナデ	内面：暗褐色1	2条の穴穿 外側に崩歯 九州系
4	弥生土器	把手			把手 のみ		内面：ケズリ/外側：ナデ	内面：灰褐色3 外側：暗褐色1	沈線、貝設腹縫による側突変 外側の一部に側突者
5	弥生土器	特殊壺		(20.0)	体部 全 周の 20 %		内面：ケズリ後ナデ/外側：ナデ	内面：暗褐色1	工具による刻目文、5条の沈 線、穴穿、工具による刻目文、 突唇、5条の沈線、C字状文 の輪に文様が施される。
6	弥生土器	特殊壺		(17.7)	体部 全 周の 10 %		内面：ケズリ後ナデ/外側：ナデ	内面：暗褐色1 外側：灰褐色1	赤彩。竹管文、1条ずつの沈 線の間に羽状文、竹管文の頭 に文様が施される。穴穿あり。
7	弥生土器	特殊壺			頭部と体 部、全周 の20%		頭部内面：ケズリ、シボリ、ミガ キ/頭部外側：ミガキ/体部内面： ケズリ/体部外側：ナデ、ミガキ	内面：灰褐色3	外赤赤彩、頭部下部に8条の沈 線、体部突堤2条、列点文
8	土師器	瓶			口縁 全 周の 5.0 %		内面：口縁部凹転ナデ・ハケメ、 頭部ケズリ/外側：圓筒ナデ、ハケ メ	内面：暗褐色1	底部に少なくとも4ヶ所の穿孔、 外側の一部に黒斑。
第28回（2号墓出土遺物）									
1	弥生土器	壺	(24.0)		口縁～頭 部全周の 25%		内面：L1縁部ナデ、肩部ケズリ/外 面：ナデ	内面：灰褐色1	L1縁に8条の横凹線、肩部に捲 枝工具による刻突文（押引）。
2	弥生土器	壺	(15.0)		口縁全周 の25%		内面：口縁部ナデ、頭部ミガキ/外 面：ナデ	内面：暗褐色1	L1縁に10条の横凹線。
3	弥生土器	壺	(26.7)		口縁全周 の25%		内面：L1縁部ナデ、肩部ケズリ後ミガ キ/外面：L1縁部ナデ、口縁部下一部 ～肩部ミガキ、一部ハケメ後ミガキ	内面：灰褐色2	L1縁に15条の横凹線、肩部に1 条の平行沈線。外側 部突堤。 Y202と同一。
4	弥生土器	甕	(14.8)		口縁全周 の25%		内面：口縁部ナデ、頭部ミガキ、 肩部ケズリ/外側：ナデ	内面：暗褐色1 外側：灰褐色3	外側に煤付者。
5	弥生土器	壺	(24.0)		口縁～足 部全周の 25%		内面：口縁部ナデ、肩部ケズリ/外 面：ナデ、ハケメ	内面：灰褐色1	肩部に11条の波状文一回から 連続して平行沈線一層。外側 に煤付者。
6	弥生土器	壺	(27.8)		口縁～肩 部全周の 30%		内面：口縁部ナデ、頭部ケズリ一 部ミガキ/外側：L1縁部ナデ、肩部 ハケメ	内面：暗褐色1	肩部に11条の波状文、10条の 平行沈線。外側に黒斑。
7	弥生土器	壺	(26.8)		口縁全周 の25%		内面：口縁部ナデ、頭部ミガキ、 肩部ケズリ/外側：ナデ	内面：灰褐色1 外側：灰白色	口縁部外側に黒斑。
8	弥生土器	広口壺			小片		内面：ナデ	外側：灰褐色3	口縁に3条の凹線
9	弥生土器	壺	18.0		口縁 全 周の 8.0 %		内面：口縁部ナデ・酒ナデ、肩部 ケズリ/外側：L1縁部ナデ、肩部ハ ケメ	内面：灰褐色3 外側：灰褐色2	
10	弥生土器	特殊壺		(19.0)	体部最大 径全周の 25%		内面：肩部上半ナデ、肩部下半ケ ズリ後ナデ/外側：ナデ	内面：灰褐色1 外側：暗褐色1	後期。沈線を抉んで、CD型変 換接続文・C字状文・ヘラによ る刻突文を施す。穴穿あり。
11	弥生土器	小壺		3.1	全体の 30%		内面：ナデ/外側：ミガキ、底ナデ	内面：暗褐色1	
12	弥生土器	蓋	(6.7)		頂部全周 の80%		内面：ケズリ/外側：ハケメ、ナデ	内面：灰褐色2 外側：暗褐色1	合付蓋の可能性あり



第25図 1号墓関連遺物実測図①



第26図 1号墓関連遺物実測図②

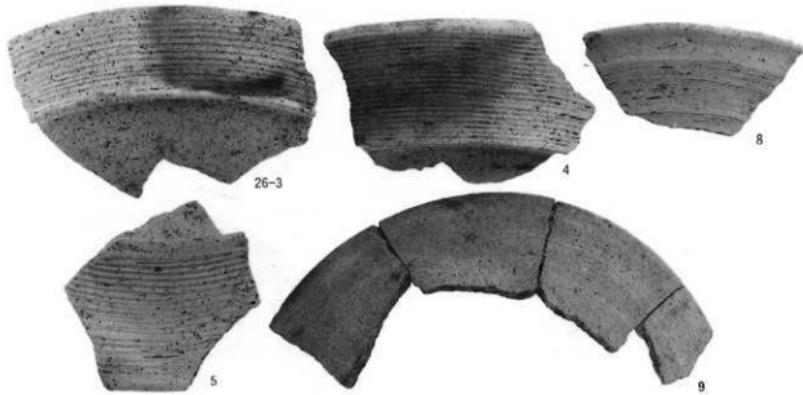
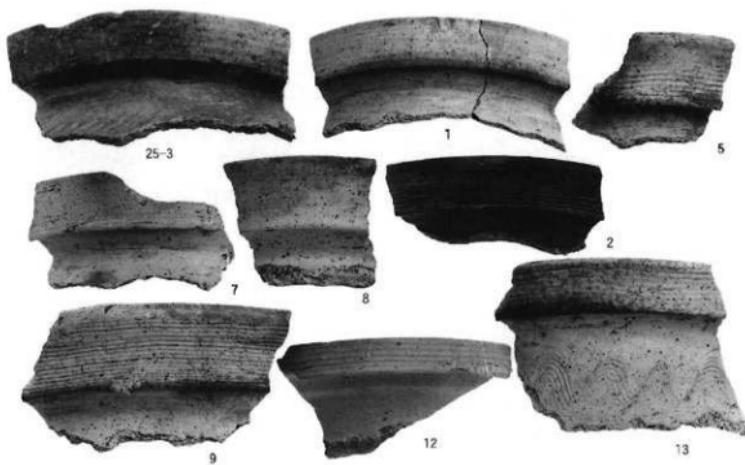


第27図 1号墓関連遺物実測図③

写真図版九
一号墓関連遺物



写真図版一〇 一号墓関連遺物



写真図版一一
一号墓関連遺物



27-1



5



2



6



3



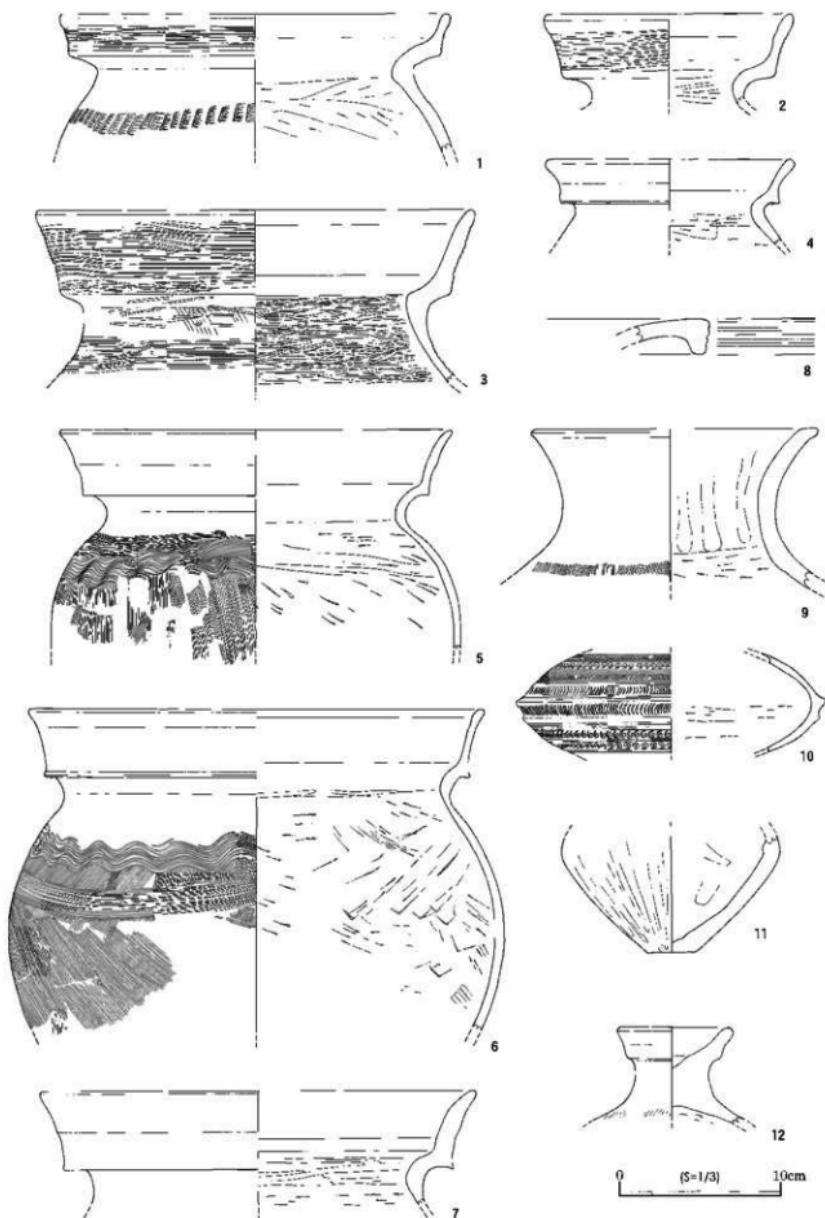
7



4

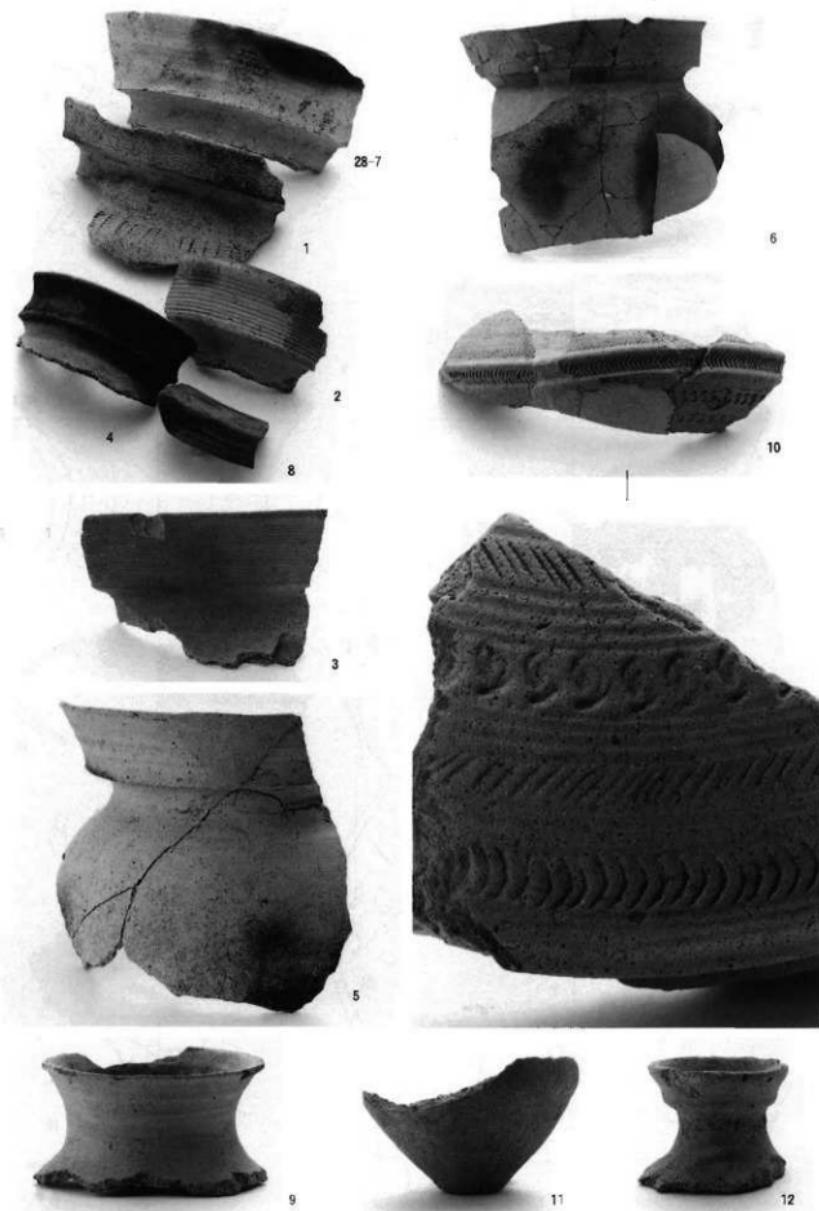


8



第28図 2号集石出土遺物実測図

写真図版一二 二号集石出土遺物



2. 2号墓

位置と規模

全体図を第29図に、部分図を第30・31図に示した。

I区の中央で標高約3.8mの位置に築造された四隅突出型埴丘墓である。埴丘上面は古墳時代の集石遺構や奈良～平安時代の埋物跡であるSB16によって削平を受けており、貼石の隙間に須恵器等が入り込んでいた。

埴丘は西辺側が流失しているが、埴丘の形態は南北にやや長い長方形を呈している。主軸方向はN-6°-Wをとる。突出部を除く規模は南北約9m、東西約7mで、突出部を含めると南北約10m、東西約8mを測り、突出部は埴丘に比べて小さめで、北西突出部を除く3箇所を検出した。遺存する埴丘の高さは最大で45cmを測る。

1号墓同様に第12層包含層を基盤面にして築造されており、周溝も認められなかった。前述したように、後世の擾乱を受けていたため埋葬施設は消滅しており確認できなかった。

貼石の状況

埴丘斜面は25°前後の傾斜をもち、西側を除く3辺に貼石が遺存していた。南辺は10～20cm程度のやや小さめの石を6段以上貼り付け、基部には長さ40cm前後の石を横方向に並べて立石状にしているのがうかがえる。東辺と北辺は20～40cmの大きめの石を多く使用して埴丘斜面に3段ないし4段程度貼り付けている。北辺はSB16の柱等により、一部の石が抜き取られている。東辺は一番遺存状況が良く、埴裾には長さ50cm人の石を横方向に並べて、敷石と立石を配置している。この立石に隣接するように2個体分が据え置かれた状態で出土している。

突出部の状況

南西突出部は西側半分を欠くが長さ約1m、幅約60cmを測る。40～60cm人の扁平な石が3個稜線上に残存しているのが認められたが、突出部を構成する位置にあるものの全体的にみて若干ずれているようにも見え、原位置を保っているものか否かは判然としない。また、これが「踏石状石列」を構成していたものかも判断できなかった。

南東突出部は長さ約1.7m、幅約1.6mを測り、20～50cm大の石を使用している。遺存状況が悪いため全面に石を施していたかは把握できなかった。

北東突出部は長さ約2m、幅約2.2mを測り、30～50cm大の石が埴裾をめぐるように配置されている。稜線上には流出してしまった可能性はあるが石列等は認められなかった。

3号集石の状況

また、南西突出部に隣接するように円形状の集石が認められた。この集石は径2.2×2.1mの規模を測り、中央には石が無く、外周のみに施されていたと考えられる。使用されている石は2号墓南辺側のものと同規模のものであり、貼石が転落して円形状に形成された可能性も否定できないが、この集石は中野美保遺跡等で検出された「円形状石組」と同様のもの可能性も考えられ、今後検討を要するものである。時期については共伴する遺物が皆無であり明確には判断できないが、この円形状石組を設置したことにより、南西突出部が半分欠けたものと推測すれば、2号墓より後出のものと考えられる。

2号墓出土土器

第32図に実測図を示した。東辺側から壺甌類が2個体据え置かれた状態で出土している。2個とも口縁部が外反してのびるもので、複合口縁の稜がやや下方に突出している。底部は平底で穿孔を施している。1は口径22cm、器高39cmを測り、2は口径17.8cm、器高32.9cmを測る。

これらの土器の時期については古墳時代初期頃の様相を呈しているが、これらの土器の年代が築造時期を示しているのか不明である。埴丘の貼石等はやや古い様相を呈しているものと考えられ、築造時期は若干古く、出土土器の時期は下限を示しているものと考えたい。

2号墓の時期

2号墓は1号墓と同様に、基本層序12層を基盤として構築されている。この12層は弥生中期中葉の遺物を含むことから、2号墓の年代上限がここに求められる。中期後葉の1号墓が築造されて以降、かなりの堆積が進んだ後に作られていることからみても、2号墓の造構時期が中期にさかのぼることは考えにくい。一方、埴輪束側から出土した2点の上器は古墳時代初期の様相を示している。この上器は出土状況や遺存状態からみて原位置を保つと判断され、2号墓の築造後に置かれたと考えられる。上記の事実に基づくならば、2号墓の時期は弥生時代後期、と幅をもたせて評価するよりない。実証性はないが、1号墓と2号墓は構築面が等しく位置関係も考慮されていることからみて、時期的に近接している可能性が高い。1号墓は周辺の土器や突出部の形態、配石構造からみて後期後葉と判断されており、2号墓もそれと近い時期であろうことが推定される。配石構造や突出部の形態は2号墓が占い特徴を持っており、1号墓に先行する可能性もある。

第5表 2号墓関連遺物 観察表

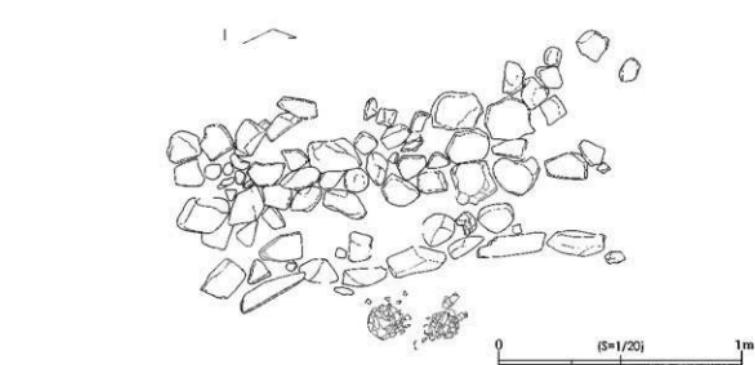
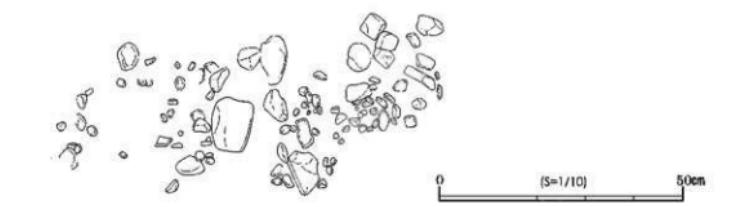
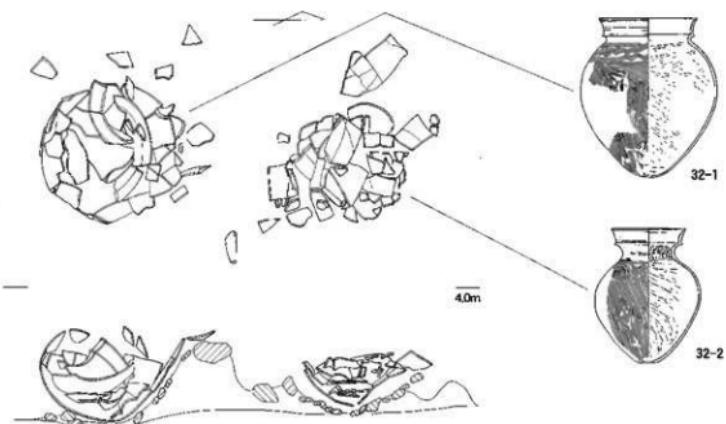
番 号	種 别	器種	口径	底径	高さ	残存率	調 整	色 調	施文・備考
第32図									
1	弥生土器	甕	(22.0)	4.8		全体の 50%	内面：口縁部ナデ、体部ケズリ/外 面：口縁部ナデ、体部ハケメ	内面：純褐色2 外面：橙褐色1	胴部上半に13条以上の沈縮文、 波状文、8条の平行線が連續し て施される
2	弥生土器	甕	17.8	5.0	32.9	全体の 70%	内面：口縁部ヨコナデ、脚部唇頭 付焼、肩部～底部ハラケズリ/外底： 口縁部ヨコナデ、脚部～底部ハケ メ	内外面：灰褐色 1	胴部上半に平行沈縮及び波状文 底部穿孔 底部外面崩壊



第29図 2号墓実測図



第30図 2号墓東辺・南辺実測図



第31図 2号墓土器出土状況図

写真図版一三 弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／二号墓



上：右が北
下：南から

写真図版一四 弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／二号墓



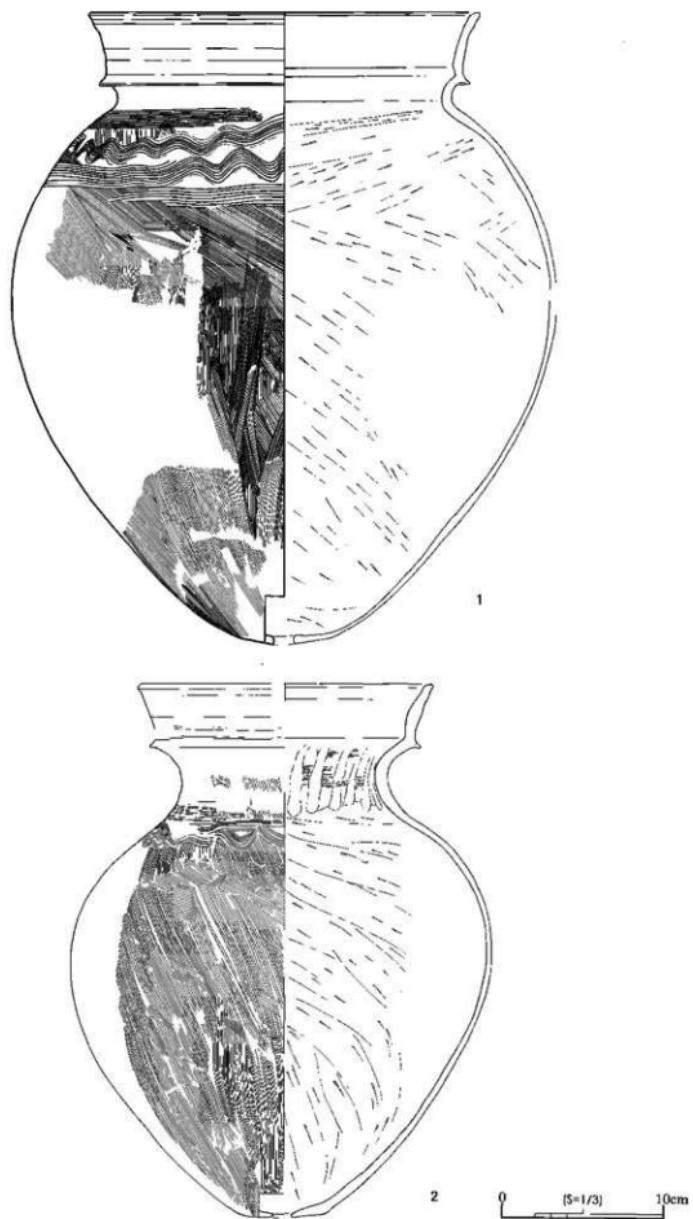
上：東辺（北から）

下：南東突出部（南東から）

写真図版一五
弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／二号墓



土器出土状況



第32図 2号墓出土遺物実測図

写真図版一六 二号墓出土遺物



32-1



32-2



3. 3号墓

位置と残存状況

第33図～第36図に実測図を示した。

3号墓はIV区の北東隅に位置する四隅突出型埴丘墓で、青木遺跡の調査区内では最も北東寄りに位置する。IV区で確認された四隅突出型埴丘墓はこの3号墓のみであり、I区の1号墓とは約100mの距離を隔てている。埴丘裾の標高は4.2mで、1号墓の墳裾より0.4mほど高い。なお、南側で接する貼石墓7～9号墓は3号墓よりも古いもので同時に併存しない。その根柢は、7～9号墓と3号墓の構築面の層位関係による。7～9号墓が構築されている面から厚さ25cmほど堆積が進み、貼石墓の埋没が進んだ面の上に3号墓が構築されている。また、北側に近接する9号人骨と10号人骨は3号墓より新しく、これも3号墓と併存しない。

3号墓の埴丘は5世紀以降の削平により大きく破壊され、遺存状態は極めて悪かった。本来4カ所ある突出部のうち残存するのは北東突出部1カ所のみで、これと連続する東側の墳裾一辺のみが残存していた。かろうじて平面形を確認できる状態であり、南東突出部から南西突出部にかけては完全に失われている。なお、平面図で南東突出部に見えるものは後述する貼石墓（7号墓）であり、3号墓とは明らかに時間差がある別の遺構である。北辺から北西突出部にかけては調査可能な範囲を越えていたため確認していないが、状況から推定するかぎり削平を受けて消失している可能性が高い。また埴丘の上部はほとんど削り去られており、東辺でも埴丘斜面の貼石は最下段だけがかろうじて残っている状態であった。埋葬施設や埴丘裾ラインの痕跡がわずかでも残っている可能性を想定して探したが検出できず、これらは完全に削平されてしまったものと判断された。

3号墓は調査区の北東隅に位置しており、調査の初期段階に調査区外周に設けた排水溝によって突出部の一部が分断される結果になった。面的に掘り下げて検出作業をおこなった後にそのことが判明したため、当初設定した調査区より北東と北西側にそれぞれ調査区を拡張し、突出部の全体と北辺の残存を確認することとした。排水溝を設置した際に礫が集中する部分が確認されており、本来はこの排水溝部分にも突出部の貼石が残存していたものとみられる。

3号墓は被覆土を除去して貼石・列石の記録をおこなった段階で調査を終了した。石材の抜き取り等はおこなわざ、残存していた状態のまま保護層で埋め戻している。

規模

本来の埴丘規模については復元する根柢を欠くが、突出部の規模や列石の処理から推定すると、突出部を含めて17m程度、方形部のみの場合13m程度の規模であったとみられる。ただしこの数値は極めて根柢の弱いもので、残存長からは南北11.2m以上、突出部を除いた埴丘方形部が南北9.1m以上、とするほかは言及できない。

埴丘の主軸方位は座標化に対してN-3°-Eであり、わずかに東にふれる。1号墓はN-6°-Eであり、ほぼ同じ主軸を意識した配置であると考えてよいだろう。

貼石・列石の状況

第35図に埴丘裾部の状態を示した。埴丘斜面の貼石はほぼ完全に削り取られており、最下段が部分的に残っている状況である。この裾部の貼石に接して立石列が配置される。外面をほぼ垂直に立て、平坦な面を外側に向ける。石材の長軸は水平方向に、すなわち横長に石を置く。長軸長が18～20cmの亜角礫が用いられている。図では埴丘斜面とは独立した立石列と判断して示したが、別の解釈として埴丘斜面最下段の貼石である可能性も残る。その場合、図中で貼石とした石材は最下段ではなく2段目のものが転落・移動したとみることになる。この点について断定することは難しいが、写真図版からも見て取れるように、一部の石は埴丘斜面の傾斜をきちんと保ったままとみられる。よって転落や移動したものではなく、貼石最下段とみるのが適当と判断した。つまり、斜面裾に接して独立した立石列が1列配置されていることになる。

この立石の外側に幅5cmの敷石列が置かれている。基本的に3個の石を並列させた幅広のもので、3列の目地がよ

く通る。石材の長軸方向を南北にとるものが多いが、全体的には不規則である。部分的に敷石がなく空白になっている箇所があり、これらについては検出時にすでに失われていた。石材は長軸長15~30cmの垂角砾で、立石の外面が平滑であると比較すると凹凸や曲面が顯著でやや粗い印象を受ける。この敷石と前述の立石は同一平面上に置かれているものとみられた。

この敷石列の外側に、外縁となる立石列が置かれる。石材の長軸を垂直方向にすなわち縦長に石を用いて、外而是整った平滑面をほぼ垂直に立てる。石材は他の部位と同様の垂角砾で、長軸長15~30cm。この立石が置かれる面は墳丘側の敷石列などより一段低い。基部が掘り込んで埋め込まれているとみられるが、その状況は検出できなかった。この立石列の上端が、内側の敷石列の上面にはほぼそろうような位置関係にある。残存する南端の部分はいったん立石が途切れたのち、80cmの間隔をおいて3つの石が並ぶ。この3つの石までが原位置を保つ列石とみられる。

突出部の状況

第36図に突出部の実測図を示した。墳丘東辺と比べて残存状態が悪く、列石の配置などは不明確な部分が多い。前述した墳丘斜面裾に置かれる立石列が、突出部へつながるくびれ部でも確認できることから、基本的に墳丘方形部の裾部と同様の配置であったことが想定できる。つまり、突出部の斜面部分に貼石され、その裾部を立石が1列縦取りする。なお前述のように、これは立石でなく斜面の最下段である可能性がある。その外側に複数の石を並列させた敷石列が置かれる。さらにその外側、最外周にあたる部分には立石列があった可能性があるが、現状で原位置をとどめるものは全く残っておらず判断できない。原位置をとどめている可能性がある石については、図中にアミ掛けをして表示している。

突出部先端近くに、上面が平坦な大きめの石が3点あった。図中でアミ掛けしたものにあたる。差し渡し50cmに及ぶものがあり、貼石や列石に用いられた石材と比較して明らかに大きい。これらは突出部中軸線上に並べられたいわゆるステッピングストーン（踏石状石列）にあたる可能性が高い。3点のうち北側の2点は、上面のレベルや傾き、位置関係からみて原位置を保つものと判断された。想定される突出部先端の位置に接することから、このステッピングストーンは墳丘外とつながる「開いた」踏石列であった可能性が高い。なお南側の1点は位置関係がおかしく上面が削いでいることからみて、改変時に動かされたものとみられる。

突出部の平面形は、先端へかけて広がるいわゆる「しゃもじ形」の形態でなく、基部からほぼ同じ幅で延びていく。幅は2.8m、くびれ部から先端までを計測した長さは4mとなる。

遺物の出土状況と時期

3号墓に関連する遺物の出土地点を第34図に、遺物実測図を第37図、第38図に掲載した。これらの遺物は出土した層位関係から、大きく4つにわけてとらえられる。ひとつは①墳丘基盤層（もしくは盛土）中から出土したもの。これは3号墓の墳丘構築面より下位から出土し、造墓以前に堆積した基盤層に含まれていることから、3号墓の年代上限を示すと評価できる。第37図に掲載したものは全てこの①にあたる。なお、一部に墳丘盛土中に含まれていた可能性をもつもの（1~3）もあるが、評価は同様である。遺物の時期は弥生中期後葉からあるが、最も新相を示すのが8の甕である。これは突出部の北1mの地点から出土した。層位的には墳丘構築面の直下にあたり、造墓直前に埋没した可能性がある。口縁部形状・頸凹線や肩部羽状文などの特徴からの場式に位置づけられ、後期後葉と考えられる。したがって、3号墓の時期は的場式以降、と言える。

次に、②墳丘構築面の直上に接して出土したもの。これは第38図の1~3が該当する。3号墓の造墓からそれほど時間経過を経ない時点にもたらされたとみられ、造墓や埋葬時に伴う可能性もある。1は3号墓からやや離れて7号墓の北裾から出土しているが、土層の観察から3号墓の構築面と同一の遺構面上に乗っていることが確認された。的場式に位置づけられる。構築面に直接乗っていた鼓形器台の3も、これと同時期であろう。2は3号墓突出部の北側至近から口縁を下にして出土したもの。的場式と伴う場合もあるが、単独では型式的に新相を示し、弥生後期終末（草田編年5期）と評価される。

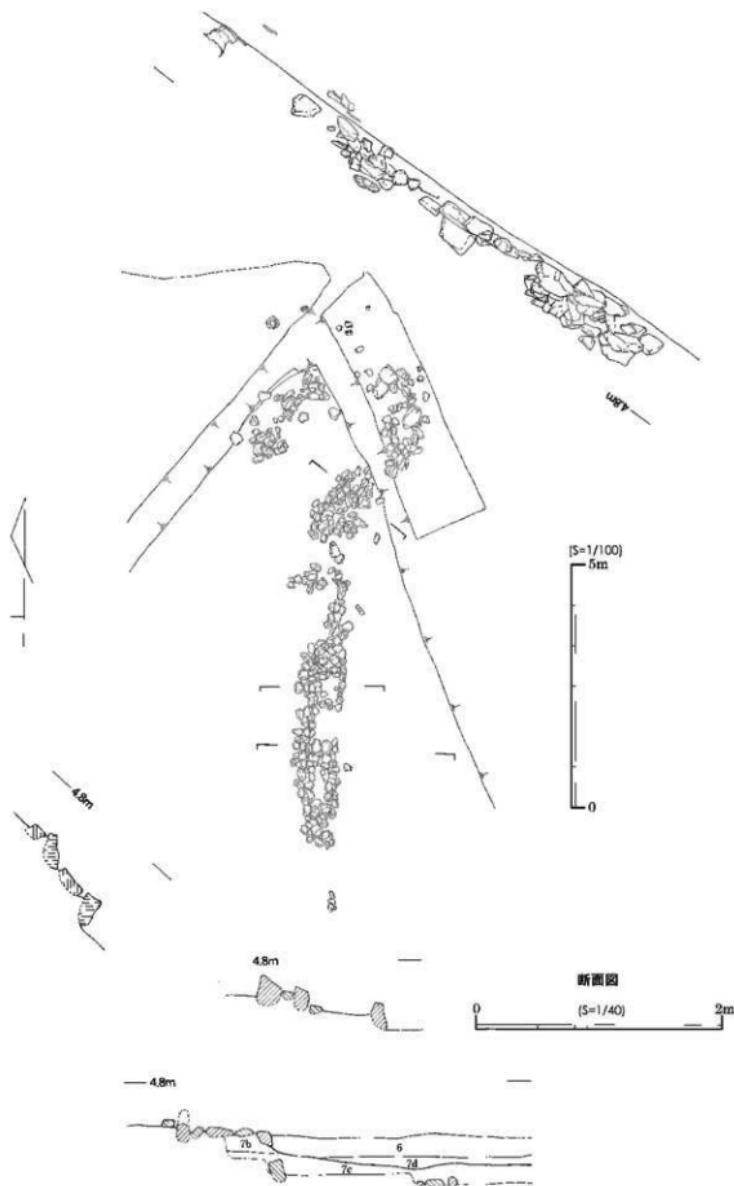
次に、③埴丘面の被覆土中に含まれていたもの。第38図の4～10がこれにあたる。埴丘構築面からやや浮き上った状態で出土しており、造墓遺構に一定時間が経過する過程で、漸移堆積していく土中に包含されたものといえる。弥生後期中葉から、古墳中期までの時期幅をもつものが含まれる。

最後が④破壊面上から出土したもの。第38図の11～13が該当する。埴丘全体は、構築面からわずかに30cm上方で削平されており、この削平面の直上付近から出土したものである。これらは埴丘の破壊がおこなわれた時期を示す遺物と評価できる。10は8世紀の須恵器坏、11・12は古墳中期の高坏である。

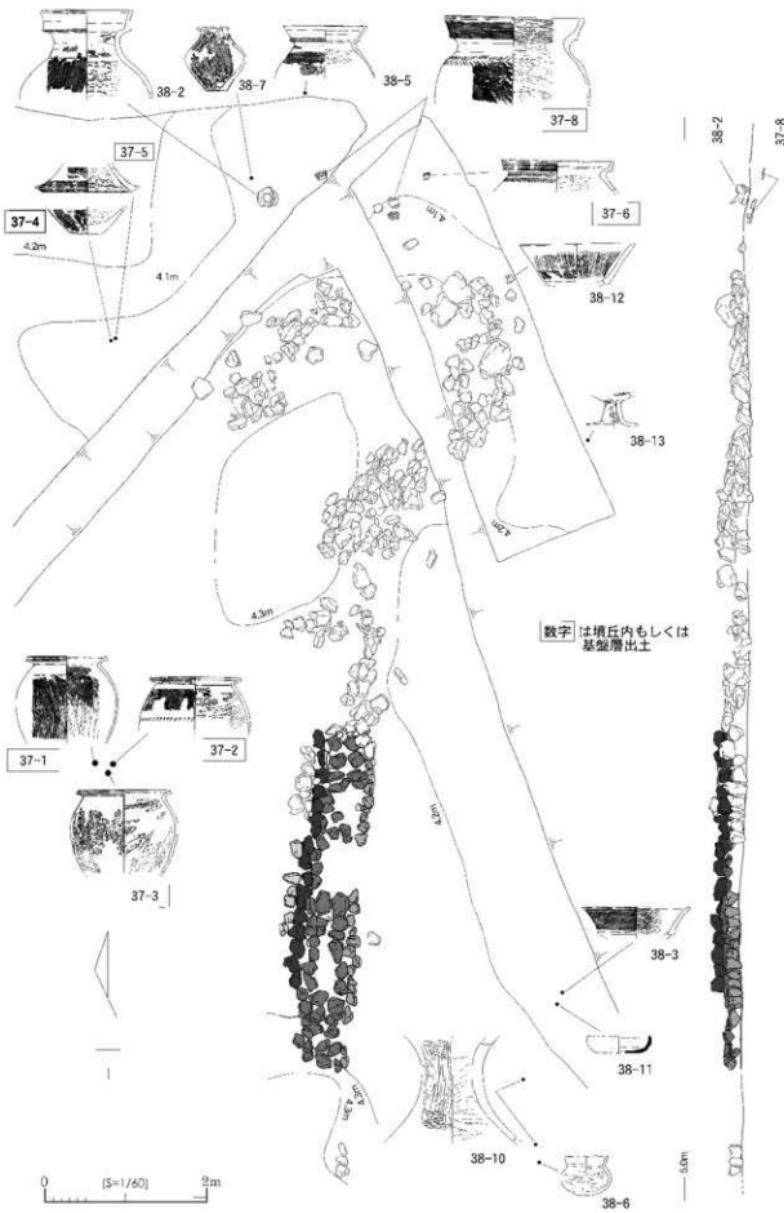
3号墓の時期

以上の関連する遺物から、3号墓の築造時期は弥生時代後期後葉（的場式期）～後期終末（草田5式期）と考えられる。埴丘面直上に乗っていた3点の土器のうち、38-2か的場式と併行するものであれば、さらに時期は限定して後期後葉とことができよう。

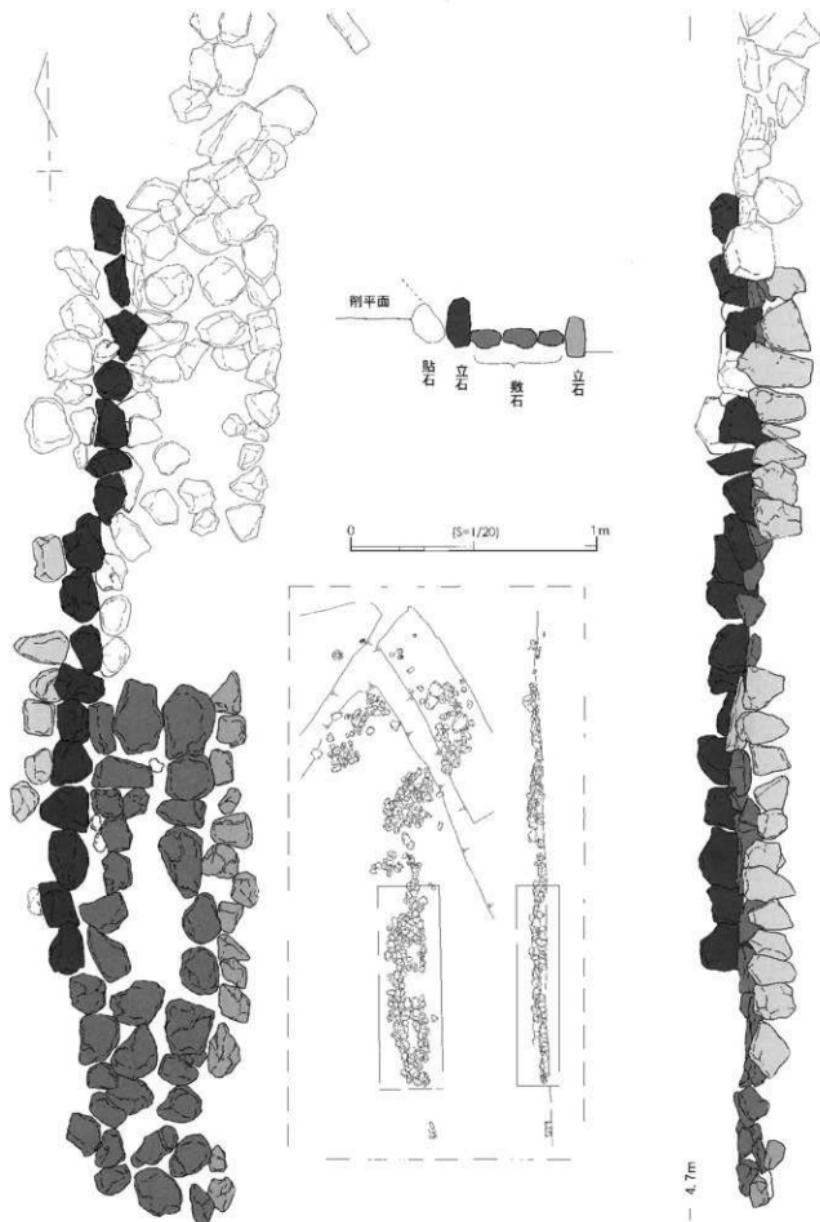
埴丘北側には古墳時代のものと推定される10号人骨、11号人骨が埋葬されている。位置関係からみて3号墓を意識したとみられ、埴丘は一定期間形をとどめていたであろう。しかし埴丘上部は古墳時代中期にはすでに大きく破壊を受けて削り去られていた。その後奈良時代には埴丘内にあたる部分に井戸が設けられており、まったく形をとどめないまでにしばしば改変を受けていたと考えられる。



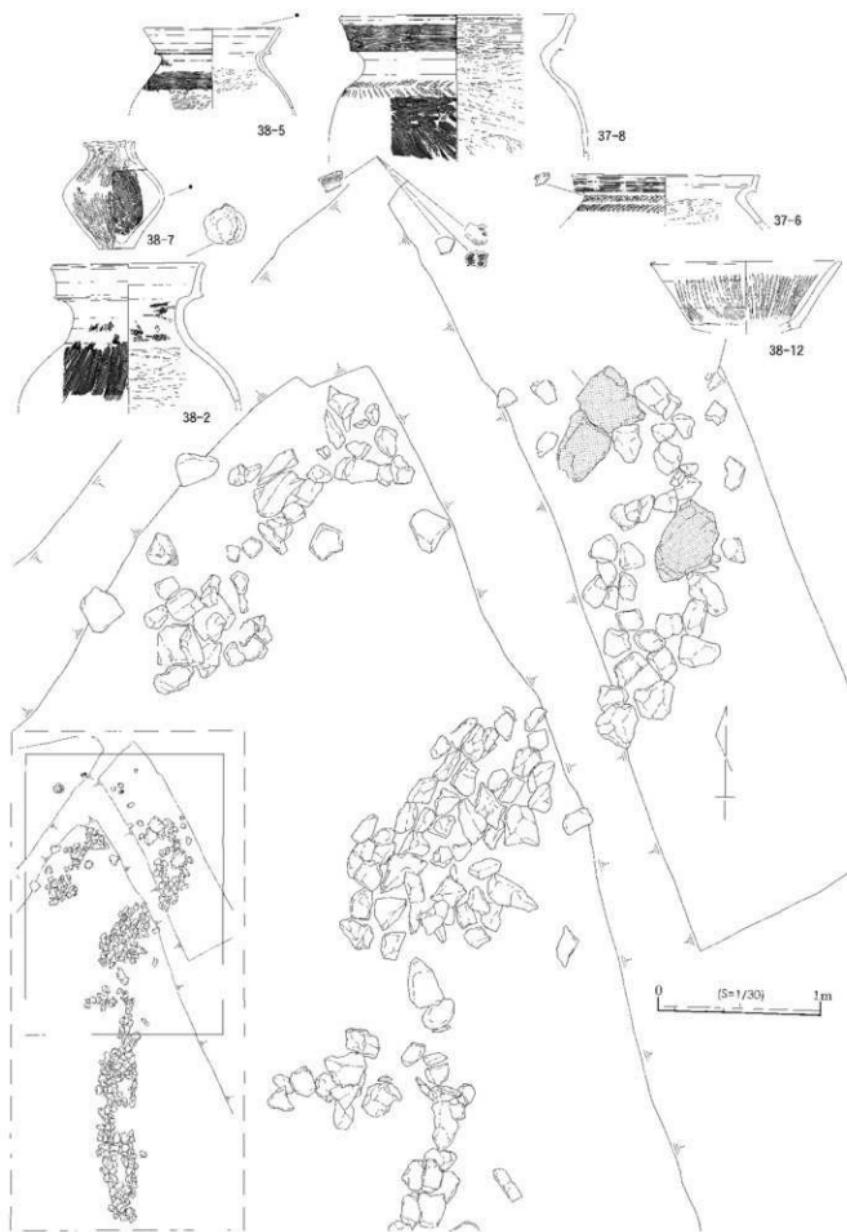
第33図 3号墓実測図①



第34図 3号墓実測図②



第35図 3号墓東辺列石実測図



第36図 3号墓北東突出部実測図

写真図版一七 弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／三号墓



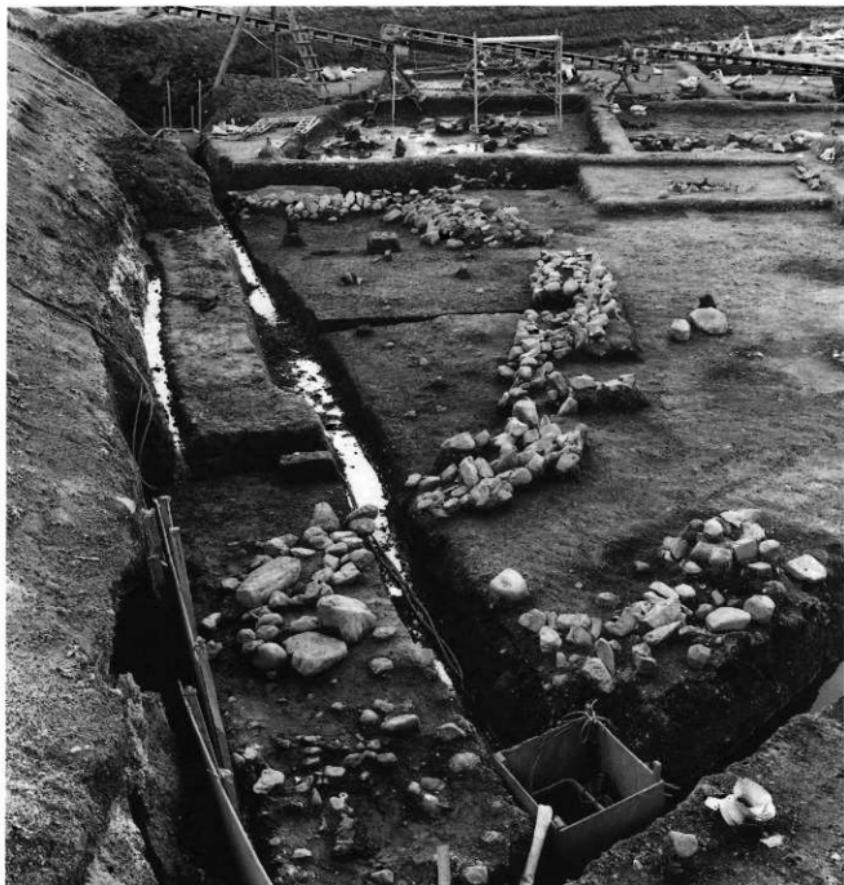
3号墓と7・8・9号墓（上が北）

写真図版一八 弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／三号墓



3号墓（北東から）

写真図版一九
弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／三号墓



土器（第38図-2）出土状況

写真図版一〇 弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／三号墓



竪部の貼石（北から）

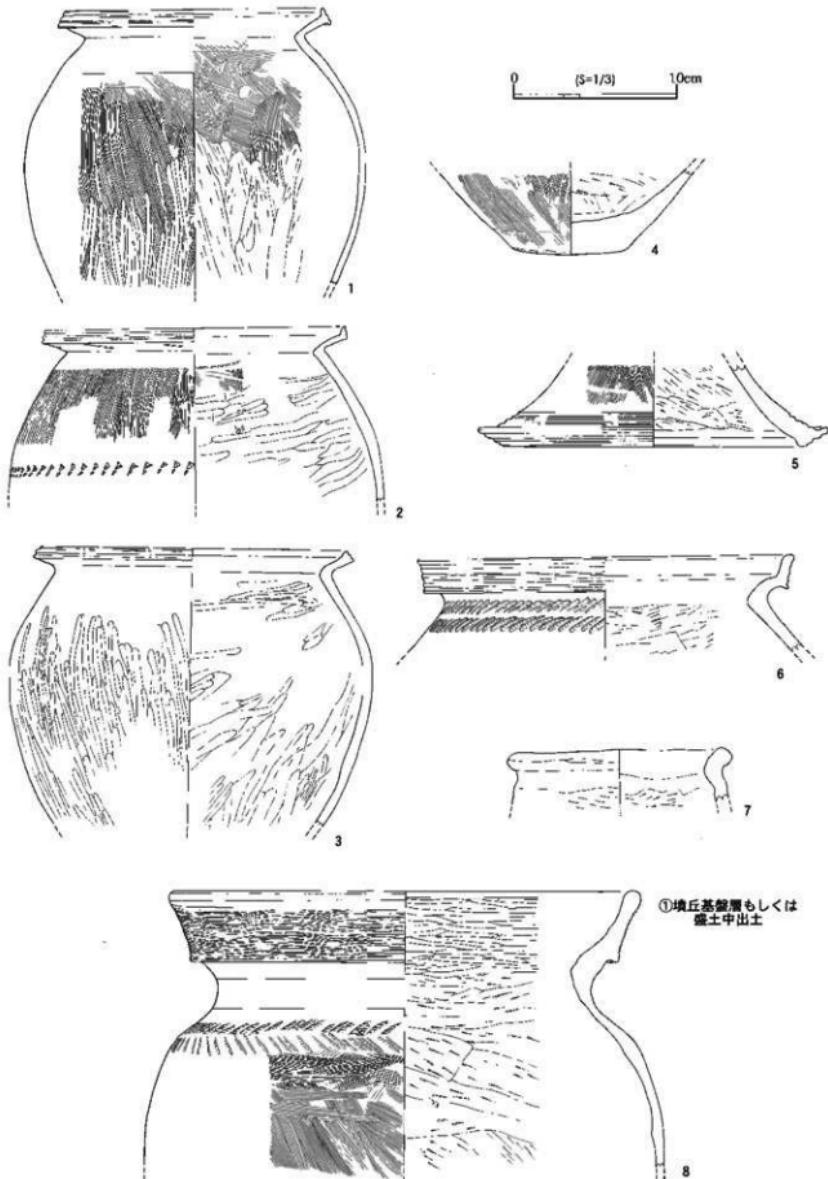
写真図版二一
弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／三号墓



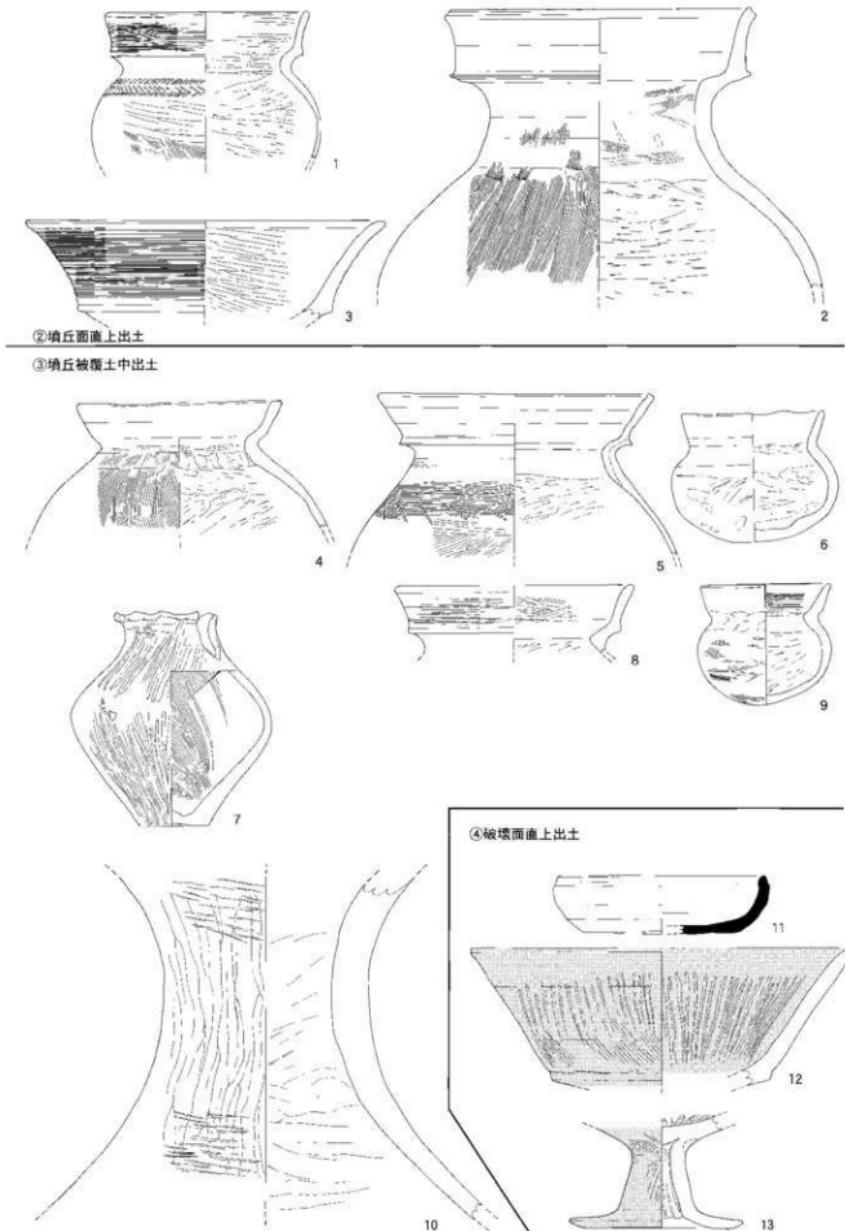
裾部の貼石（東から）

第6表 3号墓関連遺物 観察表

番号	種別	器種	口径	底径	高さ	基高	残存率	調整	色調	旗文・備考
第37回 (埴丘内または基壇上)										
1	弥生土器	甕	(15.8)				口縁一体 内面：口縁部ナデ、脚部上半ハケメ 部全周の40% ナデ・脚部直筋、脚部下半ケズリ/外 面：灰褐色4 40% ナデ・ミガキ/内面：灰褐色4 脚部下トミガキ	口縁に2条の凹線。外面に保付着。		
2	弥生土器	甕	(18.2)				口縁一体 内面：口縁部ナデ、脚部ハケメ後 部全周の40% ナデ・ミガキ/外面：口縁部ナデ、 脚部ハケメ後ナデ	内外面：灰褐色 1	口縁に2条の凹線。脚部に列点文。	
3	弥生土器	甕	(18.6)				口縁一体 内面：口縁部ナデ、脚部ミガキ/外 面：脚部ナデ、脚部ミガキ 25%	内面：灰褐色1 外面：灰褐色3	口縁に2条の凹線。内外面に保付着。	
4	弥生土器	甕か	6.8				部全周の10% 内面：ケズリ/外面：ハケメ	内面：棕褐色1 外面：灰褐色3	底部不安定	
5	弥生土器	高环	(19.0)				底部全周の10% 内面：ケズリ、ナデ/外面：ハケメ、 ナデ	内外面：灰褐色 1	脚部に5条の凹線、脚端部に4条の凹線。	
6	弥生土器	甕	(23.0)				口縁全周 内面：口縁部ナデ、脚部ケズリ/外 面：ナデ	内面：灰褐色1 外面：灰褐色1	口縁に4条の凹線。脚部に斜行側突文。外面に保付着。	
7	弥生土器	甕か	(13.6)				口縁～肩 部全周の10% 内面：ナデ、ケズリ/外面：ナデ	内面：灰褐色3 外面：灰褐色2	外面に保付着。	
8	弥生土器	甕	28.8				口縁全周 の90% 内面：口縁部ミガキ、脚部ケズリ/ 外面：口縁部～肩部ナデ、脚部ハ ケメ	内外面：灰褐色 1	口縁に擬凹線。肩部に羽状文。 外面に保付着。	
第38回 (被覆土中と被焼面)										
1	弥生土器	甕	(12.6)				口縁一体 内面：口縁部～脚部ミガキ、脚部 上半ケズリ/外面：口縁部～脚部ナ デ、脚部上半ミガキ、ハケメ 30%	内外面：灰褐色 1	外面脚部の一部に赤色顔料付着。 口縁に11条以上の擬凹線。肩部に羽状文。	
2	弥生土器	甕	(19.0)				口縁～肩 部全周の80% 内面：口縁部ナデ、脚部ハ ケメ、 脚部ケズリ/外面：口縁部ナデ、脚 部～脚部ハ ケメ	内面：灰褐色1 外面：棕褐色1		
3	土師器	甕	(12.6)				口縁一体 内面：口縁部ナデ、脚部直筋直 底、脚部上半ケズリ/外面：口縁部ナデ、脚 部上半ハケメ 25%	内面：灰褐色2 外面：灰褐色1	口縁外面の一部に黒斑。	
4	弥生土器	甕	(16.8)				口縁～肩 部全周の25% 内面：口縁部ナデ、脚部ケズリ、 脚部ナデ/外 面：口縁部ナデ、脚部ハ ケメ、脚部ハ ケメ、脚部ハ ケメ	内外面：灰褐色 1	脚部に斜行側突文。	
5	土師器	甕	8.8		8.0	全体の90%	内面：口縁部ナデ、脚部ケズリ/外 面：ナデ、ハケメ	内面：棕褐色4 外面：棕褐色3		
6	弥生土器	甕		4.2		全体の90%	内面：口縁部ナデ、脚部ハ ケメ/外 面：口縁部ナデ、脚部ミガキ、底ナデ	内外面：棕褐色2	底外間に黒斑。焼成後穿孔1ヶ所あり。	
7	弥生土器	甕	(14.6)			口縁～脚 部全周の10%	内面：口縁部ミガキ、脚部ケズリ/ 外 面：ナデ	内外面：灰褐色 1	口縁に少なくとも11条のルーズな擬凹線。	
8	土師器	小野丸 底蓋	8.0		7.5	全体の90%	内面：口縁部ナデ、ミガキ、脚部 一捻部ケズリ/外 面：口縁部ナデ、 脚部直筋直底、脚部～底部ハ ケメ	内外面：灰褐色 2	内外面に保付着。	
9	弥生土器	甕台	(22.0)			口縁全周 の10%	内面：ナデ、ミガキ/外 面：ナデ	内外面：灰褐色 1	多条の擬凹線。	
10	弥生土器	甕内				底部のみ 全周の30%	内面：ケズリ/外 面：ナデ、一部ミ ガキか	内外面：白灰色 1		
11	須恵器	坏	(12.4) (9.2)		3.6	全周の25%	内面：ナデ/外 面：ナデ、底部系切 口	内外面：灰色2		
12	土師器	高环	(23.4)			底部全周 の25%	内面：ナデ、ミガキ/外 面：ナデ、ミガキ	内外面：棕褐色 4	赤彩。坏部内面に暗文。底部内 面に暗文。	
13	土師器	高环		10.6		脚部70%	内面：环部ナデ、脚部ケズリ、ナ デ/外 面：ナデ、ハケメ	内面：灰褐色2 外面：棕褐色2	赤彩。坏部内 面の一部に黒斑。	



第37図 3号墓関連遺物実測図①



第38図 3号墓関連遺物実測図(2)

写真図版二三一 三号墓出土遺物



37-1



6



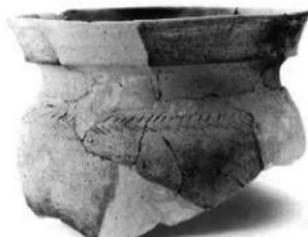
2



7



3



8

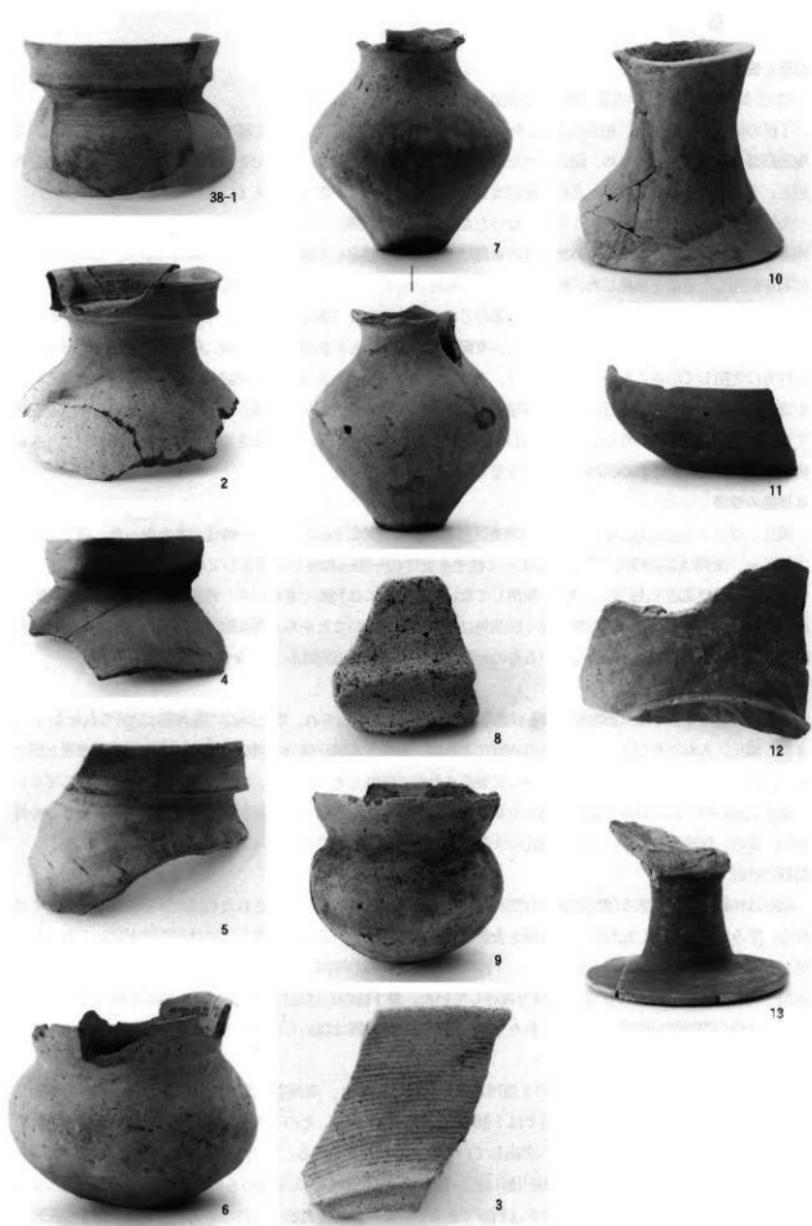


4



5

写真図版二三 三号墓出土遺物



4. 4号墓

位置と調査経過

第39図に全体図を、第40図に突出部部分図を示した。

T区の南東端に位置し、標高約3.3mをベースラインとする四隅突出型墳丘墓である。その大半が南北に通る現道路部分の下にあたるため、調査できた範囲はごく一部に限られる。確認できたのは南北方向にのびる墳丘西辺と、それに伴う2隅のみで、北辺、南辺は長さ3m程度までしか調査を行えていない。

当初は古代の遺構面で保存する方向になったため、古代の遺構が存在しない箇所で下層の遺構の有無について確認する必要があった。そのため調査区の東側にトレントを設定して調査を行った。調査の結果、基壇状の斜面に石を配列した遺構を検出した。検出当初、この基壇状行列の性格や時期等が把握できなかったため、古代の施設に伴う右端状の高まり、もしくは弘生墳墓のどちらかを想定して調査を進めることとした。まず、トレントを調査区南側以外まで拡張したところ、石列が東側に屈曲することが判明した。慎重に精査したところ隅部分が少し外方に突出していることが明らかとなり、このことから墳墓である可能性を認識した。トレントの北側も右列を追いかけるように拡張を行い、南側同様に石列が東に屈曲する地点まで拡張した。隅部分は後世の擾乱を受けた石の多くが消滅していたが2~3個の石が外方に突出している状況が確認できた。この2箇所のコーナーを検出したことにより、これが四隅突出型墳丘墓であることが判明した。

4号墓の規模

墳丘の規模は南北長約17m、東西長は調査区外にのびるため2.9m以上としか確認できなかった。高さは北側で約1m、南側は奈良時代の遺構等によって削平を受け40~60cm程度しか残存していない。平面形態については西辺及び北辺と南辺の一部しか検出してないので明確には判断できないが、西辺の状況を見ると直線的に造られ、北西隅と南西隅の突出部を除く両曲角はほぼ直角に近いことから、平面形は直線的な方形を呈して隅部分に直線的にのびる突出部をもっているものと推測される。主軸方向はN-4°-Wをとる。

墳丘の構築状況と残存状況

墳丘の構築については無遺物層である砂礫層をベース面として造られ、墳丘周辺に周溝等は認められなかった。また、墳丘に入れたサブトレントの断面観察によれば、遺存する墳丘部分の構成土質も無遺物層の砂礫層と同じものと思われ、墳丘が無遺物層を削り出して築造された可能性も考えられる。ただし、墳丘頂部まで遺存していないため無遺物層削り出しのみで築造されたのか、ある程度の盛土を施していたのか、現状では不明と言わざるを得ない。また、埋葬施設についても、墳丘の人半が未調査のため確認できなかった。

貼石の状況

貼石は傾斜角40°の急な墳丘斜面に自然石を貼り付けている。貼石に使用された石は全体形が扁平なものではなく、厚みをもつ角錐の比較的平らな面を表面にして貼り付けている。石の貼り方には規則性が認められ、横目地がよくとれる。縦目地はあまり通らず、下段の隣り合った石の隙間に、上の石を重ねる原則が認められる。石は20~60cm程度の大きさで、2~4段分残存していた。最下段の石は縦位置に置いて下端面を揃えている。墳頂部には他の四隅突出型墳丘墓に見られた立石や敷石などの設置は認められなかった。

突出部の状況

突出部は南西突出部と北西突出部の2箇所を検出した(第40図)。南西突出部は傾斜角15°を測り、稜線上に先端まで一列に石が並べられる。現状では7個の石が遺存している。そのうち先端の2個程度は墳丘幅ラインの交点より外側に延びており、墳丘外へ突出しているとみることができる。突出した部分の長さは約70cmである。突出部に用いた石は20~40cm程度の梢円形に近い石を使っているが、先端部のものは三角形に近い平面形状をしている。これが意図的なものかどうかは判断できない。この突出部先端の左右に拳大的な円錐が1個ずつ配置されている。この性格については列石のように培塿をめぐっていた可能性も考えられたが、培塿周辺にはこれ以外

の円礫やそれを設置した痕跡も認められず、調査区に設けたセクションを観察してもそのような形跡は一切認められなかった。突出部先端面脇にのみ意図的に配置されたものと考えられるが、その性格等については他に類例もないことから把握できなかった。

北西突出部は後世の搅乱により遺存状況が悪かったものの、先端に碎けたものを含む3個の石が残存していることから、南西突出部と同じ形態であったと推測される。埴丘外への突出部の長さは約70cmを測る。先端部の石は破損しているので形状は不明であるが、残りの2個は南西突出部同様に20~40cm程度の楕円形の石を用いていた。また、先端部面脇に南西突出部で見られた円礫が存在していたかどうかは確認できなかった。

4号墓の突出部の評価

4号墓を四隅突出型埴丘墓と捉えるうえではいくつか問題があった。定型化した典型的な四隅突出型埴丘墓と比較してみると、突出部や配石構造に明確な差異が認められる。まず4号墓の突出部は1列の石列のみで構成されており、平面的な広がりをもつ定型的な突出部とは異なる。規模も突出度合いも明らかに小さい。また埴頂に付加された立石や敷石などの列石をもたない。このような点で、研究史上定義されてきた四隅突出型埴丘墓と同概念のもとで扱うことが妥当かどうか、慎重に検討する必要がある。

結論を急げば、4号墓は四隅が埴丘外へと突出するという基本的な属性要件の面で、四隅突出型埴丘墓と一連の墓制にあると考えられる。それは下記の理由による。まず、突出部に使用されている石材の面から。埴丘斜面の貼石に用いられている石材は角礫が中心であり、表面には凹凸の少ない平坦な面がそろえられている。これによって、あたかも近世城郭の石垣のごく整った斜面を形成している。これに対して突出部の石材は丸味を帯びた円礫であり、その差異は視覚的にも顕著に認識することができる。これはコーナーとなる隅部を明確に表示する意識のもとで作られたと認められよう。

また、このコーナーに並ぶ一列の石列は埴丘の外へわずか70cmながら飛び出し、埴丘外と埴丘内をつないでいる。単に隅部に石を付け足して突出させるのではなく、埴丘斜面が交わる高い位置から一連の構造物が飛び出す、という点で四隅突出型埴丘墓の構造原理と共通する。これはいわゆる方形貼石墓とは一線を画す、明確かつ決定的な違いである。

そう考えれば、4号墓は列石をもたないが四隅突出型埴丘墓の類型といえる。このように小さな突出部で列石をもたないという構造上の特徴は三次盆地の宗祐池西1号墓と類似している。この宗祐池西1号墓は最古型の四隅突出型埴丘墓と評価されており、同様な形態をとる4号墓も型式的には四隅突出型埴丘墓と捉えることができる。

4号墓の時期

4号墓の詳細な築造時期については、主体部等を検出してないことなどから決定する資料を欠き、断定することができない。しかしながら時期を考えるために、情報をもう一度整理してみると以下の3点に要約される。

- 1) 墓丘基盤面が無遺物層をベースとして築造されている。
- 2) 墓丘覆土は弥生時代前期~中期後葉の包含層で、中期後葉より新しいものは含まれない。
- 3) 突出部の形態などが、最古型式の四隅突出型埴丘墓とされる三次市宗祐池西1号墓に類似している。

宗祐池西1号墓の時期は弥生中期後葉とされている。三次盆地と出雲平野の共時変化を前提とし、四隅突出型埴丘墓の埴丘形態を型式学的に扱うことが可能であれば、4号墓も近い時期に築造されたと推定しうる。上記の層位関係では4号墓の築造が中期後葉以前と考えられ、これと齟齬しない。よって直接的な根拠が乏しいが4号墓の築造時期は弥生中期後葉の可能性が最も高く、被覆土堆積との時間差を考慮すればそれより若干古くなる可能性が残る。

4号墓周辺出土土器（第41図~第43図）

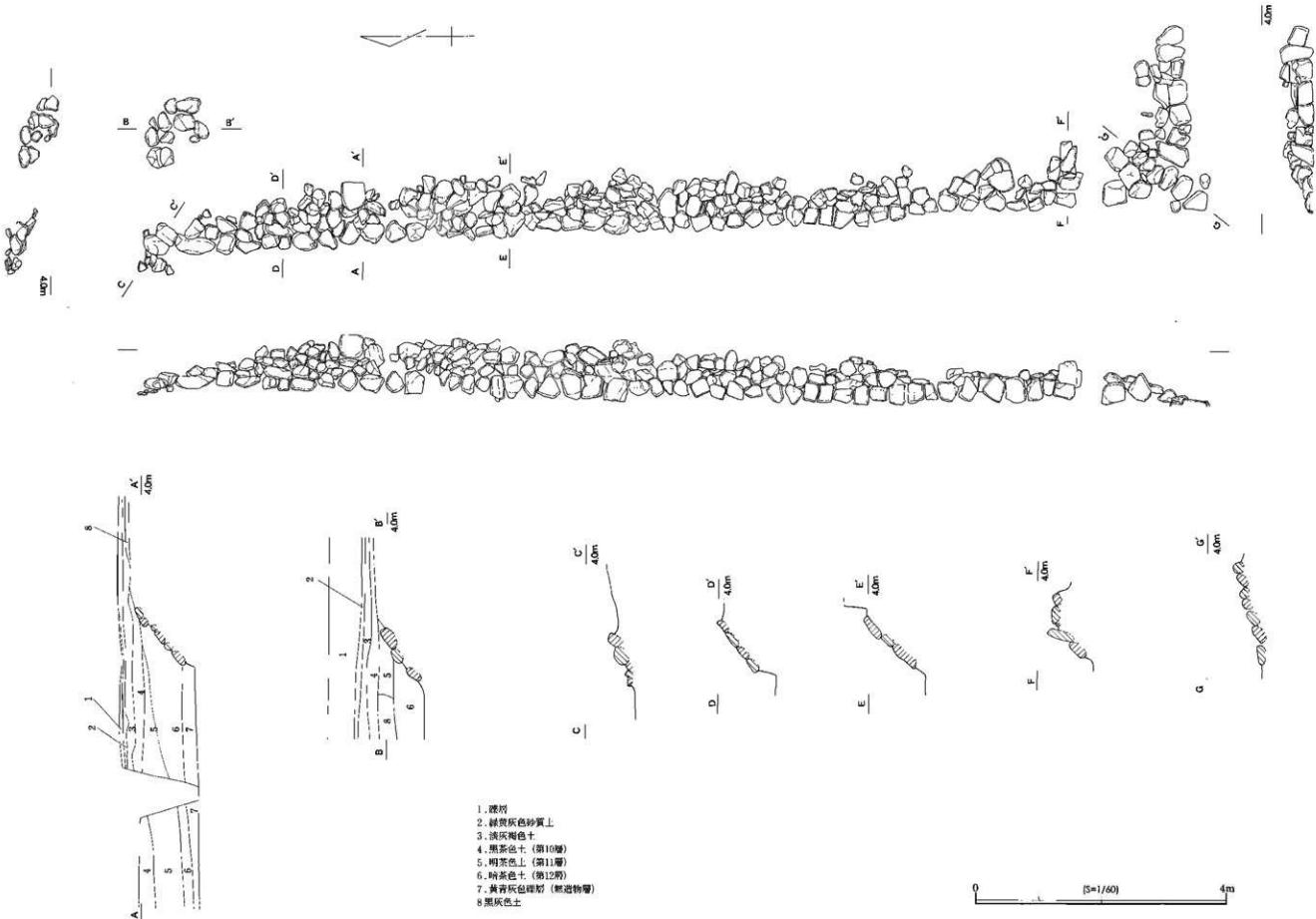
4号墓はその大半が未調査で主体部等も確認していない。そのため確実に共存する遺物も皆無であり、埴丘貼石上面に接しているものもなかった。しかし、ある程度時期を絞り込む必要があり、埴丘を覆っている第12層包

含幅出十の土器から検討するためここに掲載した。残存状況からみていずれも原位置を保つものが無く、二次的に混入したものと考えられる。

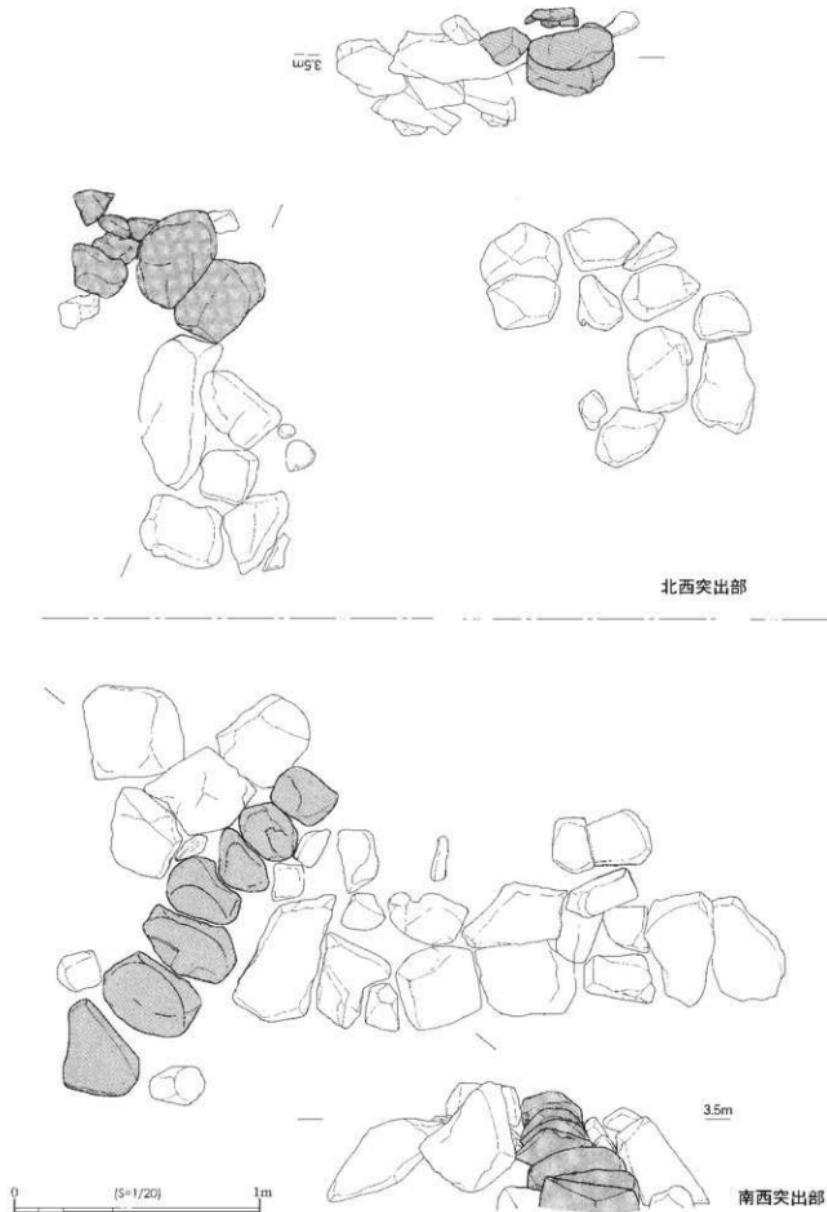
第41図～第42図3は壺である。第41図1、2は口縁部が緩やかに外反してのびるもので、頸部下方に1条の沈線を施している。これらは弥生時代前期の様相を示している。3～6は頸部に貼り付け突帯文を施すもので、くりあげ口縁の外面に凹線を施したものである。3は口縁部外面に円形浮文を貼り付けている。5は口縁部外面に円形浮文と棒状浮文を施している。7～第42図3は頭部外面に突帯を持たず、くりあげ口縁の外面に凹線文を施すもので、7、8、11の口縁部は短めにのびるものである。また、15は小形のものであるが、頸部上方に円孔を穿つものである。頭部中央に最大径を有する。第42図2、3はくりあげ口縁の下方が横方向に突出しているものである。これらはIV-2の様相を示している。

第42図4～第43図4は壺である。4は口縁部が緩やかに外反するもので、端部に綾杉状の刺突文を施し、頸部に小さな段を有する。5～第43図3は口縁部が外方に大きく開く壺の口縁部である。5は口縁端部が平らに近く、外面に貝殻状工具による刺突文を施している。口縁端部外面に4条の凹線文を施し、口縁内面には5～7条の凹線文を2段施して、その間に凹線文が上方に来るよう重弧文が装飾されている。7は口縁端部がやや上方を向くもので、外面に斜格子文を施している。頸部付近の外面には凹線文を施している。第43図1は口縁端部が下方に突出するもので、外面には斜格子文を施したち円形浮文を貼り付けている。口縁内面には刻み目突帯を貼り付け、波状文などで装飾している。頸部外面に4条以上の突帯を施す。2は口縁端部がやや上方を向くもので、端部外面に斜格子文と円形浮文を施す。口縁外面には突帯を施す。3は口縁端部がやや上方に向く、下端が下方に突出するもので、外面に凹線文を施している。4は口縁部がくりあげ状を呈してやや内傾してのびるもので、外面に凹線文を施している。頸部外面に3条以上の凹線文を施し、凹線文の間にやや斜め方向の刺突文を施している。これらはIV-1～2の様相を示している。

第43図5～11は高壺で、5～8は坯部、9～11は脚部である。5は口縁部は内湾してのび端部は平らに近い。口縁部外面に4条の凹線文を施している。6は口縁端部が外方に屈曲するもので、外面に刺突文、内面に凹線文を施している。7は口縁部が内湾してのびるもので端部外面に刻み目文と2条の凹線文を施している。口縁部外面に4条以上の凹線文を施している。8は口縁部がやや直立ぎみに立ち上がるもので、外面に凹線文、口縁端部に刻み目文と凹線文を施している。9、10は脚部端部が上方に突出し、脚部外面に5条以上の凹線文を施している。11は脚部端部上面に刺突文を施すものである。これらはIV-2の様相を示すものである。



第39图 4号墓实测图



第40図 4号墓南西・北西突出部実測図

写真図版二四　弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／四号墓



上：南から

下：南西突出部（南西から）

写真図版二五
弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／四号墓



上：北から
下：北西突出部（北西から）

写真図版二六
弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／四号墓



写真図版二七

弥生時代の遺構／四隅突出型墳丘墓／四号墓／土層断面



上：東西方向断面（北から）
下：南北方向断面（東から）